京都府遺跡調査概報

第 30 冊

1. 青野遺跡第11・13次
2. 蒲生遺跡第3次
3. 木津川河床遺跡
4. 長岡京跡右京第251・255次

1988

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは，京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し，その活用及び研究を行い，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努めるべく，常に努力いたしております。当調査研究センターも発足して7年が過ぎ，年々事業量が増加していくなかで，一層精密な調査を実施し，正確な記録を作成し，これらを後世に伝えるように常に心がけています。そうした基本姿勢のもとで，昭和62年度に実施した発掘調査は，44件にのぼります。そのうち，本書に収めましたのは，青野遺跡第11・13次，蒲生遺跡第3次，木津川河床遺跡，長岡京跡右京第251・255次，遺跡数にして4か所の発掘調査の概要です。

当調査研究センターでは，本書を含めて，「京都府遺跡調査報告書」・「京都府埋蔵文化財情報」も刊行しております。これらが関係各位の参考に供され，斯学向上の一助となれば幸いです。

なお，本書に掲載した調査の実施にあたりましては，発掘調査を委託された京都府中丹土地改良事務所，京都府教育委員会，京都府土木建築部，京都府乙訓土木事務所等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく，酷暑・極寒の中で多くの方がたが熱心に作業に従事していただきましたことを特記して，これらの方がたに厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は，次のとおりとする。

　1.　青野遺跡第11・13次　　2.　蒲生遺跡第３次　　3.　木津川河床遺跡

　4.　長岡京跡右京第251・255次

2.　各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 青野遺跡第11・13次	綾部市青野町吉美前	昭61. 12. 3 ～ 昭62. 3. 12 昭62. 10. 26 ～ 昭63. 2. 20	京都府中丹土地改良事務所	引原　茂治 森下　衛
2. 蒲生遺跡第３次	船井郡丹波町豊田	昭62. 12. 14 ～ 昭63. 2. 4	京都府教育委員会	森　正
3. 木津川河床遺跡	八幡市八幡一丁畑・焼木	昭61. 5. 23 ～ 昭62. 2. 24	京都府土木建築部	岩松　保
4. 長岡京跡右京第251・255次	長岡京市粟生畑ケ田・川久保地内	昭61. 12. 9 ～ 昭62. 3. 19	京都府乙訓土木事務所	石尾　政信

3.　本冊の編集には，調査第１課資料係が当たった。

目　　次

1.　青野遺跡第11・13次発掘調査概要…… 1

2.　蒲生遺跡第３次発掘調査概要……21

3.　木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要……25

4.　長岡京跡右京第251・255次発掘調査概要……65

挿 図 目 次

青野遺跡第11・13次

第 1 図　周辺遺跡分布図…… 1
第 2 図　調査地周辺図…… 2
第 3 図　調査地平面図…… 3
第 4 図　SB86103実測図 …… 4
第 5 図　SB86104・SB86110実測図 …… 4
第 6 図　SB86105実測図 …… 5
第 7 図　SB86107・SK86116実測図 …… 6
第 8 図　SB87901実測図 …… 7
第 9 図　出土遺物実測図(1)…… 9
第 10 図　出土遺物実測図(2)…… 9
第 11 図　出土遺物実測図(3)……10
第 12 図　出土遺物実測図(4)……10
第 13 図　出土遺物実測図(5)……12
第 14 図　出土遺物実測図(6)……13
第 15 図　出土遺物実測図(7)……13
第 16 図　出土遺物実測図(8)……14
第 17 図　出土遺物実測図(9)……15
第 18 図　出土遺物実測図(10)……15
第 19 図　出土遺物実測図(11)……17

蒲生遺跡第 3 次

第 20 図　周辺遺跡分布図……22
第 21 図　調査地位置図……23
第 22 図　トレンチ西半部遺構図……24

木津川河床遺跡

第 23 図　調査地位置図……25
第 24 図　調査トレンチ配置図……26
第 25 図　第1トレンチ検出遺構……28

第 26 図　第２・３トレンチ主要遺構配置図……29
第 27 図　SH10・SH94実測図 ……30
第 28 図　SH47・48・49・91平面実測図 ……31
第 29 図　SH47・48・49・91南北土層図，SR95南壁北側土層図 ……32
第 30 図　SH89平面図 ……33
第 31 図　SH89北壁東西土層実測図 ……33
第 32 図　土坑群平面実測図……34
第 33 図　主要土坑実測図……35
第 34 図　SX50・SX92実測図……36
第 35 図　SX87・SX88実測図……36
第 36 図　SB32実測図 ……37
第 37 図　第３トレンチ検出遺構平面図……38
第 38 図　出土遺物実測図(1)……42
第 39 図　出土遺物実測図(2)……43
第 40 図　出土遺物実測図(3)……44
第 41 図　出土遺物実測図(4)……45
第 42 図　出土遺物実測図(5)……46
第 43 図　出土遺物実測図(6)……47
第 44 図　出土遺物実測図(7)……48
第 45 図　出土遺物実測図(8)……49
第 46 図　出土遺物実測図(9)……50
第 47 図　出土遺物実測図(10)……51
第 48 図　周辺遺跡分布図……53

長岡京跡右京第251・255次

第 49 図　調査地位置図……65
第 50 図　右京第255次調査　遺構平面図 ……67
第 51 図　右京第255次調査　北壁断面図 ……67
第 52 図　右京第251次調査　第１トレンチ遺構平面図 ……68
第 53 図　右京第251次調査　第２～４トレンチ遺構平面図 ……69
第 54 図　右京第251次調査　第５トレンチ遺構平面図 ……70
第 55 図　右京第251次調査　第４トレンチ北壁断面図 ……71
第 56 図　SK25108実測図……72

第 57 図　出土遺物実測図(1)……73
第 58 図　出土遺物実測図(2)……74
第 59 図　SK25108出土遺物実測図……76
第 60 図　石器類実測図……77

付 表 目 次

青野遺跡第11・13次

付 表 1　石製品一覧表……18

木津川河床遺跡

付 表 2　各調査トレンチ概要……27
付 表 3　周辺遺跡(弥生～古墳前)消長表……54
付 表 4　出土遺物観察表……57

図 版 目 次

青野遺跡第11・13次

図版第１　(1)第11次調査地全景(南東から)　(2)第13次調査地全景(南東から)

図版第２　(1)竪穴式住居跡SB86105(西から)　(2)竪穴式住居跡SB86107(北から)

図版第３　(1)竪穴式住居跡SB86102(北東から)　(2)竪穴式住居跡SB86104(南から)

図版第４　(1)竪穴式住居跡SB86103(南から)

(2)竪穴式住居跡SB86110(南西から)

図版第５　(1)竪穴式住居跡SB87901(北から)

(2)竪穴式住居跡SB87901特殊ピット(南から)

図版第６　(1)土坑SK87116(南東から)

(2)土坑SK87116遺物出土状況(北西から)

図版第７　(1)土坑SK86107(北東から)　(2)土坑SK86101(東から)

図版第８　(1)土坑SK87104(東から)　(2)溝状遺構SD86110(北東から)

図版第９　(1)溝状遺構SD87901(北西から)　(2)溝状遺構SD87901断面(南東から)

図版第10　(1)溝状遺構SD87909(北から)　(2)溝状遺構SD87909断面(南から)

図版第11　出土遺物(弥生土器１)

図版第12　出土遺物(弥生土器２)

図版第13　(1)出土遺物(土師器１)　(2)出土遺物(土師器２)

図版第14　(1)出土遺物(土師器３)　(2)出土遺物(石器１)

図版第15　(1)出土遺物(石器２)　(2)出土遺物(石器３)

蒲生遺跡第３次

図版第16　(1)調査前全景(東から)　(2)調査後全景(東から)

木津川河床遺跡

図版第17　(1)調査着手前全景(西北から)　(2)第２トレンチ検出素掘り溝群(西から)

図版第18　(1)第２トレンチ検出遺構(西から)　(2)SH10全景(南から)

図版第19　(1)SH10床面検出炉跡　(2)SH10床面石皿検出状況

(3)SH10床面土器出土状況　(4)SH10床面土器出土状況

図版第20　(1)SH94全景(東南から)　(2)SH89床面遺物出土状況(西南から)

図版第21　(1)SH47・48・49・91検出状況(東から)　(2)土坑群検出状況(北から)

図版第22　(1)SH47床面検出粘土塊　(2)SH48炉跡

(3)SH89炉跡　(4)SX50・87・88
図版第23　(1)第1トレンチ全景(北から)　(2)第3トレンチ全景(南から)
図版第24　出土遺物(1)
図版第25　出土遺物(2)
図版第26　出土遺物(3)
図版第27　出土遺物(4)
図版第28　出土遺物(5)
長岡京跡右京第251・255次
図版第29　(1)第255次調査地全景　(2)第255次調査地(西から)
図版第30　(1)第251次・第1トレンチ(東から)
(2)第251次・第1トレンチ(西から)
図版第31　(1)第251次・第2トレンチ(西から)
(2)第251次・第2トレンチ(東から)
図版第32　(1)第251次・第3トレンチ全景(東から)
(2)第251次・第4トレンチ全景(東から)
図版第33　(1)第251次・第3・4トレンチ(西から)
(2)第251次・第5トレンチ西部(西から)
図版第34　(1)第251次・第2トレンチP.49柱根
(2)第251次・第2トレンチP.1黒色土器出土状況
(3)第251次・第4トレンチ下層(西から)
(4)第251次・第4トレンチ北壁断面(東端)
図版第35　(1)SK25109遺物出土状況　(2)SX25106遺物出土状況
(3)SK25103遺物出土状況　(4)SK25108遺物出土状況
図版第36　出土遺物(1)
図版第37　出土遺物(2)

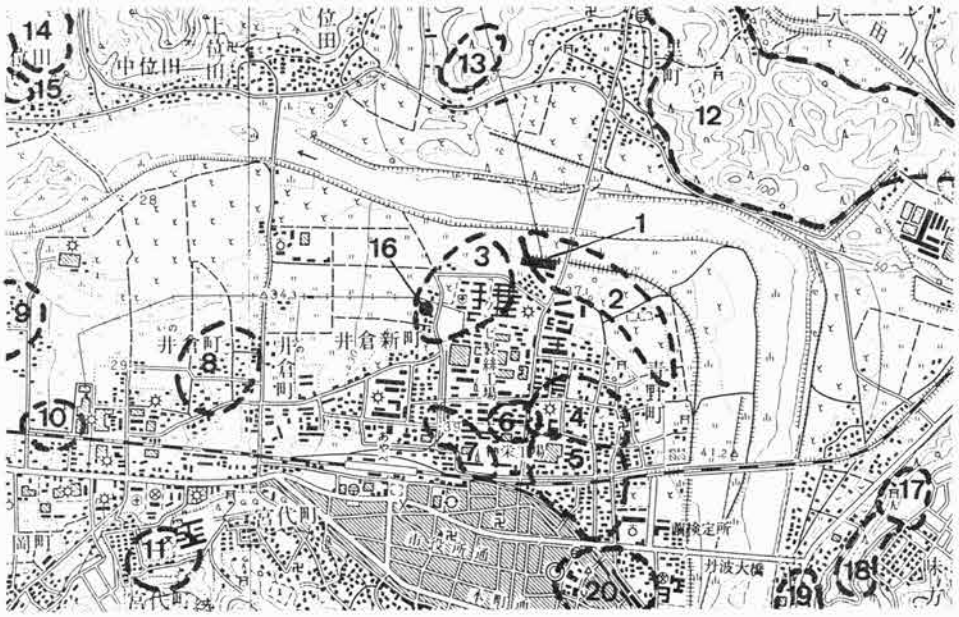
1. 青野遺跡第11・13次発掘調査概要

1. はじめに

青野遺跡は，弥生時代中期から中世に及ぶ府下有数の複合集落遺跡である。京都府綾部市青野町の，由良川が綾部市街地の北部で屈曲して西方に流路を変える左岸自然堤防上に位置している。その範囲は，東西400m・南北300mに及ぶものと推定されている。

青野遺跡の調査は，昭和47年に関西電力青野変電所の建設に伴う青野A地点調査(注1)（第1次）より始まり，数次にわたって調査が実施されてきた。その成果は多大なものがあり，特に第1次調査では，弥生時代後期と古墳時代前期・後期の三時期に大別される住居跡16基，溝，土坑等多数の遺構を検出し，中でも「青野型」と呼ばれる特異な平面形態をもつ住居跡の検出は注目された。

また，青野遺跡の周辺には，青野西遺跡・青野南遺跡・綾中遺跡・西町遺跡などの集落遺跡が密集している。特に青野南遺跡(注2)では，7世紀後半の大規模な掘立柱建物跡群を検出



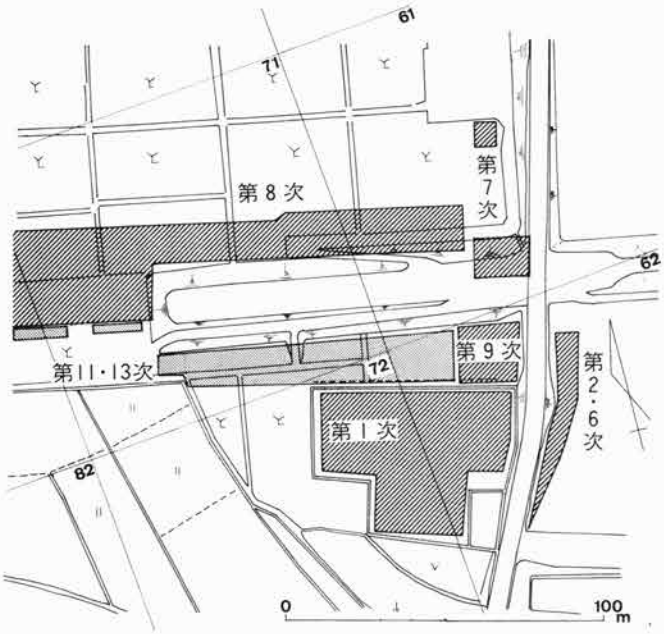
第1図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

1. 調査地　2. 青野遺跡　3. 青野西遺跡　4. 青野南遺跡　5. 綾中遺跡　6. 西町北大坪遺跡　7. 西町遺跡　8. 大将軍遺跡　9. 延遺跡　10. 岡町遺跡　11. 明智平遺跡　12. 久田山古墳群・遺跡　13. 里古墳群　14. 位田遺跡　15. 稲荷古墳群　16. 青野大塚古墳　17. 斎神社裏山古墳群　18. 平古墳群　19. 味方遺跡　20. 綾部陣屋跡

しており，集落及び官衙施設との複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は，青野遺跡の一画に広域営農団地農道整備事業が計画されたために，京都府教育委員会・京都府中丹土地改良事務所が協議を重ね，事前に発掘調査を実施することとなった。

調査にあたっては，当調査研究センターが京都府中丹土地改良事務所と委託契約を締結し，下記のとおり実施した。



第2図　調査地周辺図

第11次調査(昭和61年度)　調査課主任調査員水谷寿克・調査員西岸秀文が担当し，昭和61年12月3日から現地調査に着手，昭和62年3月12日に現地説明会を開催，同年3月20日にすべての現地調査を終了した。調査面積は，700m²である。

第13次調査(昭和62年度)　調査第2課調査第1係長辻本和美・主任調査員引原茂治が担当し，昭和62年10月26日から現地調査に着手，昭和63年2月20日に現地説明会を開催，同年3月16日にすべての現地調査を終了した。調査面積は，630m²である。

なお，発掘調査次数や地区割り等については，綾部市教育委員会が青野遺跡調査において使用している次数・調査方法を踏襲した。

発掘調査にあたっては，地元有志の方々や学生諸君に，調査補助員・整理員・作業員として協力していただいた。(注3) また，依頼者である京都府中丹土地改良事務所をはじめ，京都府教育委員会・京都府中丹教育局・綾部市教育委員会等の関係諸機関からもご協力いただいた。なお，綾部市教育委員会技師中村孝行氏からは格別のご協力・ご教示があったことを特記して感謝したい。

本稿は，第11次・第13次調査をまとめて報告するものであり，執筆は，上記引原・森下衛・田代　弘が行った。なお，第13次調査については，現地終了直後の執筆であり，現時点で時期等が判明している遺構・遺物についてのみ記載することとしたい。

なお，発掘調査に係る経費は，全額京都府中丹土地改良事務所が負担した。

（水谷寿克）

2. 検 出 遺 構

二次にわたる調査で検出した遺構は，竪穴式住居跡・土坑・溝状遺構などである。調査地東半部には，かなり遺構が集中し，複雑に重なり合っている。西半部には少ない。調査地は，青野遺跡西端部にあたり，その西側には，由良川旧流路が想定されている。(注4) 調査地西半部では，遺構検出面が，西側に向かって緩やかに傾斜して下降している。その状況からみて，調査地西半部は，旧由良川の右岸付近にあたるものと推定され，そのために，遺構が少ないのであろう。

基本的な層序は，東半部では，表土および旧耕土下が遺構面になる。西半部では，旧耕土層が数層あり，その下に，所々に，水による堆積とみられる遺物をふくむシルト層がある。その下が遺構面である。

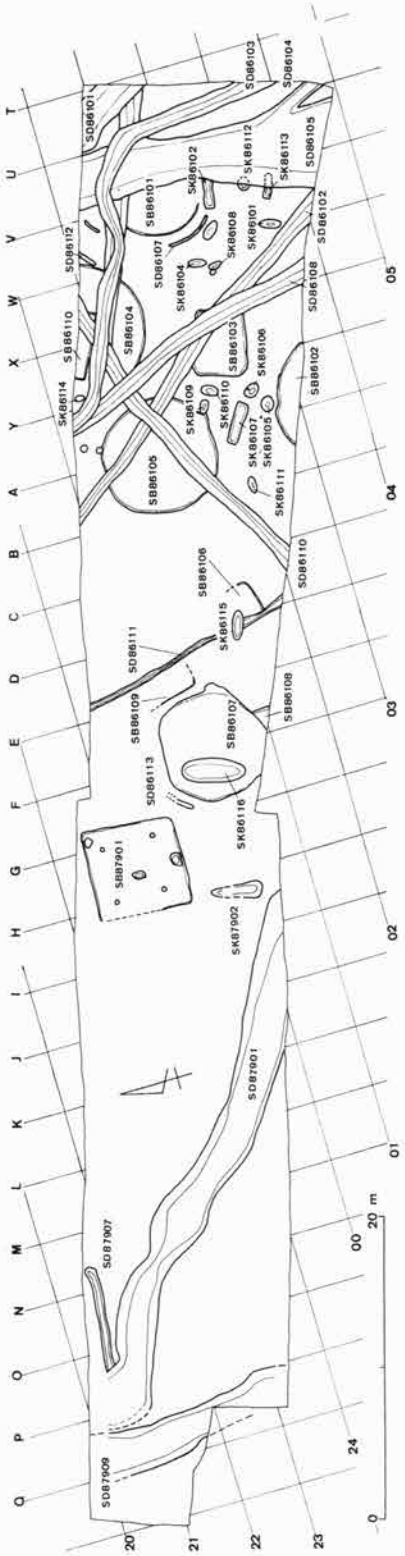
(1) 竪穴式住居跡

検出した竪穴式住居跡は，11基である。平面が円形のものが5基，方形のものが6基である。

a. 竪穴式住居跡SB86101

円形の平面形をもつ。残存状況は悪く，壁高はほとんどない。わずかに周壁溝が残存することによって，住居跡とわかる。東半部が残存していないので，正確な規模は不明であるが，ほぼ直径6m前後とみられる。

この住居跡からは，弥生時代中期後半頃の



第3図 調査地平面図

土器が出土している。

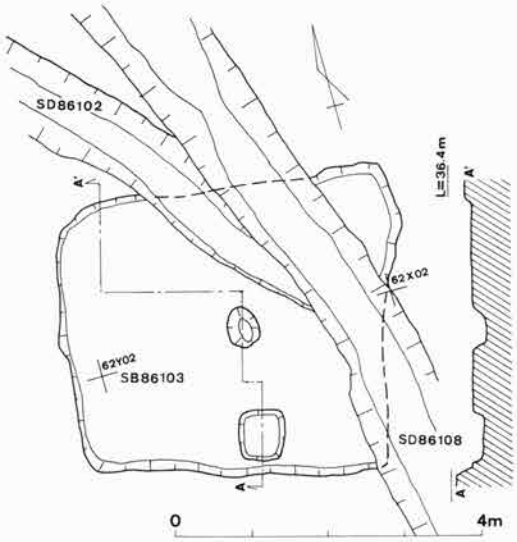
b.　竪穴式住居跡SB86102

円形の平面形をもつものとみられる。部分的検出であり，規模は不明である。残存壁高は，約15cmである。周壁溝をもつ。弥生時代中期後半頃の土器が出土している。

c.　竪穴式住居跡SB86103

（第４図）

ややいびつな方形の平面形をもつ。一辺約4mの，小規模な住居跡である。残存壁高は，約20cmである。周壁溝はない。柱穴もみられない。住居跡南辺ほぼ中央に，方形の掘り込みがある。「特殊ピット」(注5)と呼ばれるものである。また，住居跡ほぼ中央にも土坑状の掘り込みがある。

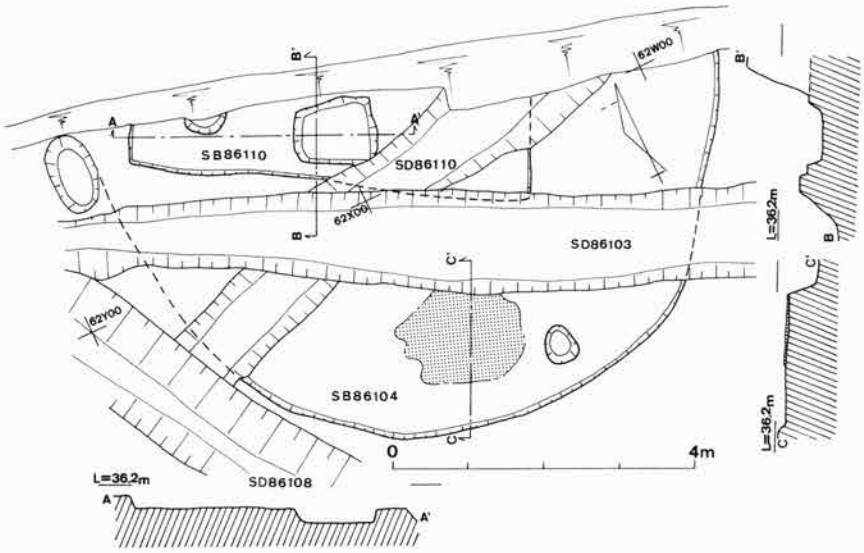


第４図　SB86103 実 測 図

住居跡南東隅から北辺中央にかけて，溝状遺構がのびており，住居跡は，この溝状遺構に切られている。弥生時代後期終末頃の住居跡とみられる。

d.　竪穴式住居跡SB86104（第５図）

円形の平面形をもつ。全容のほぼ半分を検出した。溝状遺構や他の住居跡に切られてお



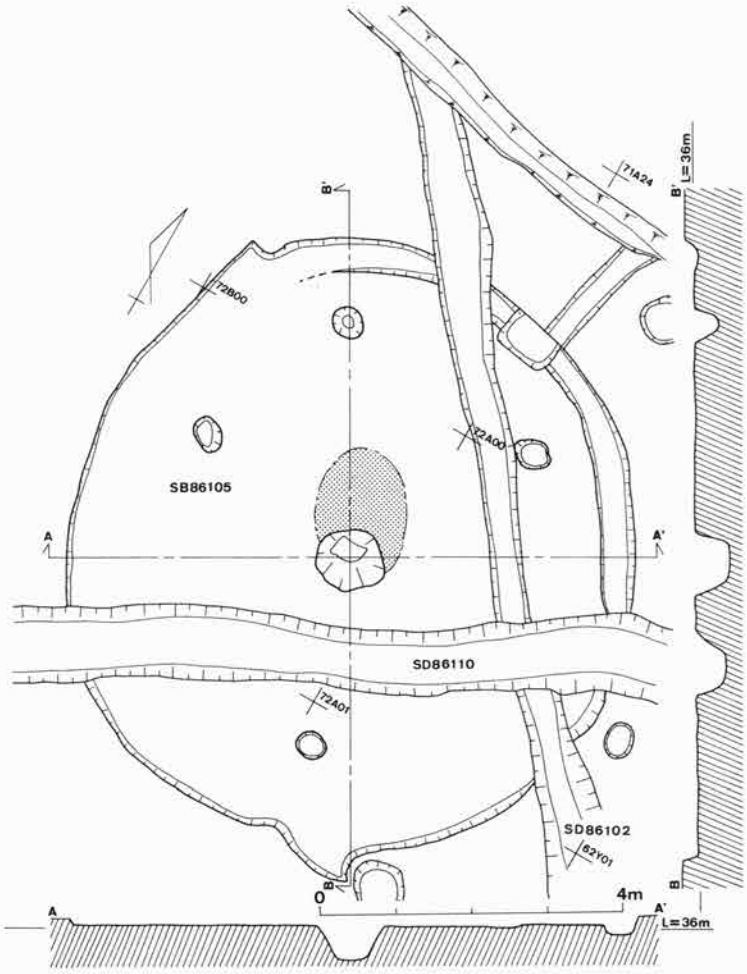
第５図　SB86104・SB86110 実 測 図

り，明確な規模は不明であるが，直径8m前後の規模になるものとみられる。残存壁高は，約10cmである。周壁溝はない。住居跡南側に焼土が広がっている。弥生時代中期後半頃の土器が出土している。

e. 竪穴式住居跡SB86105

（第6図）

円形の平面形をもつ。直径は6.4mである。残存壁高は，約30cmである。北側壁に沿って幅約40cmの周壁溝が部分的にめぐる。中央部に土坑状の掘り込みがあり，その周辺に焼土が広がっている。また，柱穴とみられるピットが4か所にある。



第6図　SB86105実測図

住居跡の北側に方形の掘り込みがある。青野遺跡では，方形竪穴式住居跡の南辺もしくは南東辺に，このような方形の掘り込みをもつものがある。この住居跡の掘り込みは，それらのものとは位置がちがい，どのような性格のものかは不明である。この住居跡から，弥生時代中期後半頃の土器が出土している。

f. 竪穴式住居跡SB86106

方形の平面形をもつものとみられる。残存状況が悪く，南辺の一部および南東隅部分を検出したのみであり，規模は不明である。残存壁高は，約5cmである。周壁溝はない。良好な出土遺物がなく，断定はできないが，弥生時代後期末頃の住居跡と推定される。

g. 竪穴式住居跡SB86107(第７図)

ややいびつであるが，円形の平面形をもつ。直径は，6.8mである。残存壁高は，約10cmである。周壁溝はない。中央部に土坑状の掘り込みがあり，その周辺に焼土がみられる。柱穴とみられるピットが３か所にある。この住居跡の床面から土坑を検出しており，住居跡はこの土坑より後出する。出土土器から，古墳時代前期の住居跡とみられる。

h. 竪穴式住居跡SB86108

残存状況が悪く，方形住居跡の東辺の一部分を検出したのみである。残存壁高は，約10cmである。確実に伴う遺物がなく，時期は不明である。

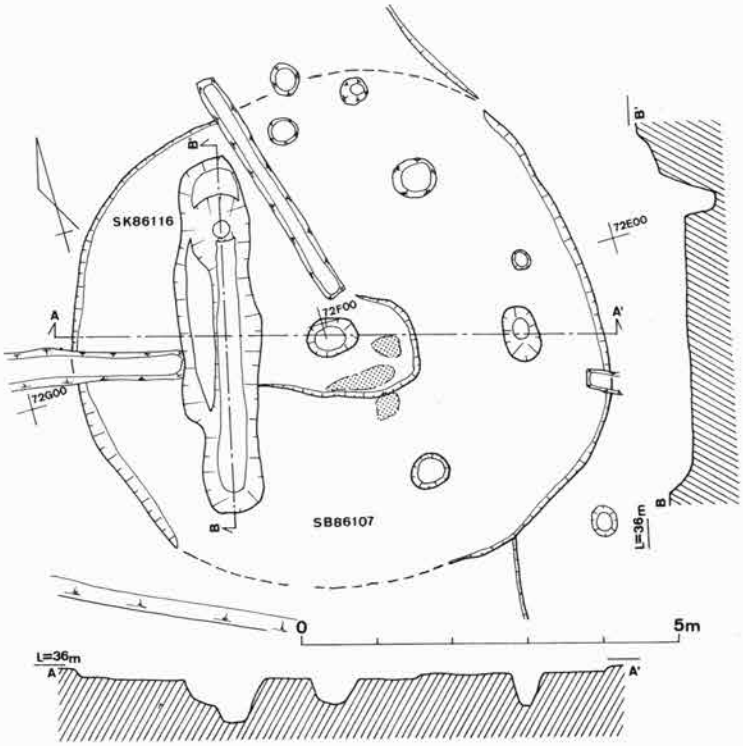
i. 竪穴式住居跡SB86109

残存状況が悪く，方形住居跡の西辺の一部および南西隅部分を検出したのみである。残存壁高は，約10cmである。周壁溝はない。出土土器から，弥生時代後期終末頃の住居跡とみられる。

j. 竪穴式住居跡SB86110(第５図)

方形の平面形をもつ。全容は調査地外にのびるため，検出できたのは，南辺付近のみである。一辺は5.2mである。残存壁高は，約10cmである。住居跡の南辺ほぼ中央付近に，方形の掘り込み(「特殊ピット」)をもつ。周壁溝はない。

この住居跡は，竪穴式住居跡SB86104や溝状遺構と重なり合っているが，層序観察によると，SB86104より後出するものである。また，溝状遺構よりは先行する。確実に伴う



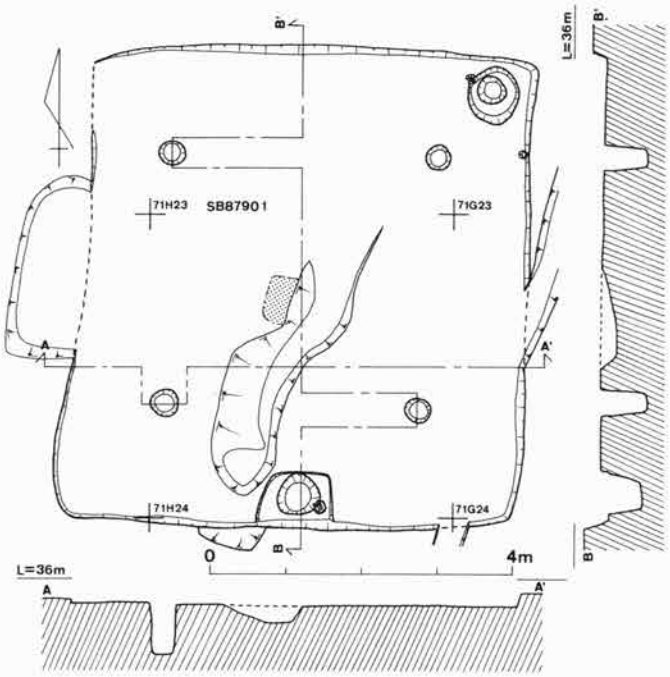
第７図　SB86107・SK86116 実測図

遺物がなく，時期は不明であるが，竪穴式住居跡SB86103と構造的に類似しており，ほぼ同様の時期かと推定される。

k. 竪穴式住居跡

SB87901(第8図)

方形の平面形をもつ。一辺は6mである。残存壁高は，約20cmである。周壁溝はない。南辺中央に，上部を方形，下部を円形に，二段に掘り込んだ土坑(「特殊ピット」)をもつ。また，北東隅にも，円形に二段に掘り込んだ土坑をもつ。さらに，柱穴とみられるピットが4か所にある。中央部には焼土の堆積がみられる。



第8図　SB87901 実測図

この住居跡の「特殊ピット」内から，畿内布留式並行期の土師器甕が出土している。また，北東隅の円形土坑周辺から，小型丸底土器が出土している。その他，この住居跡から出土した土器は，すべて畿内布留式並行である。これらの土器からみて，この住居跡は，古墳時代前期に位置づけられるものとみられる。また，この住居跡は，これまで青野遺跡内で確認された住居跡のうちでは，最西端に位置するものである。

(2) 土　坑

検出した土坑は，17基である。形状から4種に分類できる。a．長方形土坑，b．長楕円形土坑，c．楕円形土坑，d．円形土坑である。

a．長方形土坑――SK86102・SK86107・SK86113

b．長楕円形土坑―SK86115・SK86116・SK87902

c．楕円形土坑――SK86101・SK86103・SK86104・SK86106・SK86108・SK86110
SK86111・SK86112・SK86114

d．円形土坑――SK86105・SK86109

これらの土坑は，幅については，dのSK86105の直径1.2mを除けば，1m未満である。

長さについては，ｃが1ｍ前後から長くても1.4ｍまであるのに対し，ａ・ｂでは2ｍ以上と長大である。

土坑の分布状態は，ａが調査地の東側部分に位置し，ｂが調査地ほぼ中央部にある。ｃ・ｄについては，ａの周辺に分布する。ｂの付近には，ｃ・ｄはみあたらない。

これらの土坑は，墓と推定されている。また，その時期については，確実に伴う遺物がないものが多く，決め手を欠くが，遺物が出土した土坑の例からみると，弥生時代中期後半頃とみられる。

このように，弥生時代中期の墓とみられる土坑については，形態・規模・分布状態などに差異が認められるのであるが，それが何によるものかは，今後の検討課題である。

(3)　溝状遺構

二次にわたる調査では，多くの溝状遺構を検出した。この中には，SD86107のように，住居跡の周壁溝とみられるものもある。時期的には，弥生時代中期後半頃から古墳時代後期頃にかけてのものである。ここでは，そのうちの代表的なものについて若干説明を加えることにしたい。

a.　SD86101

調査地東隅部で検出した溝状遺構である。幅2ｍ・深さ0.7ｍである。7世紀頃の遺物が出土しており，今回検出した遺構の中では最も新しい遺構である。

b.　SD86110

幅0.9ｍ・深さ0.4ｍの溝状遺構である。断面は，逆台形状を呈する。古墳時代前期の遺物が出土している。

c.　SD87901

調査地中央付近から西端に向かってのびる溝状遺構である。断面は，ゆるいU字状を呈する。幅は約3ｍである。深さは，最も深いところで，検出面から約0.8ｍである。底部から小型丸底土器・高杯などの古墳時代前期の土器が出土した。なお，方向からみると，この溝状遺構は，第1次調査で検出された「溝1」に続くものとみられる。

d.　SD87901

ほぼ東西方向にのびる溝状遺構で，幅0.8ｍ・深さ0.7ｍである。断面はU字形を呈する。底部から，弥生時代中期後半頃の土器が出土した。

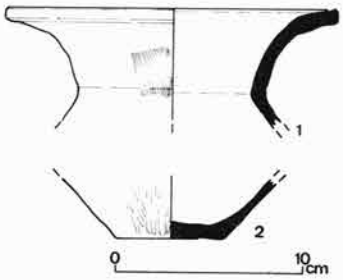
e.　SD87909

調査地西端部で検出した。ほぼ南北方向にのびる。幅2.5ｍ・深さ0.6ｍを測る。断面は逆台形状を呈する。弥生時代中期後半頃の土器が出土した。

（引原茂治）

3. 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は，総数で整理箱約60箱に及んだ。時期的には，弥生時代中期後半・同後期終末（畿内庄内式並行期）・古墳時代前期（畿内布留式並行期）に属すると考えられるものが主体を占め，一部に飛鳥時代（7世紀前半）のものを認めた。



第9図　出土遺物実測図 (1)

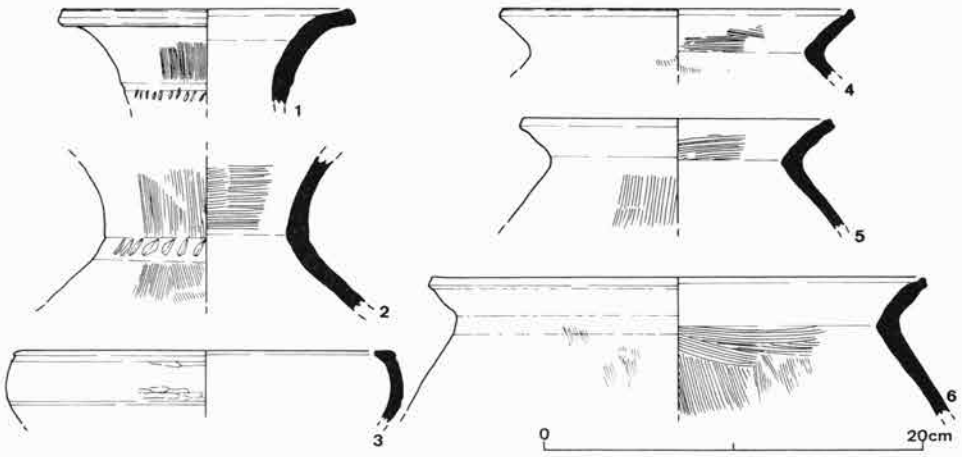
ここでは，主として検出遺構の埋土中から出土した遺物の中から，各遺構の帰属時期を示すと考えられるものを選出し図示した。ただ，各遺物の出土状況の細かな検討は行えておらず，図示したものは一括資料として認識できるものでない点を記しておく。

以下，各遺構出土の土器について，時代毎にその概要を記す。なお，石製品については，まとめて後述する。

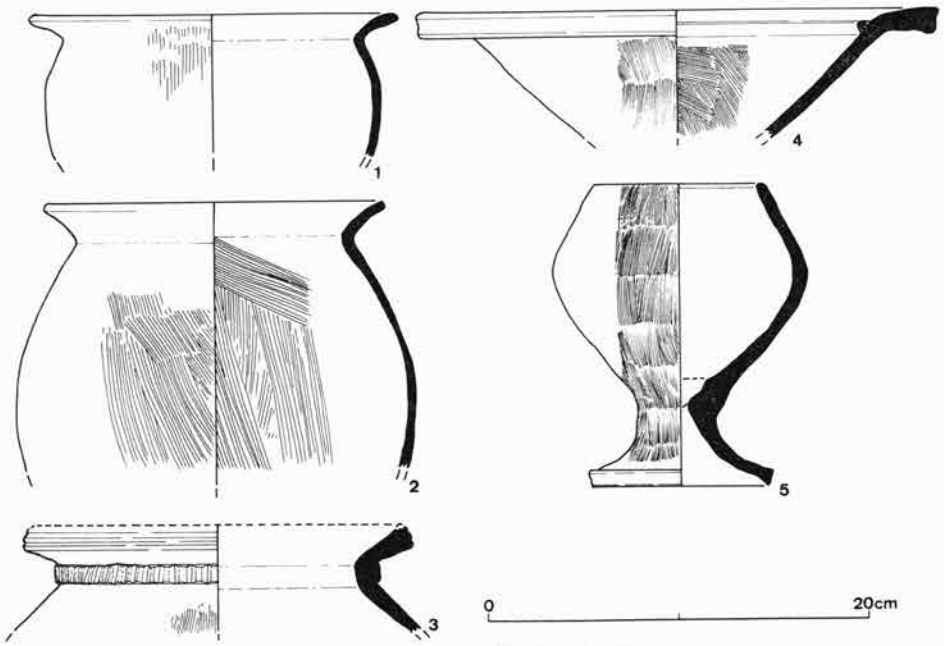
(1) 弥生時代中期

この時期に属すると考えられる遺構は，先に記したように竪穴式住居跡4基（SB86101・SB86102・SB86104・SB86105）及び，多数の土坑である。ここでは，SB86101・SB86105の2基の竪穴式住居跡及びSK86101・SK86104・SK86105・SK86107の5基の土坑，SD87907・SD87909の2条の溝から出土した遺物の中からその一部を図示した。

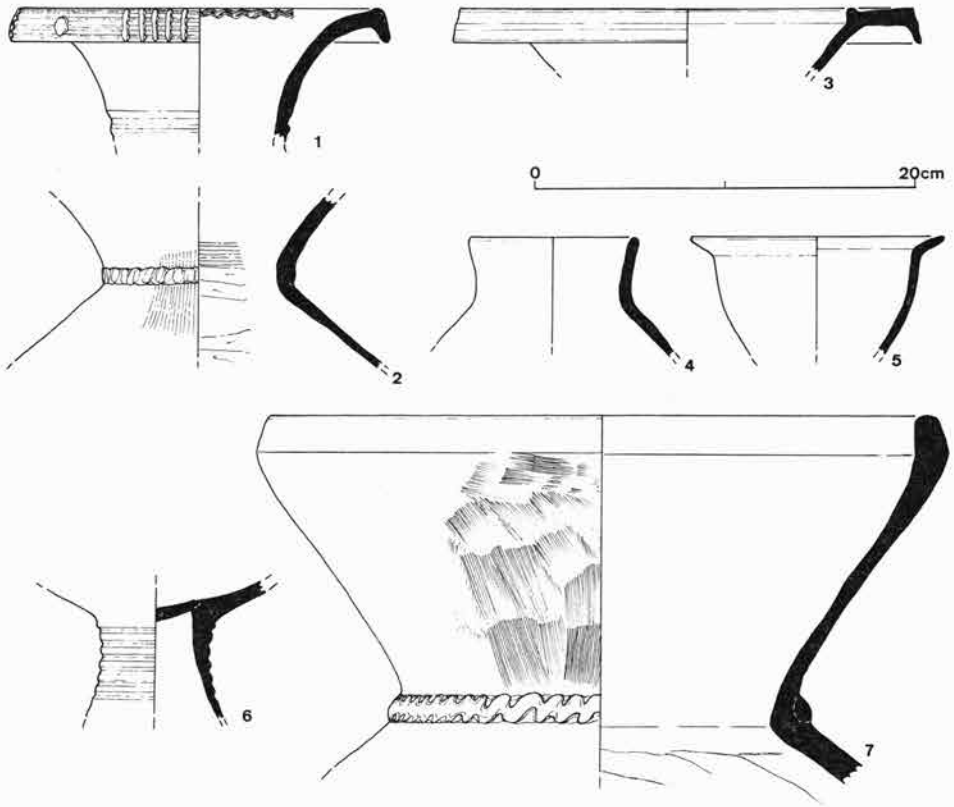
SB86101（第9図）　1は大きく外反する口頸部を有する広口壺の口縁部片で，外面にハケ目調整を認めるが主としてナデにより仕上げられる。2は壺の底部片と考えられ，外面にヘラ磨きを認める。



第10図　出 土 遺 物 実 測 図 (2)



第11図　出土遺物実測図 (3)



第12図　出土遺物実測図 (4)
1. SK01　2. SK04　3. SK05　4～7. SK07

SB86105(第10図)　1・2は大きく外反する口頸部を有する広口壺の破片で，いずれも頸部にヘラ状工具による刺突文帯を施す。3は内湾気味に上方へ立ち上がる口縁部を有する高杯で，口縁部は内側に突出する。外面に2条の凹線文を配する。4～6は，「く」の字状に外反する口縁部を有する甕である。4・6はいわゆる「はねあげ口縁」状に端部をつまみあげる。いずれもハケ目調整を主体とする。

SK86116(第11図)　1・2は「く」の字状に外反する口縁部を有する甕である。1は口縁端部付近がやや肥厚し，端部は丸く終わる。器高がやや低く，鉢とすべきかもしれない。3はふくらみのある体部から短く外反する口縁部を有する甕(注6)で，上下に拡張された口縁端部に3条の凹線文を配する。また，口縁部と体部の境には指頭圧痕文帯を付す。4は高杯で，水平にのびる口縁部を有する。端部は上下に拡張され，ナデによって1条の幅の広い凹線文が形成される。杯部は内外面ともハケ目調整される。5は台付鉢である。体部中位に最大径をもち内傾してのびる口縁部を有する鉢と，短く「ハ」の字状に開く脚台部からなる。ハケ目調整を主体とする。

SK86101(第12図1)　上外方に外反してのびる口頸部を有する広口壺である。端部は下方に拡張され，そこに幅の狭い凹線文を4条，4本をセットとする棒状浮文，円形浮文を配する。

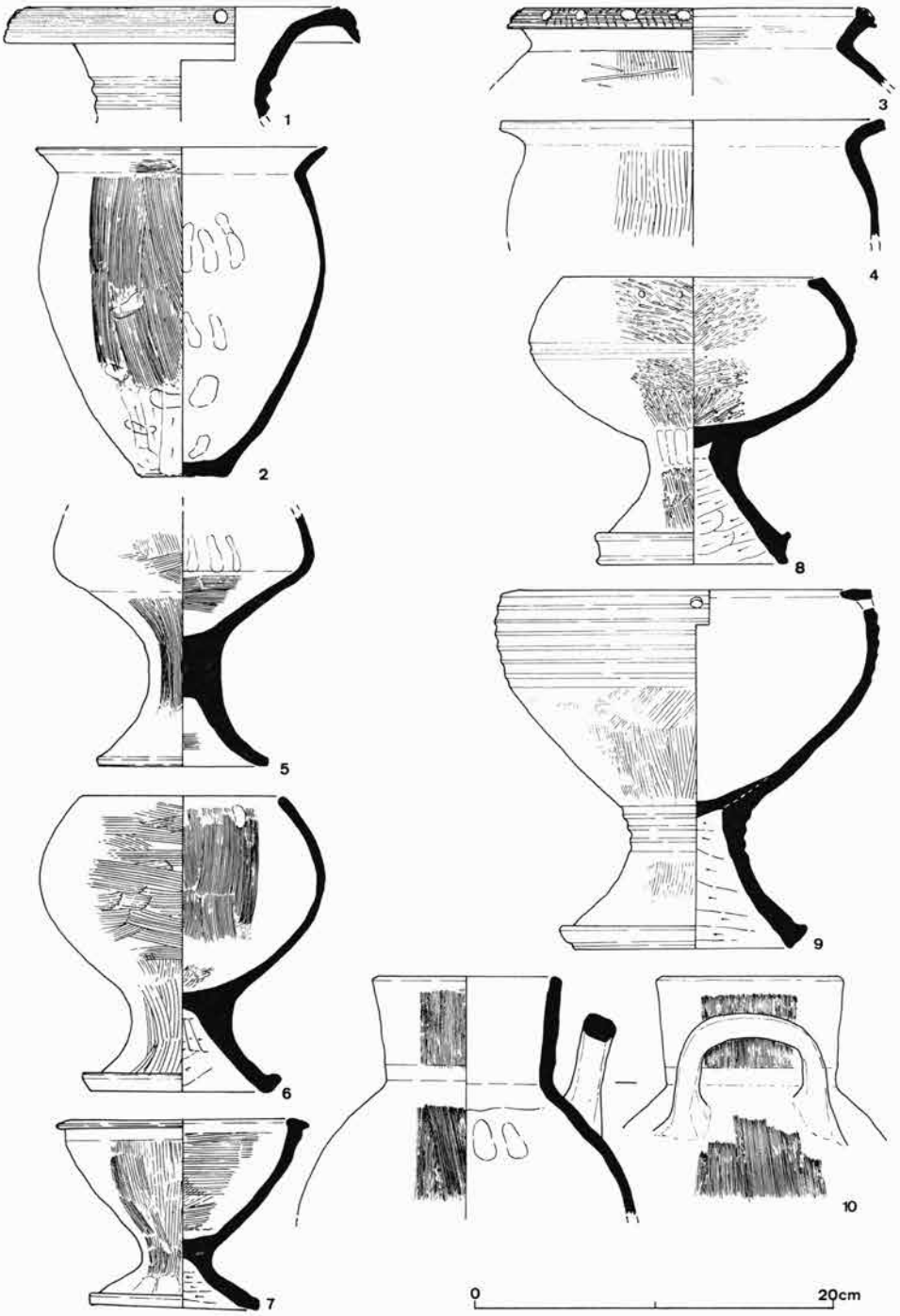
SK86104(第12図2)　広口壺の頸部片で，体部と頸部の境に指頭圧痕文突帯を配する。

SK86105(第12図3)　高杯の口縁部片である。杯部から屈曲して水平気味にのびる口縁部を有し，端部は下方へ拡張される。端部外面にはナデにより，2条の浅い凹線文が形成される。

SK86107(第12図4～7)　4は直口壺，5は「く」の字状に外反する口縁部を有する鉢，6は高杯の脚部片，7は広口壺の口縁部片である。6は外面に6条の凹線文を配する。また，7は上外方へ直線的にのびる頸部から内傾する口縁部を有する。体部と頸部の境に指頭圧痕文突帯を付す。

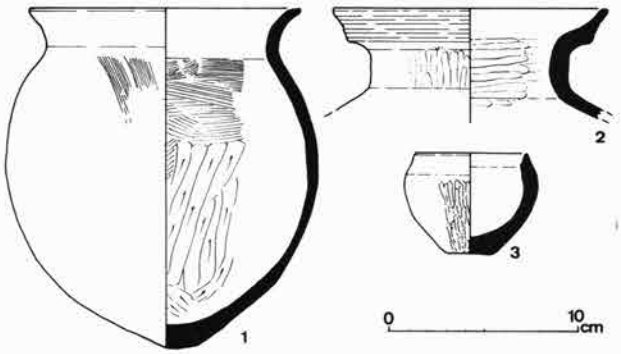
SD87907(第13図1)　大きく外反する口縁部を有する広口壺の口縁部片である。端部は下方に大きく拡張され，5条の凹線文，円形浮文を配する。また，頸部には3条の凹線文を配する。

SD87909(第13図2～10)　2は「く」の字状に外反する口縁部を有する甕である。端部を丸くおさめる。また，4は口縁部がゆるやかに外反する甕で，端部は外面に面をなす。いずれもハケ目調整を主体とするが，2は体部外面下半にヘラ削りを認めた。3はふくらみのある体部から短く外反する口縁部を有する甕(注7)の口縁部片である。上下に拡張された端部には3条の凹線文，円形浮文，刻目文を配する。5～9は台付鉢である。鉢部の形態か



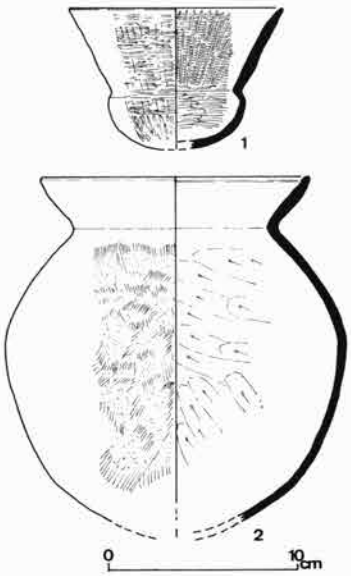
第13図　出土遺物実測図 (5)

ら，大まかに，体部中位から丸みをもって屈曲し内傾してのびる口縁部を有するもの(5・6・8)と，同じく体部中位から緩やかに屈曲し上方へ立ち上がる口縁部を有するもの(7・9)の二者に分かれる。7は口縁部の屈曲が弱く，端部は外側にやや突出し上方に外傾する面をなす。8は口縁部の屈曲部に2条の凹線文を配し，端部は内側に突出する。9は口縁部に7条，脚部に4条の凹線文をそれぞれ配し，口縁部に小穴を穿つ。8を除き，いずれも脚部内面にヘラ削り，その他はハケ目調整によって仕上げられる。8のみ，ヘラ磨き調整を主体として仕上げられる。10は水差形土器で，丸みのある体部から直立する口縁部を有する。肩部には環状の把手を付す。ハケ目調整を主体として仕上げられる。



第14図　出土遺物実測図(6)

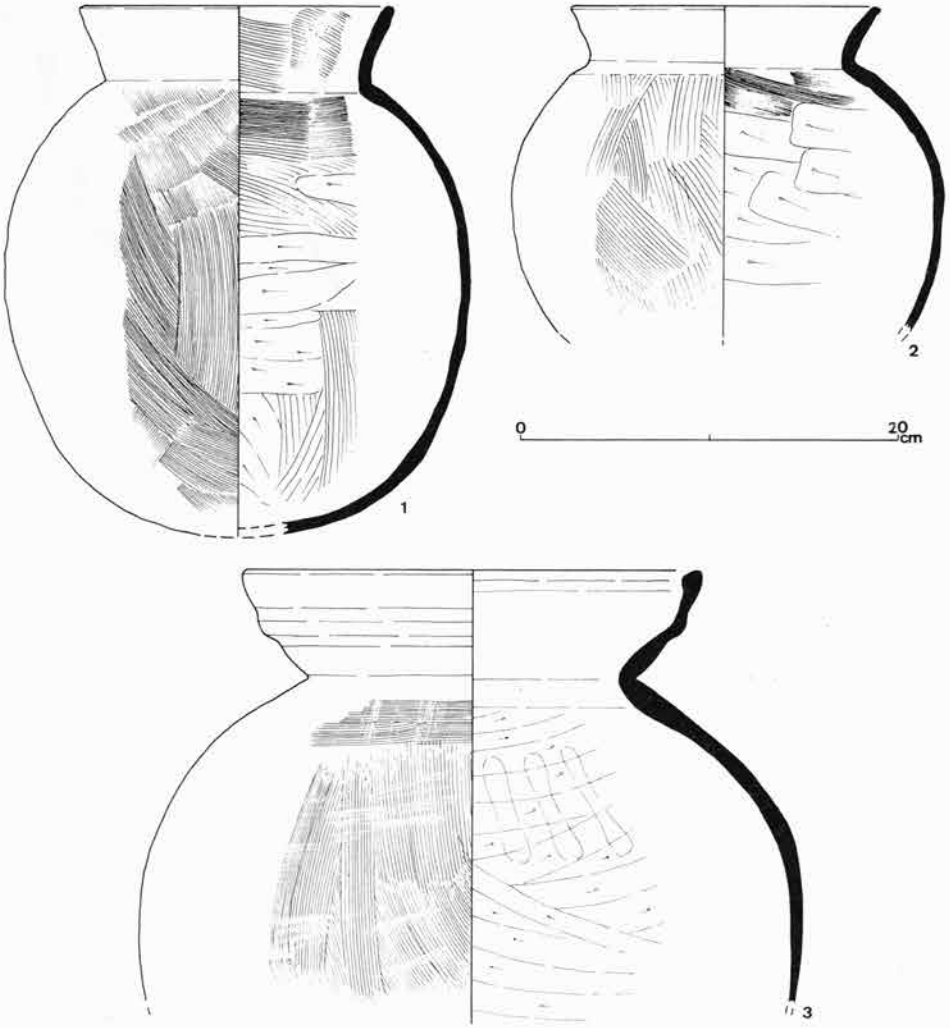
以上にみた土器群の特色が，出土した弥生時代中期の土器の様相をすべて示しているかについては，遺物整理が充分進んではおらず即断しがたい。しかし，全体にみて櫛描文が少なく，凹線文を比較的認めるという点では，弥生時代中期後半期の範囲内でとらえうるものと考えられよう。なお，ここにみた土器群の特色について若干触れておくとすれば，従来から青野遺跡出土(青野A地点など)の中期の土器に比較的多く認められた凹線文を多用した壺(今回の調査出土品では，第12図1・第13図1)などをほとんど認めえない点をあげることができる。これらは，出土したとしても，出土遺構が限られているという状況を確認している。このように，今回出土の土器群は，櫛描文に加えて凹線文の使用も減少している感を受けるものであり，従来の青野遺跡出土の中期後半期の土器群に比べ，やや新相を呈している可能性を指摘しておきたい。(注8)



第15図　出土遺物実測図(7)

(2) 弥生時代後期終末

この時期の遺物が出土したのは，竪穴式住居跡1基(SB86103)のみである。ここから出土した遺物中から3点を図示した。なお，ここで弥生時代後期終末とし

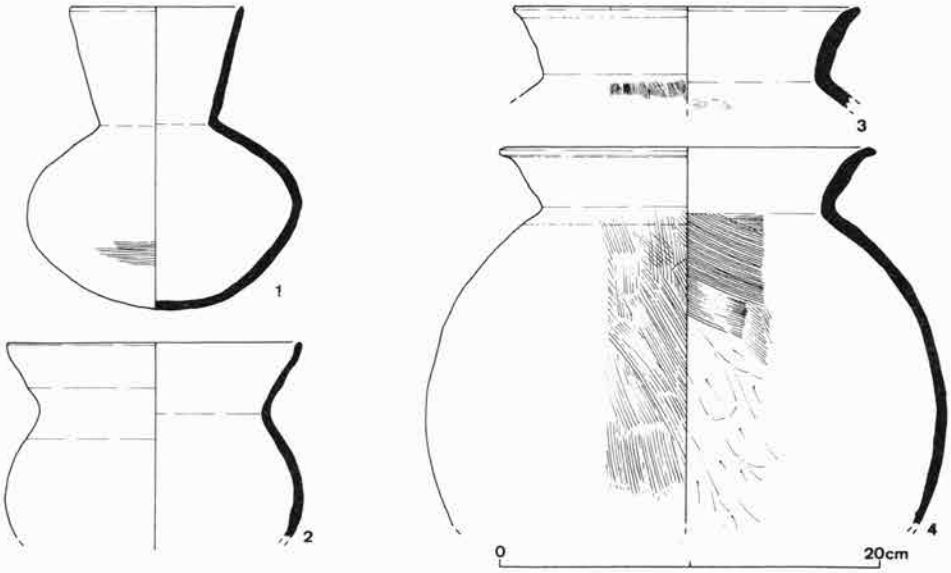


第16図　出土遺物実測図(8)

たものは，畿内における庄内式並行期ととらえているものである。(注9)

SB86103(第14図)　1は口縁部がゆるやかに外反し，底部が尖底気味となる甕である。口縁部は丸くおわる。体部外面は摩滅のため調整は不明であるが，内面は上半が横位のハケ目調整，下半が縦位のヘラ削り調整である。2は二重口縁状の口縁部を有する壺である。口縁部外面に擬凹線文を施す。ヘラ磨き調整を主体として仕上げられる。3はミニチュアの鉢形土器である。口縁部がナデ調整により外反気味に仕上げられる他は，ヘラ磨き調整を主体とする。

なお，同時期の資料が出土した青野西遺跡の報告においてまとめられている土器の編年案(注10)に対応させた場合，そのどの段階に位置付けうるかについては，今回の出土資料が量的



第17図　出土遺物実測図 (9)

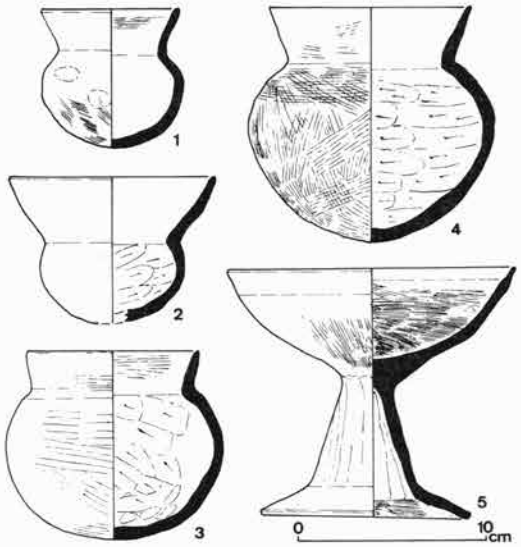
に少なく明確にはしがたい。また検出遺構中SB86106・SB86109の2基の竪穴式住居跡もこの時期になる可能性が高い。

(3) 古墳時代前期

この時期の遺物が出土した遺構は，SB86107・SB87901の2基の竪穴式住居跡，SD86110・SD87901の2条の溝である。

SB87901(第15図)　1は扁平気味の体部から上外方へ大きく開く口縁部を有する小形丸底土器(壺)である。(注11) 内外面ともヘラ磨き調整によって仕上げられる。2は球形の体部から「く」の字状に外反する口縁部を有する甕で，口縁端部が内側に肥厚する，いわゆる布留式甕である。体部外面に縦位のハケ目調整が，内面には上半に横位，下半に縦位のヘラ削り調整が施される。

SB86107(第16図)　1・2は球形の体部から口縁部が上外方へ立ちが



第18図　出土遺物実測図 (10)

上る甕である。体部外面に縦位のハケ目調整，内面上半に横位のハケ目調整，下半にヘラ削り調整が施される。3は二重口縁を有する壺である。球形の体部から，一旦上外方へのびた後屈曲して立ち上がる口頸部を有する。口縁端部は内側にやや肥厚し，上方に内傾する面をもつ。

SD86110(第17図)　1は扁球状の体部から，口縁部がやや開き気味に立ち上がる，いわゆる直口壺である。2は球形の体部から上外方へ開く口縁部を有する壺である。いずれも摩滅が著しく，調整は明瞭に観察できないが，1の体部外面下半に横位のハケ目調整を認めた。3・4は球形の体部から強く外反する口縁部を有する甕である。体部外面に縦位のハケ目調整が，内面には上半に横位のハケ目調整，下半にヘラ削り調整が施される。

SD87901(第18図)　1・2はいわゆる小形丸底壺である。1は球形に近い体部から直立気味に立ち上がる口縁部を有し，2はやや扁平気味の体部から大きく開いて立ち上がる口縁部を有する。3・4は坩ないしは小形の甕とも言うべき形態のもので，球形の体部から短く直立気味に立ち上がる口縁部を有する。体部外面にはハケ目調整が，内面にはヘラ削り調整が施される。5は高杯である。椀状を呈する杯部と，中空で端部付近で大きく外反する脚部からなる。杯部内外面ともハケ目調整が施され，脚部は端部付近の内面にハケ目調整が施されるほか，外面はヘラ磨き調整によって仕上げられる。

以上の土器群は，畿内布留式並行期のものと考えられる。形態的にみればSB87901出土資料がやや古式に属し，その他はこれにやや遅れるものととらえうるようにも思われる。しかし，先に述べたように，現段階では各遺構毎に図示した遺物に対して，その一括性については充分検討できておらず，これらの位置付けについては今後の課題としておきたい。なお，第15図1・2，第17図3・4に示した甕は，この時期における在地的な形態を示すものとして理解している。　(森下　衛)

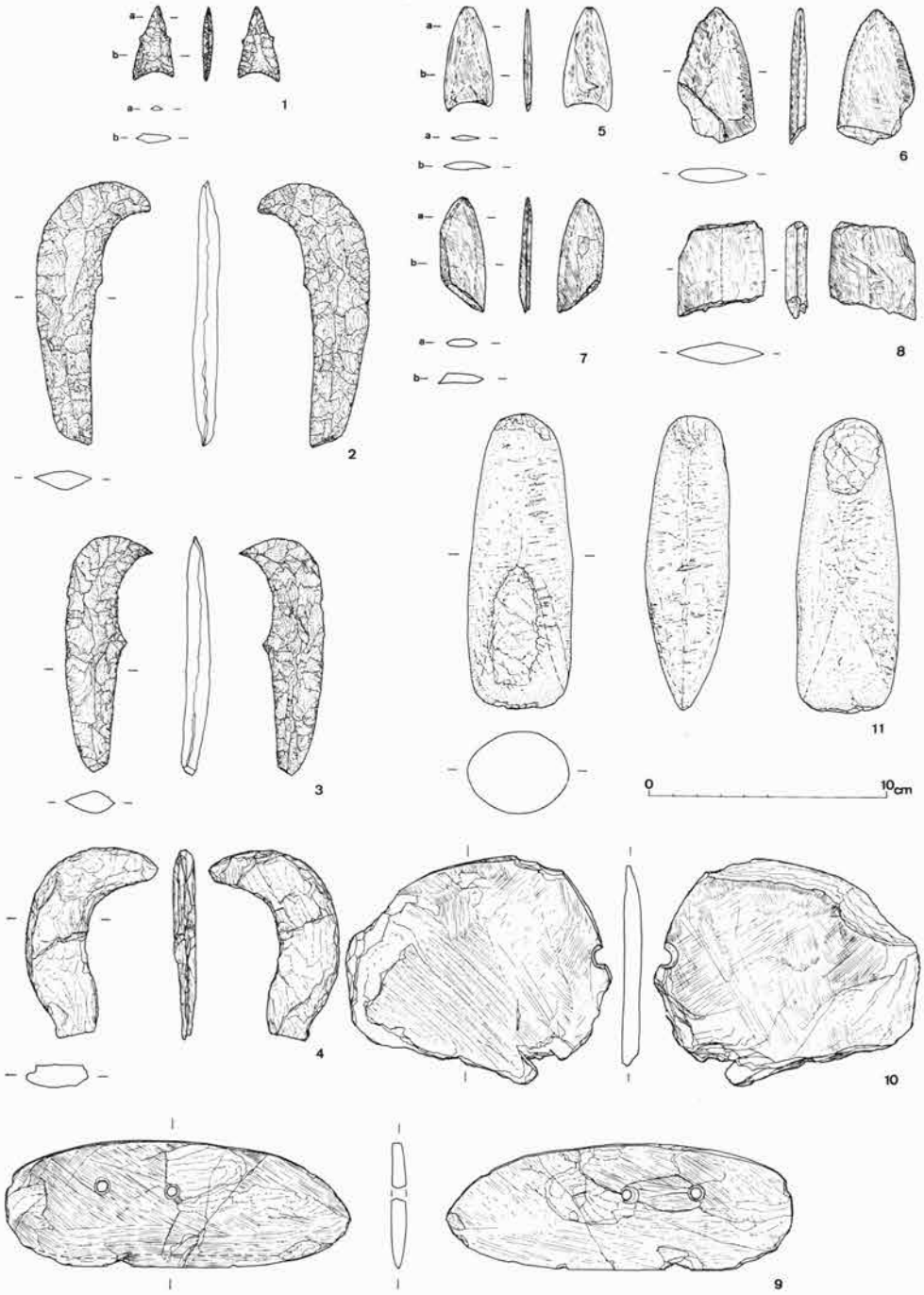
(4)　石製品

石製品には，打製石器として石鏃・石小刀・不明石製品，磨製石器として石剣・石鏃・石庖丁・石斧などがある。その他，打製・磨製両種の製作に伴う剥片・自然の転礫などが少量出土している。打製石器は地元に産しないサヌキトイドを，磨製石器は在地産の石材を用いる傾向が認められる。なお，法量は付表1の通りである。

a.　打製石器

石鏃(第19図1)　凹基無茎式。刃縁に三角形の小突起を持つ。両面に大剥離面を残す。サヌキトイド製。

石小刀(第19図2・3)　2点確認した。これらは，同一遺構内において近接した状況で検出したものである。ほぼ同形で，いずれも大形のサヌキトイド剥片を素材としている。



第19図　出土遺物実測図 (11)

付表1　石製品一覧表

番号	器種名称	長さ(残長) cm	幅(残長) cm	厚さ cm	出土遺構	備考
1	打製石鏃	2.8	1.7	0.4		サヌキトイド
2	石小刀	10.2	2.8	1.05	SK86116	〃
3	石小刀	9.9	2.6	1.0	SK86116	〃
4	不明打製石製品	7.6	2.6	0.95	SK86116	頁岩ないし粘板岩
5	磨製石鏃	(3.9)	(2.0)	0.4		〃
6	磨製石剣	4.3	1.9	0.5	SK86101	〃
7	磨製石剣	(5.7)	(3.0)	0.7	SD87901埋土	〃
8	磨製石剣	(3.5)	(3.6)	0.9	SB86102	〃
9	石庖丁	14.5	(5.3)	0.6	包含層	〃
10	石庖丁	(11.0)	(8.9)	0.8	包含層	〃
11	太型蛤刃石斧	12.2	4.3	3.5		砂岩？

器体半ばにある小突起を介して，上半は刃部，下半は基部とに機能部が分かれる。刃部は湾曲部から背縁に及び，微細な交互剥離によって鋭利に作られ，基部は階段剥離と局部的な研磨によって刃潰しが施されている。いずれも器体の一面に大剥離面をとどめ，基部に自然礫面を残している。

不明石製品(第19図４)　石小刀と同一遺構から出土した。風化の進行した軟質の粘板岩を素材とし，その周縁を加撃して形作る。湾曲した「鉈」状を呈し，平面形態だけを見ると，石小刀の湾曲部の形態に類似する。各部の機能・用途は明らかでない。未製品。

b. 磨製石器

石剣(第19図６～８)　３点確認した。いずれも鉄剣形石剣で，頁岩ないし粘板岩を素材とする。６・７は先端部，８は先端部と基部が欠損し半ばだけが残ったもの。６・７は明瞭な鎬が無く，器体は扁平である。

石鏃(第19図５)　凹器無茎。先端部を欠損するが，ほぼ完存している。薄く，鋭利である。頁岩ないし粘板岩製。

石庖丁(第19図９・10)　９は半月形直線刃形態。片刃である。器体はていねいな研磨で仕上げるが，一部に剥片剥取段階の剥離面を残す。孔間の距離は約3cmである。孔の径は約0.6cm。やや風化の進んだ頁岩ないし粘板岩を素材とする。10は，大形の石庖丁の器体の一部と思われる。一端に刃部と紐穴の一部と考えられる痕跡をとどめる。

石斧(第19図11)　太型蛤刃石斧。棒柱状の転礫の器面を整え石斧としたもの。両刃で刃縁には使用痕と思われる小剥離が連続して認められる。粗雑な作りである。(田代　弘)

4. 小　　結

今回の概要報告は，青野遺跡第11次・第13次調査に関するものである。これらの二次にわたる調査の間には，様々な変更もあり，一概にまとめることは困難であるが，留意点を列記して一応の小結としたい。

a．注目すべき点は，弥生時代中期後半頃の土器が出土した住居跡が4基あることである。これまでの青野遺跡の調査では，弥生時代中期の墓とみられる土坑は検出されているが，住居跡は検出されておらず，その時期の居住地域については不明とされてきた。出土遺物の項で述べたとおり，出土遺物の一括性については充分検討できていないので，消極的ではあるが，上記4基の住居跡が，その時期のものである可能性を指摘しておきたい。

b．上述の住居跡を弥生時代中期後半頃のものとすれば，ほぼ同時期の墓とみられる土坑との関連が問題となる。現状では，住居跡と土坑が混在している状況であり，居住区域と墓域を区別できない。もし，上述住居跡を弥生時代中期後半頃のものとすれば，土坑と若干でも時期差があるのか，また，土坑の性格をどのようにみるのか，などの検討が必要となる。

c．古墳時代前期の竪穴式住居跡SB87901から出土した土器は，他の古墳時代前期の遺構から出土した土器に比べてやや古式である。これまでの青野遺跡の調査でも類例はない。在地的な様相のみられないものである。この土器が，これまで出土している在地的な土器とどのように関連するのかは，今後の検討課題である。

d．古墳時代前期の土器が出土した溝状遺構SD87901は，方向からみて，青野遺跡第1次調査で検出された「溝1」の延長にあたるものとみられる。第1次調査では,「溝1」は，弥生時代中期の遺構とされており，両遺構を一連のものとみるならば，その所属時期については，再検討が必要である。また，弥生時代中期後半頃の遺構とみられる溝状遺構SD87909と「溝1」との関連についても，今後検討する必要がある。

e．土坑SK86116から出土した石小刀は，中丹地域では初めての出土例であるのみならず，全国的にも東海・畿内などで150点程度しか出土例がなく，注目される遺物である。

f．竪穴式住居跡の形態的な変遷をみると，まず弥生時代中期後半頃の可能性があるものが円形の平面形をもつ。弥生時代後期終末頃のものは，方形の平面形をもち，やや規模の小さいものもある。古墳時代前期のものは，方形の平面形をもつが，SB86107のように不正な円形に近い平面形をもつものもある。

g．調査地全体の遺構の分布状況をみると，住居跡や土坑があるのは，調査地東側から中央付近にかけての範囲である。西半部は遺構の分布もまばらであり，溝状遺構のみである。先述したとおり，調査地の西側には由良川の旧流路が想定されている。そのために，

川岸近くの西半部は居住区域・墓域として使用されることがなかったのであろう。

h．今回の調査地では，青野遺跡内に多い7世紀頃の住居跡が全く検出されていない。7世紀頃の遺構としては，調査地東端部に溝状遺構SD86101があるのみである。今回の調査地のすぐ南に隣接する第1次調査地では7世紀頃の住居跡が検出されている。このような点からみて，今回の調査地付近が7世紀頃の集落の北西限になるのであろう。

（引原茂治）

注1　山下潔巳ほか「青野遺跡A地点発掘調査報告書」（『綾部市文化財調査報告』第2集　青野遺跡調査報告書刊行会）1976

注2　中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第9集　綾部市教育委員会）1982

注3　第11次調査（昭和61年度）

調査補助員　柿原　実・川端智子・山本賢治・野々垣政明・四方　昇・采尾治彦

調査協力者　桜井堪子・大槻鈴子

作　業　員　太田綱雄・四方泰治・西川勇夫・片山勇雄・井田愛治郎・井田通枝・四方和子・西村あさの・平井まつ枝・井田悦子・梅原かずえ・片山尚子・藤山亀次郎・岡村勇・藤山義信・西川こまえ・西川五郎吉・四方あや子・四方章一・倉橋節代・谷光治・塩見ヒサエ

第13次調査（昭和62年度）

調査補助員　野条信之・赤井敏行・福山　恵・佐竹尊樹・藤田順基・西田博紀・谷口康夫・大槻智彦・川見晋也・田中英行・井上浩人・津隈裕次

調査協力者　藤山眞理・藤山留美・斉藤啓子・仲井美香子・田内佳苗

作　業　員　塩見金男・柏原春雄・今井助雄・今井和三郎・安野正夫・白木　茂・大槻和子・白木琴枝・大槻與三郎・繁尾善昭・柏原きみ枝・今井とめ・白木良夫・小村敏夫・高橋　渉　（敬称略・登録順）

注4　小山雅人「青野西遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第4冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1985

注5　注4と同じ。

注6　ここでは甕としたが，形態的に壺とすべきかもしれない。

注7　注6と同じ。

注8　弥生土器について，田代　弘調査員から諸々のご教示を頂いた。

注9　庄内式並行期について，古墳時代としてとらえるか，弥生時代ととらえるか，様々な問題もあるが，ここではとりあえず弥生時代後期終末として報告する。

注10　注4と同じ。この報告書では，出土した土器を青野西Ⅰ式・同Ⅱ式・布留式という段階に分けている。今回の土器群は，このうち青野西Ⅱ式の範疇に入るものと考え得る。

注11　このような扁平な体部をもつものについては，小型丸底鉢とすべきかもしれない。

2. 蒲生遺跡第３次発掘調査概要

1. はじめに

京都府教育委員会は，昭和62年度に京都府立須知高等学校の管理棟校舎改築を計画した。当該地は，丹波町内でも蒲生から豊田にかけてもっとも広範囲にわたる弥生時代から中世にかけての遺跡である蒲生遺跡の一画である。昭和58年度には，同校の農業実習棟建設に伴い第１次調査が行われ，弥生時代中期の竪穴式住居跡・中世の掘立柱建物跡等が確認された。(注1) さらに，昭和61年度には同校の校舎改築に伴い，第２次調査が行われ，古墳時代の土坑などが確認されている。(注2) 今回の調査地は，第２次調査地の東に隣接する地点で，蒲生遺跡の西端に当たる。

以上のような成果をふまえ，京都府教育委員会管理課から同文化財保護課を経て当調査研究センターに事前の発掘調査の依頼があった。そこで，当調査研究センターでは依頼を受け，遺構の有無を確認し，記録保存を図るとともに重要な遺構・遺物を発見した場合，保存のための資料を作成することを目的として，事前に発掘調査を実施することになった。

現地調査は，昭和62年12月14日から着手し，昭和63年２月４日まで実施した。なお，最終日には関係者説明会を行っている。調査面積は，約600m²である。

発掘調査に当たっては，当調査研究センター調査第２課調査第１係係長辻本和美・同調査員森　　正が担当した。発掘調査を実施するにあたっては，府立須知高等学校・丹波町教育委員会をはじめ関係諸機関・地元の方々の御協力・御援助を得た。また，この間調査補助員・整理員として参加していただいた学生諸氏・地元の方々(注3)に対して記して謝意を表する。なお，発掘調査にかかる経費は，全額京都府教育委員会が負担した。

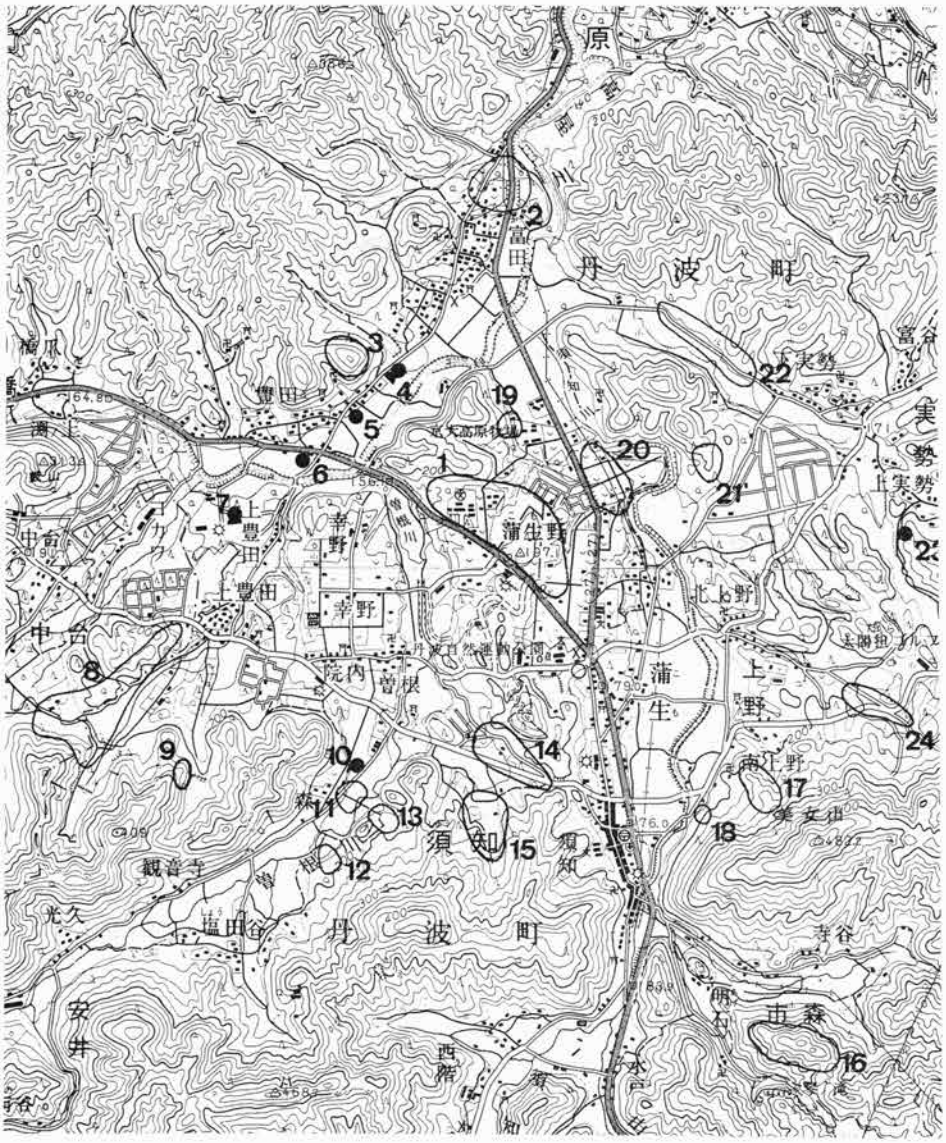
2. 位置と環境

今回，調査対象となった蒲生遺跡は，標高150m以上の丹波高原と呼ばれる小盆地のほぼ中央に位置している。盆地南部の山塊は，淀川水系と由良川水系の分水嶺となっており，日本海に注ぎ込む由良川の，最も上流域にあたる。

丹波町内において，現在のところ，旧石器・縄文時代の遺跡は確認されていない。しかし弥生時代になると，積極的な開発が行われたことがうかがわれる。当遺跡の北側，須知川左岸に形成された小規模な扇状地の末端部に位置する美月遺跡(注4)では，弥生時代中期に川から取水する人工的な水路が検出されている。当遺跡北西端部の台地縁辺部においては，

同じく弥生時代中期の竪穴式住居跡が検出されている。

古墳時代には，さらに開発あるいは他地域との交流も進んだようであり，多くの古墳が築造される。そのほとんどは，古墳時代後期のものであり小規模なものである。しかしその中にも，全長30m程度の規模を有する前方後円墳である，豊田車塚古墳・カナヤ１号墳



第20図　周辺遺跡分布図

1. 蒲生遺跡　2. カナヤ古墳群　3. 豊田城跡　4. 豊田車塚古墳　5. 藤浪古墳　6. 千原古墳　7. 鳥居野古墳　8. 中台古窯跡群　9. 院内窯跡　10. 森狐塚古墳　11. 森遺跡　12. 塩田谷遺跡　13. 山田古墳群　14. 宮の浦古墳群　15. 深志野古墳群　16. 須知城跡　17. 上野城跡　18. 須知遺跡　19. 美月遺跡　20. 蒲生野古墳群　21. 家ノ奥古墳群　22. 実勢古墳群　23. 実勢南古墳　24. 浜付場古墳群

等も存在する。また，当遺跡の南西部曽根川に面する丘陵裾部には，7基からなる宮の浦古墳群がある。そのなかの1号墳は，径25mの円墳であり，巨石で構築された全長11.8mの横穴式石室を持つものである。

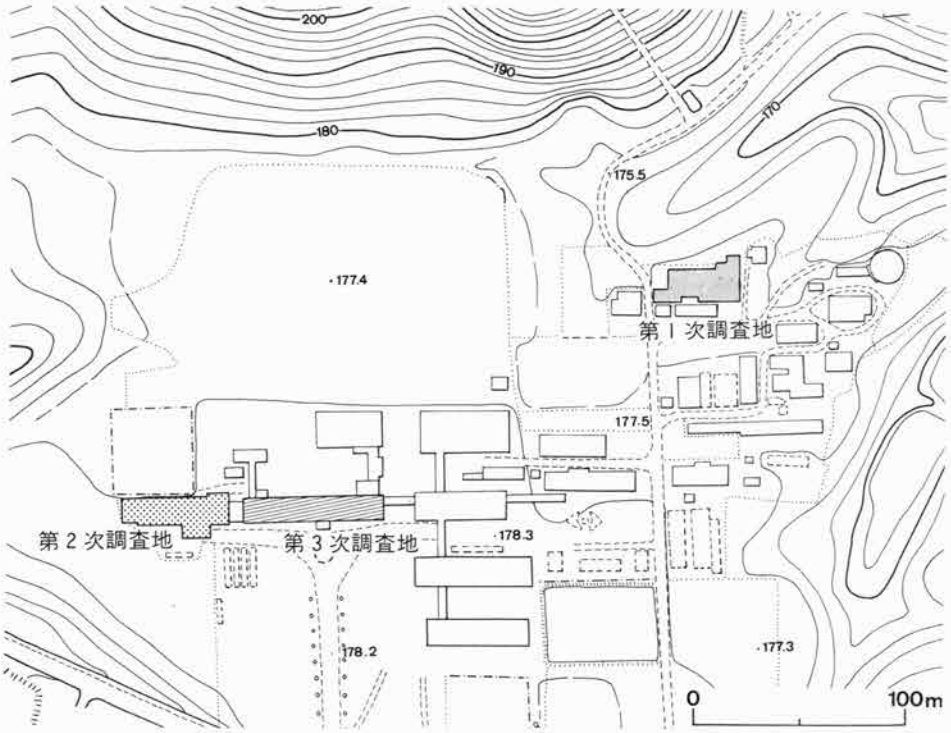
奈良時代になると，宮の浦古墳群の対岸丘陵地において須恵器の生産が開始される。中台・院内窯跡群であり，現在まで5基の窯跡が確認されている。(注5)

中世には，盆地内の丘陵各所に山城が築かれる。なかでも盆地南部の美女山の西裾には，在地土豪の須知氏の居城である須知城が築かれている。

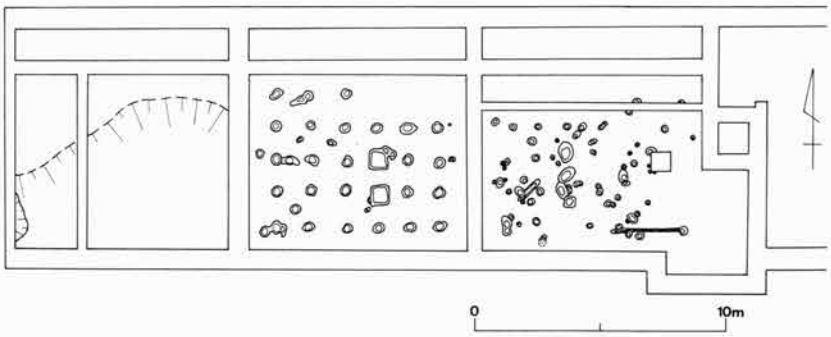
3. 調 査 概 要

調査対象地は，第2次調査地の東に隣接する地点であり，前回の調査結果から遺構面までは非常に浅いことが予想された。そのため，残存する遺構を保護するため，調査地内に縦横に残る旧校舎のコンクリート基礎は，撤去せずに調査する方針をとった。

調査は，基礎に囲まれた約600m²を一つのトレンチとして基礎部分以外すべての掘削を行った。トレンチ東側部分においては，旧校舎解体時の残土を除去するとすぐに安定した黄褐色土の地山面に達した。この地山も，2度にわたる校舎建築によってかなりの削平を



第21図　調 査 地 位 置 図



第22図　トレンチ西半部遺構図

受けていると考えられ，基礎による攪乱がほとんど全面にわたってみられた。さらに，大正年間に建てられた木造校舎の柱の基礎が旧校舎に重なって全面に残っていた。また，トレンチ西側部分でも状況は同様のものであった。一部において柱穴と見られるピットや土坑を検出したが，遺物が出土していないため，時期・性格等は不明である。わずかに，攪乱土中から若干の須恵器・土師器の細片が出土しているが，時期の判明するものはない。

調査最終段階に，トレンチ北辺において断ち割りを行ったが，黄褐色土の下には，白色粘土をほぼ全面において確認したのみである。

4. ま　と　め

今回調査を行った地点では，府立須知高校建設時にかなりの削平を受けていることがわかった。削平を受けているとはいえ，遺物の出土量が僅少であったことから考えても調査地に集落が存在した可能性は低い。さらに，前回までの調査成果もあわせて考えると，須知高校の位置する台地上においては，西半部よりむしろ東半部の台地縁辺部に，集落が存在した可能性が高いものと思われる。先にも触れたように丹波高原においては，弥生時代中期からの開発の跡が知られている。さらに後期古墳も数多く築造されている。今後の周辺地域の調査に期待したい。　（森　正）

注1　引原茂治「蒲生遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第10冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1984

注2　西岸秀文「蒲生遺跡第2次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第22冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987

注3　石崎善久・高野陽子・大崎康文

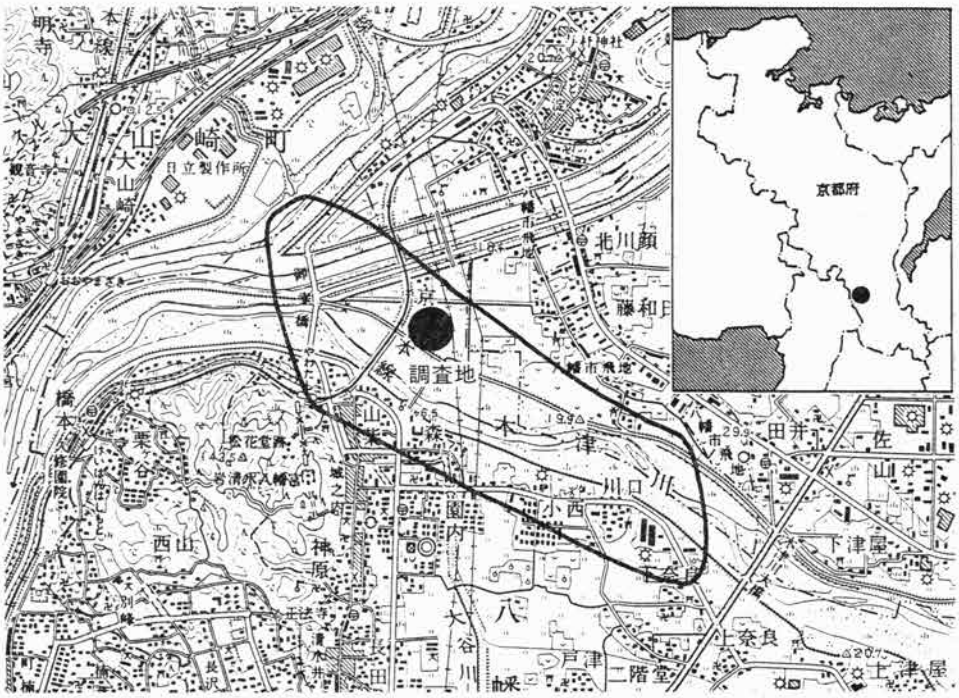
注4　清水芳裕「京都府美月遺跡の発掘調査」（『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度　京都大学埋蔵文化財研究センター）1981

注5　林　和廣「丹波国古窯跡について」（『史想』15号　京都教育大学考古学研究会）1970

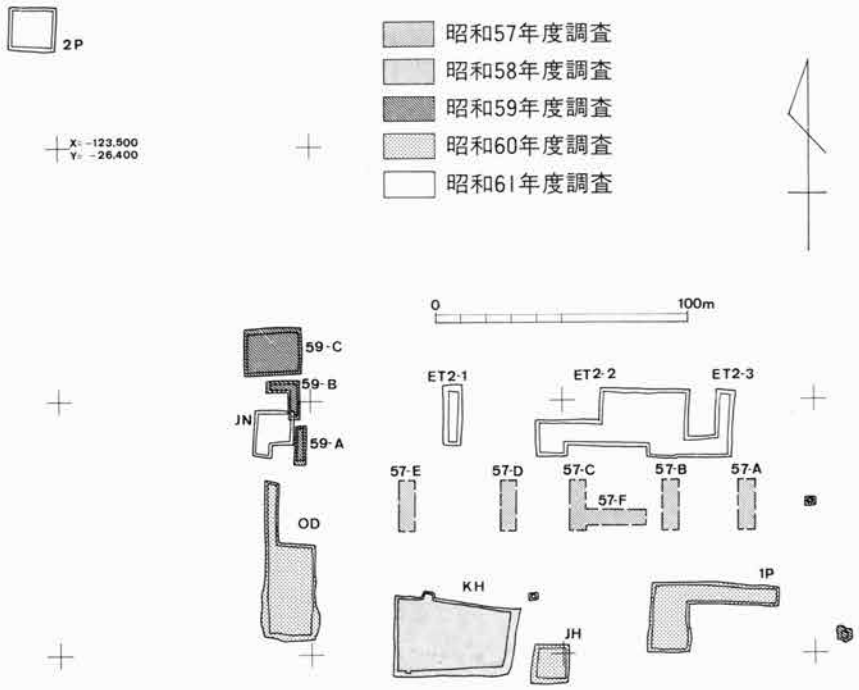
3. 木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要

1. はじめに

木津川河床遺跡は，京都府南部の木津川・宇治川・桂川の三川が合流する地点から木津川の上流付近一帯に所在する(第23図)。当遺跡の発掘調査は，昭和57年度から財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが京都府土木建築部の委託を受け，洛南浄化センターの諸施設の建設に先立って実施している。今までの調査では，古墳時代後期の竪穴式住居跡や，弥生時代終末から古墳時代初頭の土器溜まり，中・近世の素掘り溝などの遺構を確認してきた(付表2)[注1]。昭和61年度には，重力式濃縮槽(JN)，第2ポンプ棟(2P)，エアレーション・タンク槽(ET-2)の建設予定地内の発掘調査を行った。ET-2地区では，当遺跡内で初めて検出した弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡や，同時代の土器を多量に検出した。これは，南山城地域の低湿地遺跡としても初めてのことである。調査の都合で，ET-2地区の遺構・遺物の整理は，62年度に行うこととして，昨年度はJN地区・2P地区の概要について報告した[注2]。ここでは，ET-2地区の調査概要を報告する。



第23図　調査地位置図



第24図　調査トレンチ配置図

なお，調査・整理に係る経費は，全額，京都府土木建築部が負担した。

2. 調査経過

ET-2地区の調査地は，昭和57年度調査の57-A～Fトレンチの北側に位置する。57年度の調査では，湧水のため各トレンチで遺構は確認できなかったものの，B・C・Fトレンチで弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が集中して出土した。このことから，57年度の調査地を含めて周辺に同時代の集落跡が包蔵されているものと推定され，ET-2地区にも広がっているものと判断された。

この集落跡の範囲を確認するため，調査対象地に3本のトレンチを設け，850m²の試掘調査を実施した。西から東に1～3の番号を付した。第1トレンチ(6.5m×25m)では，3面にわたって調査を行ったが，中世の素掘り溝を確認できたのみであった。第2トレンチでは，10m×55mの範囲を掘削したところ，弥生時代終末～古墳時代初頭の多量の土器と竪穴式住居跡の一部を確認した。土器は，中央より東側で特に多く出土した。このトレンチの中央部は，既設建物の建設に伴う工事用搬入路が設けられており，遺構面は壊されていた。第3トレンチ(6.5m×23m)では，中世の素掘り溝等を検出した。

この試掘より，第2トレンチを中心に東・北側に遺構が広がっていると推測されたため，

付表2　各調査トレンチ概要

調査次数	調査年度	調査地名	概　　要
Ⅰ	昭和57年度	A～F	各調査地より土器片が出土。特にC・D・Fトレンチで弥生時代後期の土器片を多数確認。
Ⅱ	昭和58年度	KH	古墳時代後期の竪穴式住居跡10基，掘立柱建物，土坑を検出。他に古墳時代初頭の土器溜まり，中世素掘り溝など。
Ⅲ	昭和59年度	C	古墳時代前期を上限とする柱穴群，中世素掘り溝。
		A・B	南北走する中世素掘り溝。
Ⅳ	昭和60年度	OD	古墳時代後期の竪穴式住居跡3基，同前期の土坑・中世素掘り溝。
		JH	古墳時代後期の竪穴式住居跡1基，土坑・中世素掘り溝など。
		1P	弥生時代後期の土坑・溝，中・近世の素掘り溝。
Ⅴ	昭和61年度	JN	南北走する中世素掘り溝。
		2P	南北・東西走する中世素掘り溝。

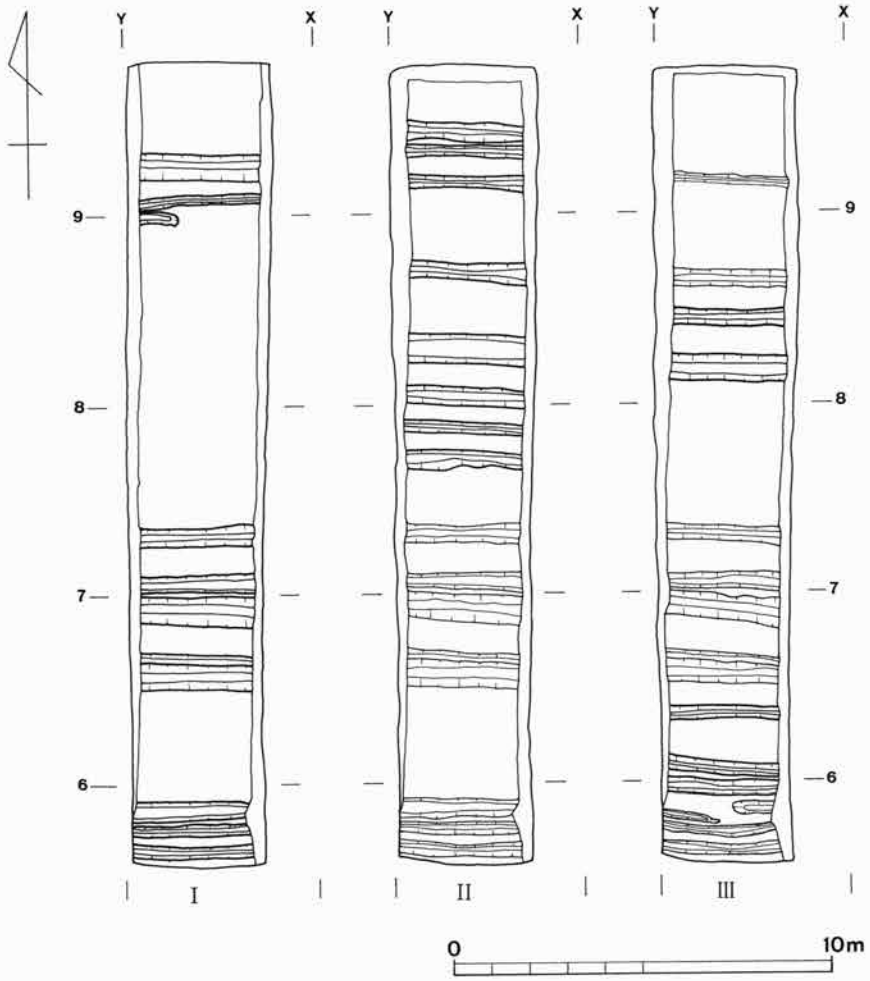
北側は，建物建設に伴う工事掘削ラインまでの，第2トレンチと第3トレンチをつなぐ範囲を本調査の対象とした(第24図)。しかし，拡張の際に第2・第3トレンチの間にも工事用搬入路が設けられているのが確認され，遺構面はすでに削平されていると判断されたため，その部分は重機掘削を行わなかった。ET-2地区の発掘調査面積は1,350m²である。

調査地内の地区割りは，従来通り，国土座標の第Ⅵ座標系の座標北と，それに直交する5m方眼を組んだ。東西ラインは南から北に数字を，南北ラインは東から西へアルファベットを付してライン番号とした。5mの区画内は，その東南隅の交点をつくる東西・南北のライン名を組み合わして表示する。なお，地区名は，今回の調査のため任意に設定したもので，今までの調査のものとは関連がない。8Jのポイントの座標値は，X＝－123,600，Y＝－26,170である。

3. 調　査　概　要

各調査トレンチとも，今までの調査成果をもとにして現地表下約2mの中世の層までを重機により掘削し，以後，手掘り作業に切り替えて調査を行った。以下，各調査トレンチ毎にその概要を示す。

(1)　**第1トレンチ**(第25図・図版第23-1)　この調査トレンチでは地震による砂の噴出のために地層・遺構面が曲隆しているのが確認できた。三面にわたって調査を行ったが，東西方向の素掘り溝を確認したのみで，顕著な遺構はなかった。溝は，幅30～50cm・深さ20～30cmのもので，重複関係を持つものもある。溝内からは瓦器片・土師器片などが出



第25図　第１トレンチ検出遺構（Ⅰ～Ⅲ面）

土しているが，すべて角が摩耗した細片で，図化しうるものはない。

(2)　**第2トレンチ**(第26図・図版第17-2，18-1)　中央やや西寄りと第２・第３トレンチの間に既設建物の工事用搬入路が設けられており，一部遺構面が壊されていた。

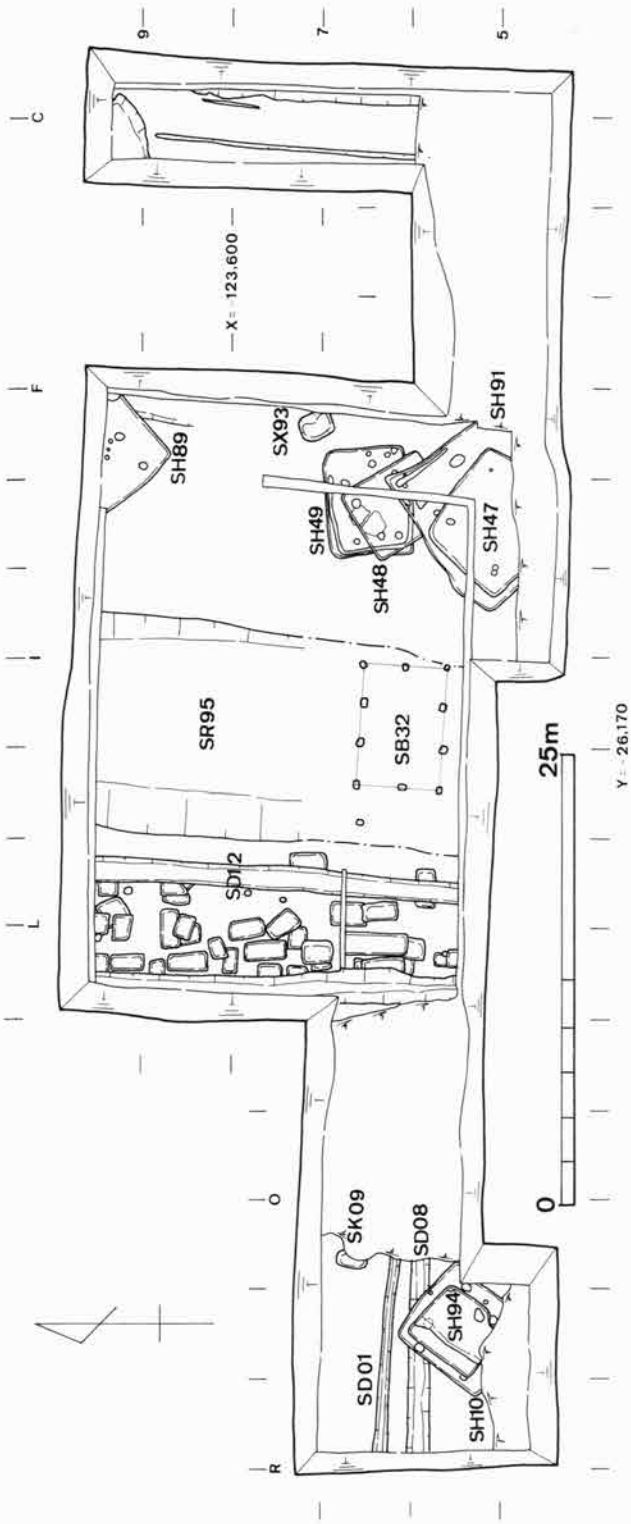
第１トレンチやJN・2P地区で検出したのと同様，調査地の全面で東西走する素掘り溝を検出している(図版第18-1・2)。溝内から，中国製陶磁器片，瓦器片，土師器皿片等の中世の遺物が出土した。この素掘り溝に切られて，弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡７基(SH10，SH47，SH48，SH49，SH89，SH91，SH94)，土坑，流路(SR95)，掘立柱建物跡(SB32)を検出した。竪穴式住居跡の平面形はすべて方形である。

SH10(第27図・図版第18-2，19-1～4)　調査地西南部で検出した。南側の一部は既設建物の建設工事の際に壊されている。埋土のうちの一層に土器片が集中して検出され，「投

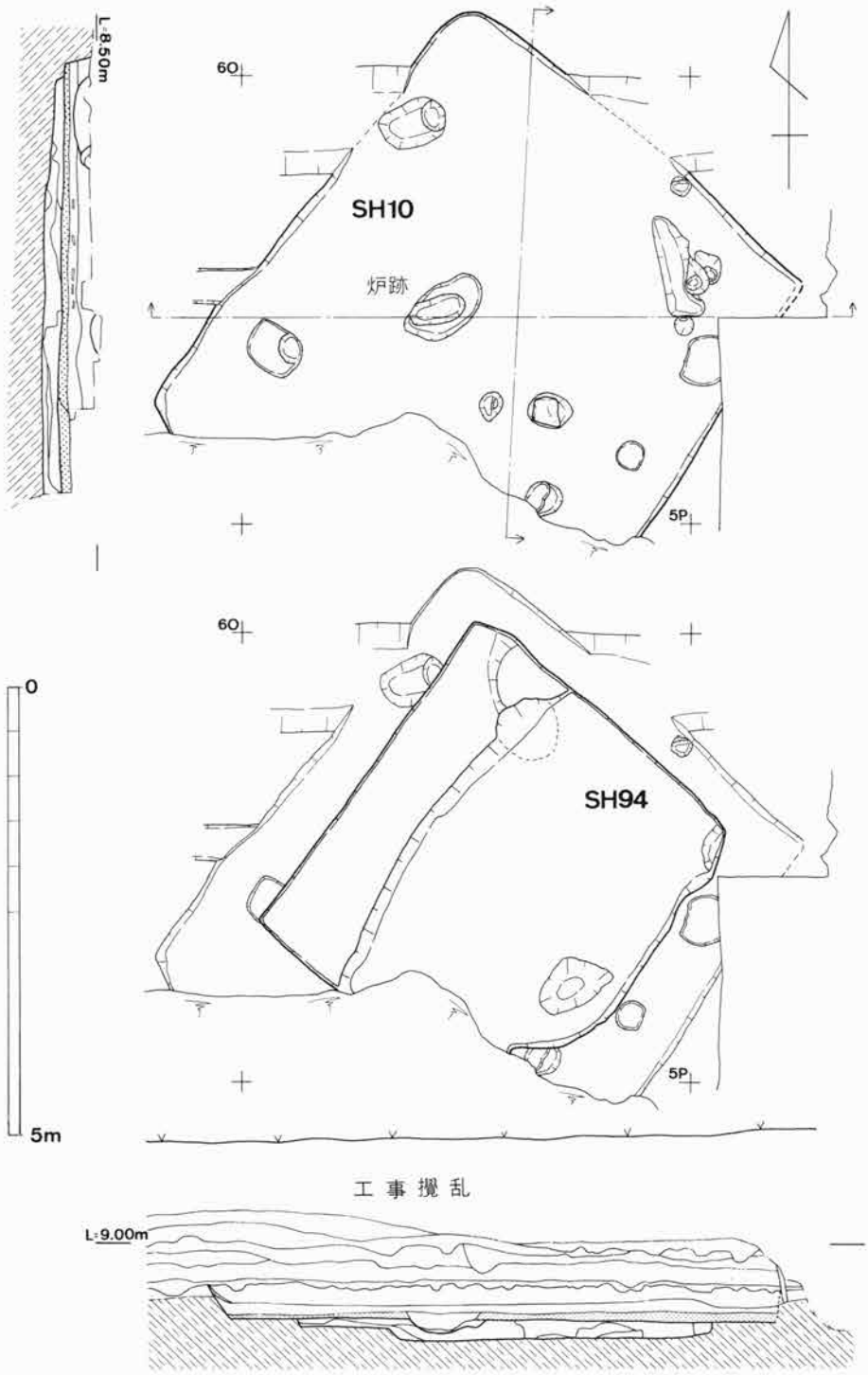
棄」された状態であった。これは，竪穴式住居の竪穴を廃棄土坑に転用したものと判断される。床面では，炉跡(図版第19-1)と，穴に据えられた「まな板」状の石を検出した(図版第19-2)。また，床面上で甕・高杯等がまとまって検出された(図版第19-3・4)。柱穴は4か所で検出したが，いずれも10cm程度の浅いものである。規模は，5.2m×5.85m，検出高25cmである。

SH94(第27図・図版第20-1) SH10の下層で検出した住居跡で，軸線はSH10と一致する。四辺のうち北西の一辺に幅約90cm・高さ約10cmのベッド状の掘り残しを認めた。柱穴は，検出できなかった。規模は3.7m×4.2mである。

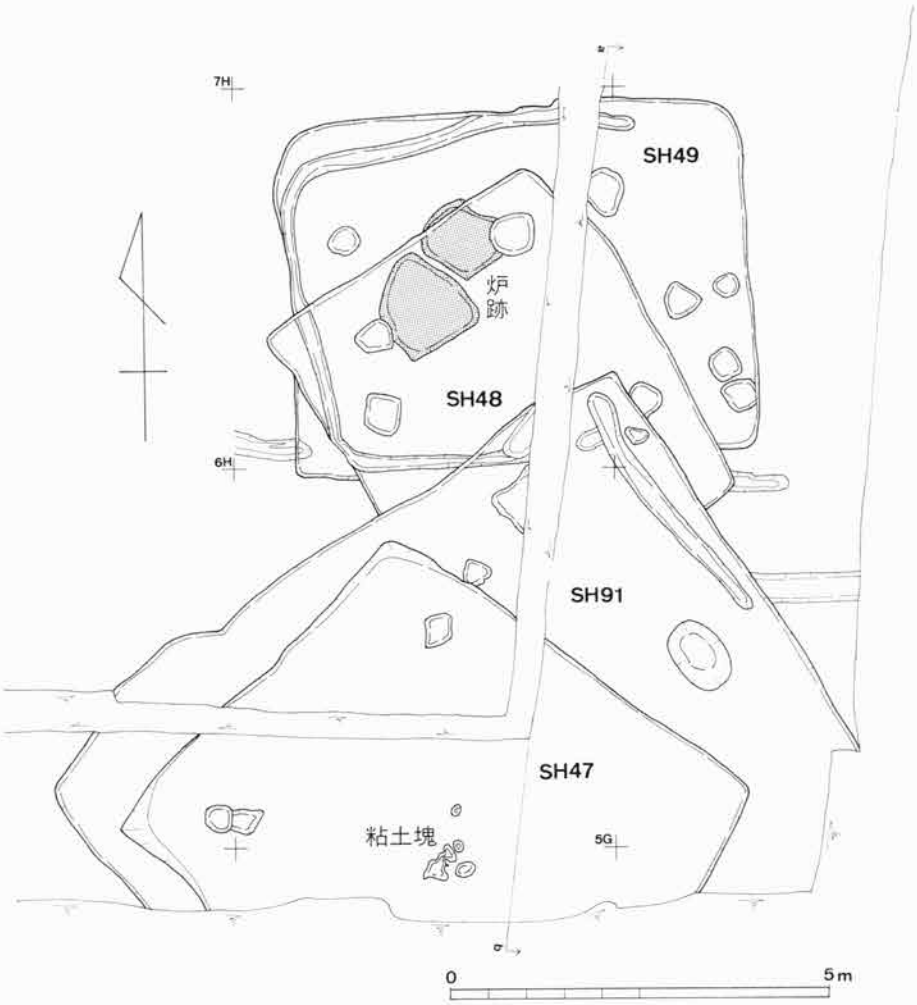
SH47・SH48・SH49・SH91(第28・29図・図版第21-1，22-1・2) 調査地東南部で検出し



第26図　第2・3トレンチ主要遺構配置図

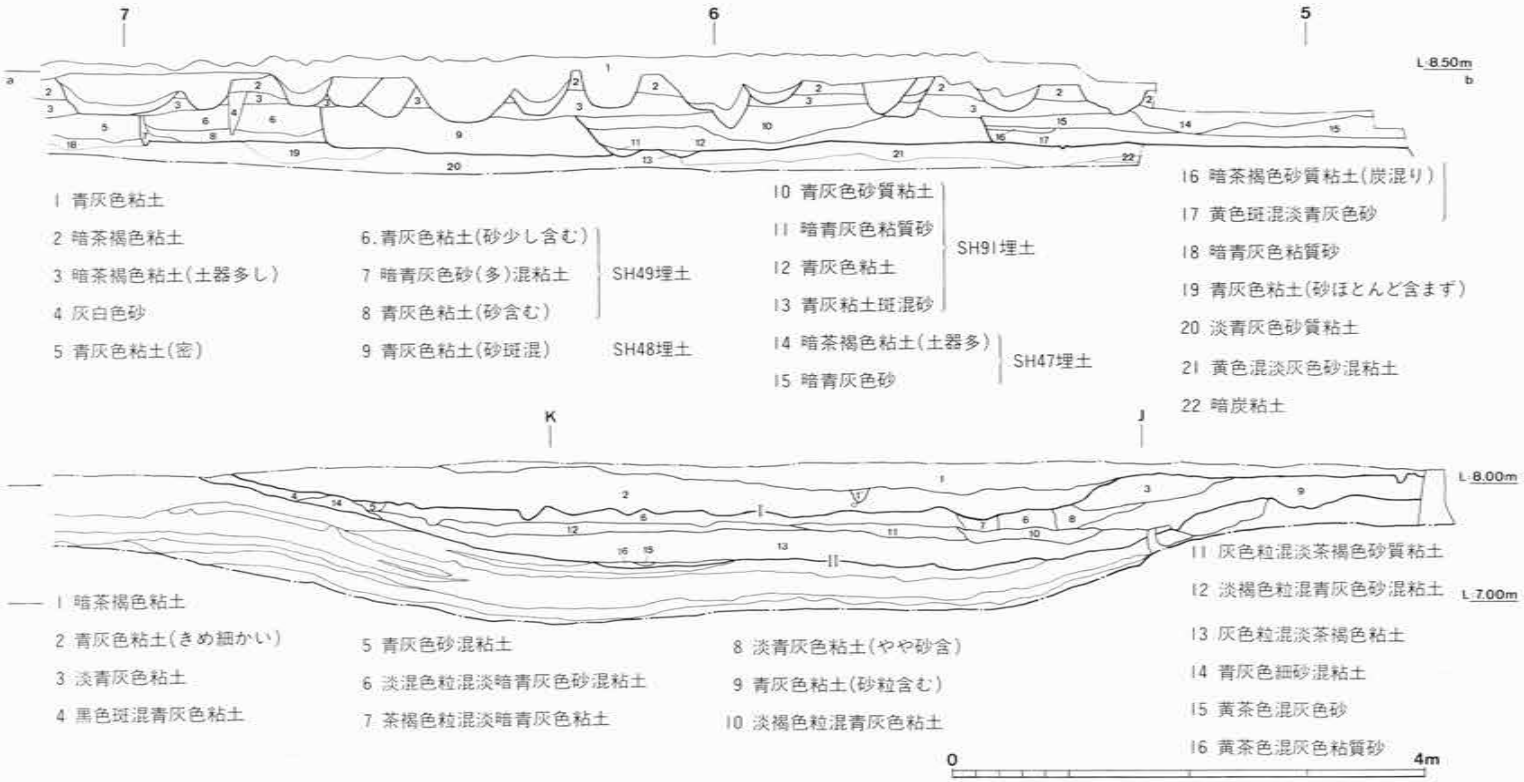


第27図　SH10・SH94 実測図

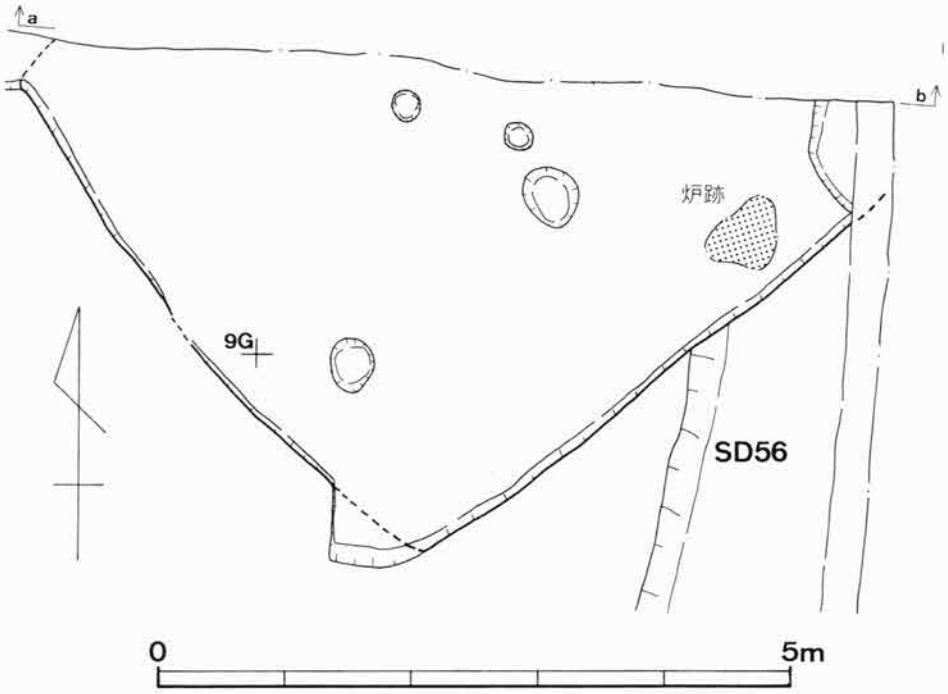


第28図　SH47・48・49・91 平 面 実 測 図

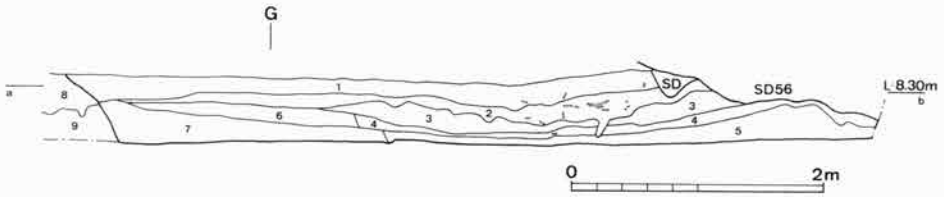
た。重複関係を有し，土層の観察によるとSH49→SH48→SH91→SH47の順に古→新になる。北から南にかけて建て替えを行っている。土器を埋土中より多く出土したのはSH47のみで，SH10，SH89と同じ様相を示す。他の住居跡では遺物の出土はほとんどない。これは，建て替えの度に竪穴を埋め戻したために土器が混入しなかったのであろう。SH49は，壁溝を一部確認している。また，SH48とともに床面で炉跡を検出した(図版第22-2)。SH91の床面でも一部壁溝を検出している。SH47の床面中央で白色粘土塊を認めた(図版第22-1)。SH49は4.55m×6.2m，検出高20cmで，柱穴は4か所で確認している。SH48は4.5m×5.1m，検出高25cmで，2か所で柱穴を見つけた。SH91は，9.15m・7.3m以上・検出高30cmで，一部壁溝を検出した。SH47は5.55m×6.1m・検出高25cmである。各竪穴



第29図　SH47・48・49・91 南北土層図，SR95 南壁北側土層図



第30図　SH89 平 面 図



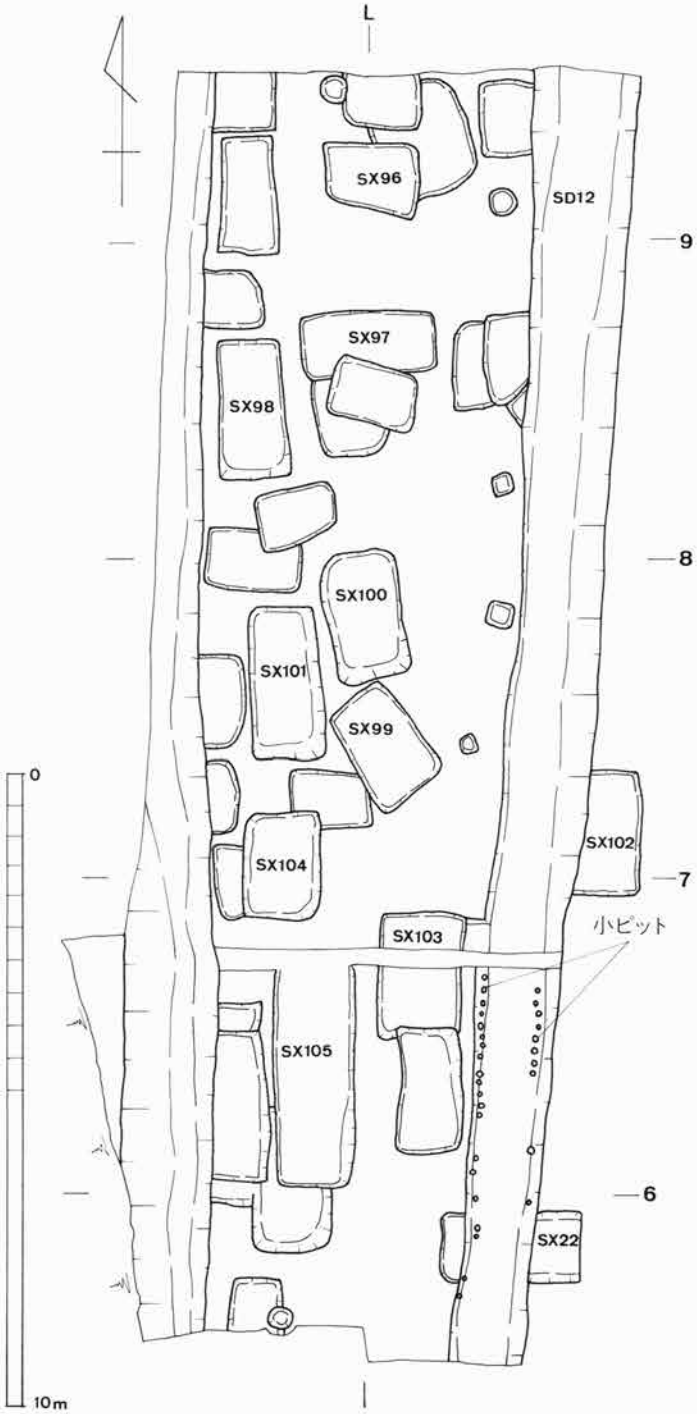
第31図　SH89 北 壁 東 西 土 層 実 測 図

1. 暗茶褐色粘土　2. 黒褐色粘土(土器多)　3. 白砂混青灰色砂質粘土　4. 青灰色砂質粘土
5. 青灰色粘土(きめ細か)　6. 淡青灰色砂質粘土　7. 淡青灰色粘土　8. 青灰色砂混粘土
9. 青灰色粘土

式住居跡床面での土器の出土量はわずかである。

SH89(第30・31図・図版第20-2)　調査地東北部で検出した。北部は調査地外にのびる。SH10と同じく，竪穴を廃棄土坑に転用したもので，埋土中より多くの土器片が出土した。床面中央の壁に近接して炉跡を検出した(図版第22-3)。規模は5.0m×5m以上・検出高15cmである。

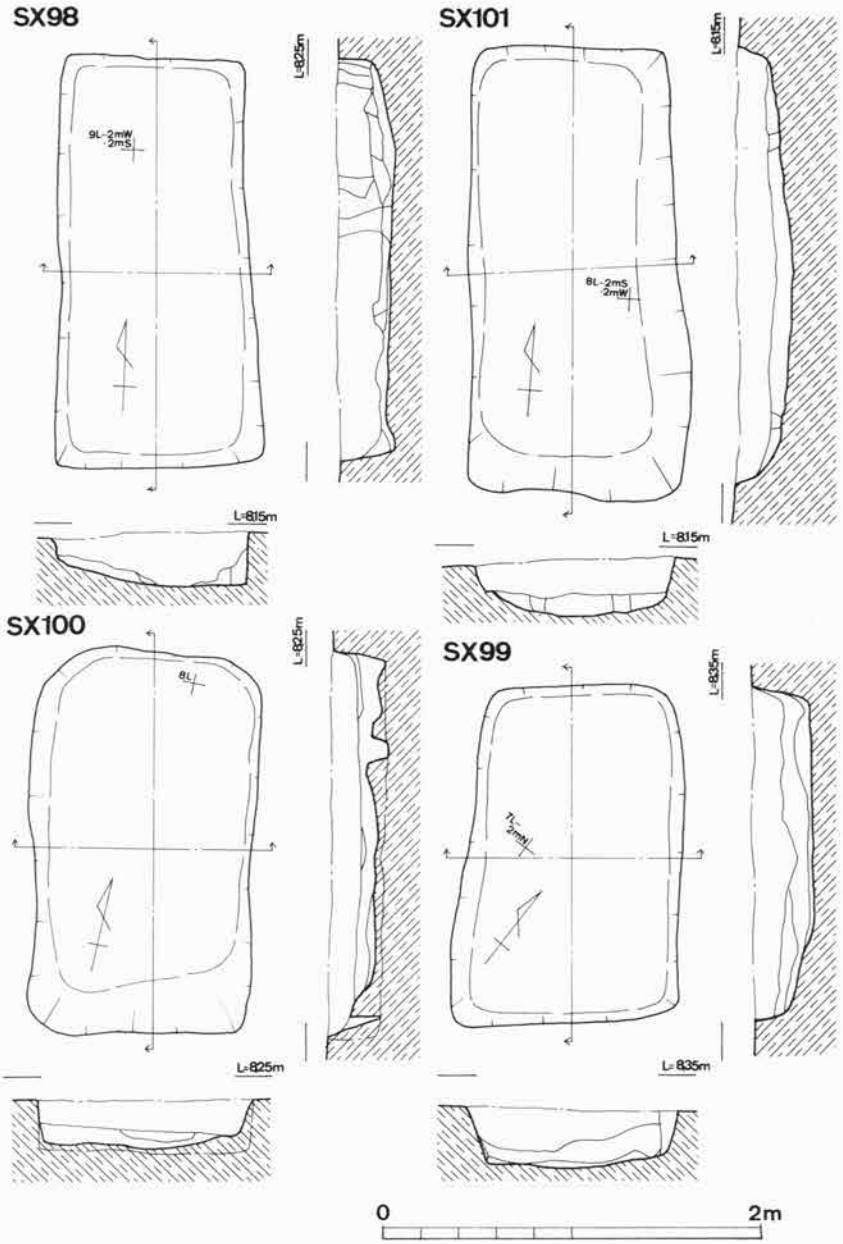
SR95(第29図)　調査地の中央を南北に走る溝である。肩部は緩やかな傾斜を持って下る。竪穴式住居跡等の遺構検出面より，0.4mの下の層(Ⅰより上)で弥生時代終末～古墳時代初頭の土器片を含むことから，当時の村の中を流れていたものといえる。下層からは遺物の出土はない。規模は，幅約8.4mである。



第32図　土 坑 群 平 面 実 測 図

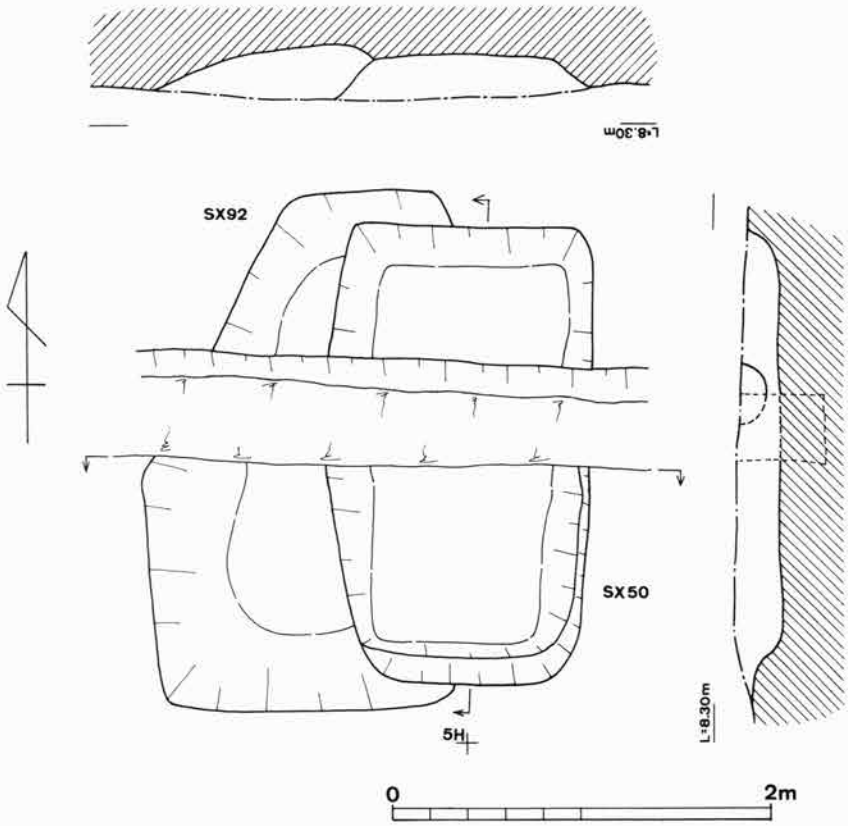
土坑（第32～35図・図版第21-2）

主としてSD12の西側で検出し，一部SH47の上面で検出した。前者は，5 m×20m の狭い範囲に密集して検出した。代表的なものの規模を挙げると，SX96は1.15m×1.45m・検出高20cm，SX97は1.0m×2.15m・検出高20cm，SX98は1.1m×2.15m・検出高28cm，SX99は1.2m×1.8m・検出高30cm，SX100は1.2m×2.0m，検出高29cm，SX101は，1.1m×2.35m・検出高30cm，SX102は，0.9m×1.9m・検出高30cm，SX103は1.3m×1.8m・検出高17cm，SX104は，1.2m×1.7m・検出高33cm，SX105は，1.25m×3.45m以上・検出

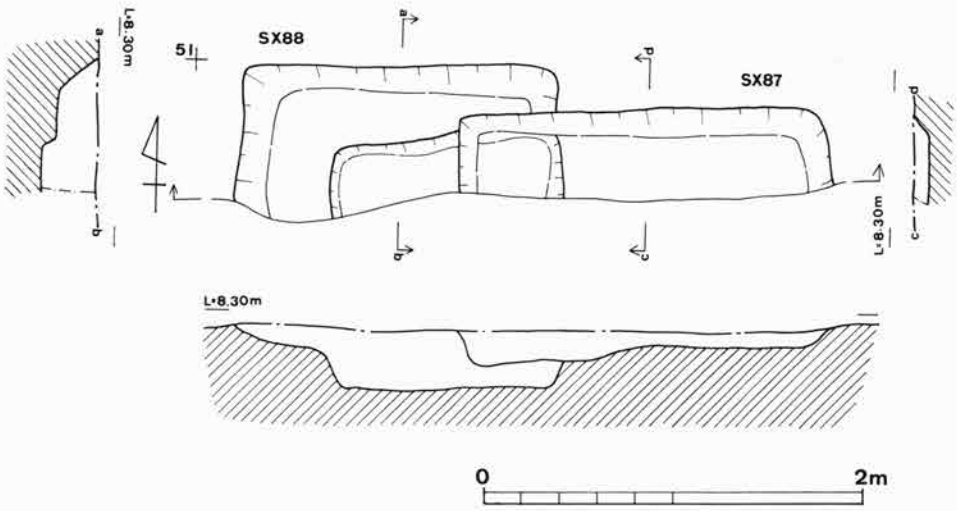


第33図　主 要 土 坑 実 測 図

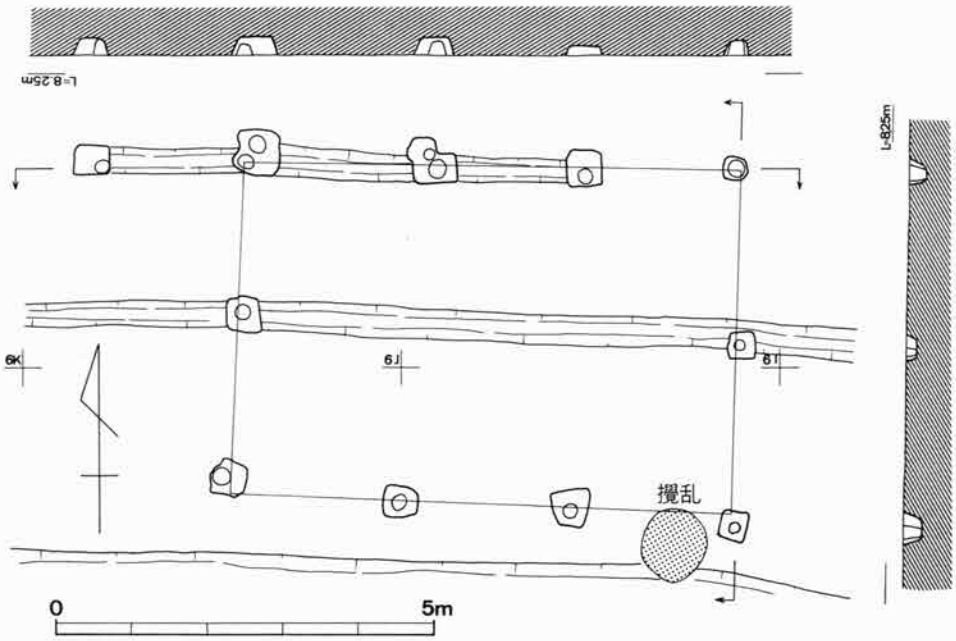
高24cmである。出土遺物は僅少で，数基の土坑の埋土から弥生時代終末～古墳時代初頭の細片の土器が数点～十数点が出土しただけである。ただ，SX102の埋土から，第47図-146に示す灰釉陶器片が出土した。調査地内で比較的多く出土する13～14世紀の土器片を含んでいないこと，この灰釉陶器が示す時期の土器は，調査地内での出土が極めて少ないこと



第34図　SX50・SX92 実 測 図



第35図　SX87・SX88 実 測 図



第36図　SB32 実 測 図

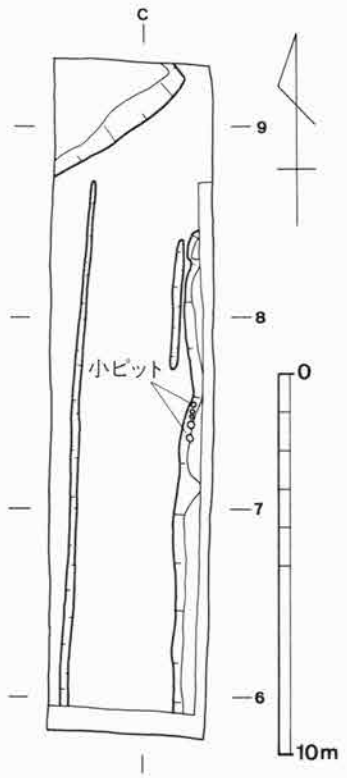
から，これらの土坑群は，この時期の遺構と判断される。断面を見ると，木棺の板材状の層位とみられるものがあり，木棺直葬墓ないしは土坑墓と思われる。これらは，大きく重複するものはなく，上部に何らかの施設があったものと考える。

SH47の埋土上面で検出した土坑は，SX50とSX92，SX87とSX88である。これらは重複関係を有し，前者が後者を切っている(第34・35図，図版第22-4)。SX50とSX92は素掘り溝に切られている。出土遺物は，弥生時代後期～古墳時代初頭までであるが，細片のみである。時期の詳細については決定しがたい。SX50は，1.4m×2.4m・検出高23cm，SX92は不整形で1.55m×2.7m・検出高27cm，SX87は，二段の掘形を持ち，規模は，1.95m×0.47m(現存)・検出高16cm，SX88は，1.65m×0.8m(現存)・検出高32cmである。

掘立柱建物跡(SB32・第36図)　ほぼ東西を向く2間×3間の建物で，規模は4.5m×6.5mである。柱穴内から出土した遺物は，弥生時代後期～古墳時代初頭のものばかりである。しかし，SB32の下にはSR95があり，竪穴式住居と同時期には存在していない。また，柱穴の一部は素掘り溝に切られている。

SX93　SH49の北で検出した土坑である。埋土に比較的土器片を多く含んでいた。底が丸くなり，その性格については分からない。

(3)　**第3トレンチ**(第37図・図版第23-2)　第1トレンチ・第2トレンチともに，遺構面は粘土層であるが，このトレンチにおいては粘質砂上で粘土を埋土とする遺構を確認した。



第37図　第３トレンチ検出遺構平面図

南北方向の素掘り溝，小ピット列，落ち込み等を検出した。北端で見つかった落ち込みは竪穴式住居跡かと思われたが，遺構の肩が緩やかに下ること，底面が斜面になることから，落ち込みと判断した。

4. 出　土　遺　物(第38～47図・図版第23～28)

出土遺物には弥生時代後期から近世にいたる遺物があり，整理用コンテナ・バットにして約30箱分がある。弥生時代後期から古墳時代初頭の土器片が大多数を占める。これらは，概ね庄内式土器の範疇で捉えられるものである。この時期の遺物が多く出土した遺構は，SH10，SH47，SH91，SR95である。しかし，遺構底面からの出土量はわずかで，埋土内の出土が大部分を占め，出土状況から層位的に土器型式を細分化しえるものではない。木津川流域の南山城地域において，同時期の低地集落の調査例は少ないこともあり，この時期の土器組成はよくわかっていない。ここでは，今後の地域研究の資料とするため，器種・器型の総覧を行いたい。

ET-2地区第２トレンチから出土した弥生時代後期から古墳時代初頭の土器の接合作業を行ってから，器形がわかるものをすべて抽出して，その分類を行い，個体数を各遺構・包含層毎に調べた。土器の実測図は，各分類基準がわかる程度だけを掲載した。各実測図の土器の出土地点等は，遺物観察表を参照されたい。但し，遺構内出土であっても，埋土中から出土したものが大多数であり，そのままその遺構の時期を示すものではない。

壺(１～17)　壺は，この時期の他の遺跡と同様に，全個体数に占める割合は少ない。大きく９タイプに分かれる。

直立気味にやや外反する短い口縁を持つもの(１～５)のうち，端部が丸く終わり，球形の胴部をもつもの(１～４)と，端部が上方に突出するものがある(５)。このタイプのものが占める割合が多い。

６・７は，大きく外反する口頸部を持つが，直線的に外方へのび，端部は丸く終わるもの(６)と外湾しつつ上方にのび，端部は四角く終わるもの(７)がある。

８は，直立気味に外反する長い口頸部をもち，端部は丸く終わる。胴部は，倭型をなす。

二重口縁を有するもの(9～11)には3タイプがあり，一段目と二段目の屈曲が少なく，ほぼ直線的に立ち上がるもの(9)，二段目が大きく外反するもの(10)，二段目がやや外傾して短く立ち上がるもの(11)がある。

12は，斜め上方から直立し，ラッパ状に大きく開く口縁を持つものである。

13・14は，上方へ直立気味に立ち上がる頸部に外湾して横方向にのびる口縁を有する。口縁端部は，四角く終わる。

15は，斜め上方に立ち上がる頸部と肥厚する口縁をなし，口縁端部は台形を呈する。

16は，斜め上方にのびる口頸部を持ち，口縁端部は上方にのびる。口縁と頸部に凸帯を貼り付け，凸帯上には擬凹線を刻む。

17は，肩部に波状文・直線文を施文する。近江系のものと思われる。

甕(18～64)　甕はバラエティーに富み，大きく16分類できる。

18～25は，器壁が薄く,「く」の字形の頸部を有し，口縁は斜め上方にのびる庄内式甕である。口縁端部の形態で更に3タイプに分かれ，若干の肥厚もしくは上方につまみ上げられるもの(18～21)，明瞭につまみ上げられ，端部に面を有するもの(22・23)，外方につまみ出され，口縁端内面に面を持つもの(24・25)がある。このタイプは河内産(生駒西麓産)のものが多く，特に後二者は大多数が河内産である。

26～29は，器壁が薄く,「く」の字形の頸部を有し,口縁は斜め上方に直立気味に立ち上がる。先のものに類似した形態を取るが，それに比べて頸部はすぼみ，口縁端部は丸く終わる。26・27は,「く」の字に折れ曲がる頸部で,28・29は，頸部の屈曲が緩やかである。これらは荒いタタキ目を外表面に残す。

30～39は，縦長の球胴形の体部で，外面は荒いタタキ目で調整を施し，口縁は外上方に短く立ち上がる。甕に関しては，河内産を中心とする庄内式甕とともに多く出土するタイプである。小分類でき，30は，口縁端部が上方につまみ上げられ，口縁部に明瞭な稜線を持つ。31は，口縁部が屈曲し，頸部下にヘラ描き沈線で施文される。近江系と判断される。32～34は，口縁端部が丸く終わり，最大腹径が体部中央にある。大型品である。35・36は，小型品で，最大腹径が体部中央にある。37は，口縁が上方に短く立ち上がる。38は，口縁が上方に外反して立ち上がる。39は，大型品で最大腹径が体部下半にある。SH10床面で84の高杯とともに出土した。

40は，口縁が外反し，腹径が口縁径を超えないものである。他の土器と比較して，やや古い型式のものである。

41・42は，肩の張った体部に短く上方にのびる口縁を有する。甕の1～5のタイプのものに類似するが，器壁が厚く頸部がやや広い。

43～45は，頸部から直立気味に立ち上がった後，外反して終わる口縁を有するもので，端部を強くナデてつまみ上げるもの(43・44)，端部を上方に突出させ，広義の二重口縁をなすもの(45)がある。

46～49は，外方に大きく開く口縁と張りの無い体部をもち，口縁径＞体部径で，口縁端部はつまみ上げ気味に終わるものである。これには，口径18～20cmの小型品(46～48)と口径25cmを越える大型品(49)とがある。

50・51は，外傾気味に斜め上方に開く口縁を有するものである。これには，口縁径＞体部径(50)と口縁径＜体部径(51)とがある。

次の3タイプは，いわゆる近江型のものである。

52・53は，外上方に長く開く口縁と短く立ち上がる端部を有する。

54・55は，水平気味に長く開く口縁に短く立ち上がる端部を有するものである。小型品のみである。

56は，斜め上方に短く立ち上がる頸部に短く立ち上がる端部を持つ。内外面ともに摩滅が著しく，施文等は見られない。

57は，斜め上方に立ち上がる口縁に端部は強くナデて面を作る。

58・59は，二重口縁をなすが，上方にまっすぐに立ち上がる口縁を持つもので，口径18cm程度の大型品(58)と口径12cm程度の小型品(59)とがある。

60は，口縁が斜め上方に緩やかに立ち上がり，屈曲して上方に内湾する。屈曲部外面に粘土を貼り付けている。

61・62は，口縁が斜め外方に立ち上がり，やや上方に屈曲して終わる端部を持つ。丹後系のものと思われる。

63は，斜め上方に立ち上がる口縁をもつもので，小型品である。

64は，ほぼ垂直に立ち上がり，端部付近で外方に開く口縁を有する。

壺・甕・甑底部(65～83)　土器の底部に関しても，その器形が推定できるものに関して分類を行った。

底部から体部への立ち上がりが緩やかなもので，壺の底部に相当するのが，65～70である。これらには，平底のもの(65)，底部が下方に突き出すもの(66・67)，底部が下方に突き出し，つくりが不安定なもの(68)，底部の外面中央が凹むもの(69)，一円玉程度の底部を有するもの(70)がある。底部の外面中央が凹むものの比率が大きい。

71～79は，底部から体部への立ち上がりが急なもので，甕の底部に相当する。これには，平底のもの(71～74)，底部が下方に突き出すもの(75)，底部の外面中央が凹むもの(76・77)，一円玉程度の底部を有するもの(78)，尖底を有するもの(79)がある。平底のものは，

底面が広いもの(71・72)，底面が狭いもの(73)，中央が凹むもの(74)がある。

80～83は，底部中央に穿孔があり，甑の底部に相当するものである。これには，平底(80～82)と一円玉程度の底部(83)とがある。

高杯・高杯脚(84～94)　杯部が直線的に大きく外方に開くもの(84～89)と内湾気味に立ち上がるもの(90)とに大別できる。前者には，杯底部が直線的に水平方向にのび，大きく外反する口縁を持つもの(84)，杯底部がやや上方に内湾気味に立ち上がり，口縁が大きく外反するもの(87)，杯底部が直線的に水平方向またはやや内湾気味に立ち上がり，外面に段を有するもの(86～88)，杯底部から口縁部まで同じ厚さの器壁で口縁端部が四角のもの(89)がある。89は，高杯の脚部であるかもしれない。

器台(96～114)　大型品と小型品がある。大型品は少なく，23個体を確認したのみである。ゆるやかに外反する頸部から屈曲して斜め上方にのびる口縁のもの(96～99)と，屈曲部外面に粘土帯を貼り付け垂下するもの(100～102)とがある。

小型品には，斜め上方にのびる受け部(103～113)と，横方向に開く受け部(114)とがある。前者は更に，長い柱部と屈曲して外方に大きく開く底部(103～105)，短い柱部と屈曲して外方に大きく開く底部(106・107)，スカート状に直線的に開く脚(108～112)，長い柱部と水平方向に屈曲する底部(113)とに細分できる。

低脚高杯(115～122)　内湾する半球形状の椀を持つもの(115～121)と，水平方向に開き斜め上方に立ち上がる口縁を有するもの(121・122)とがある。前者のうち，115～117は，まっすぐな柱部と屈曲して外方に大きく開く脚部を持ち，118～120は，スカート状に開く脚部を有している。

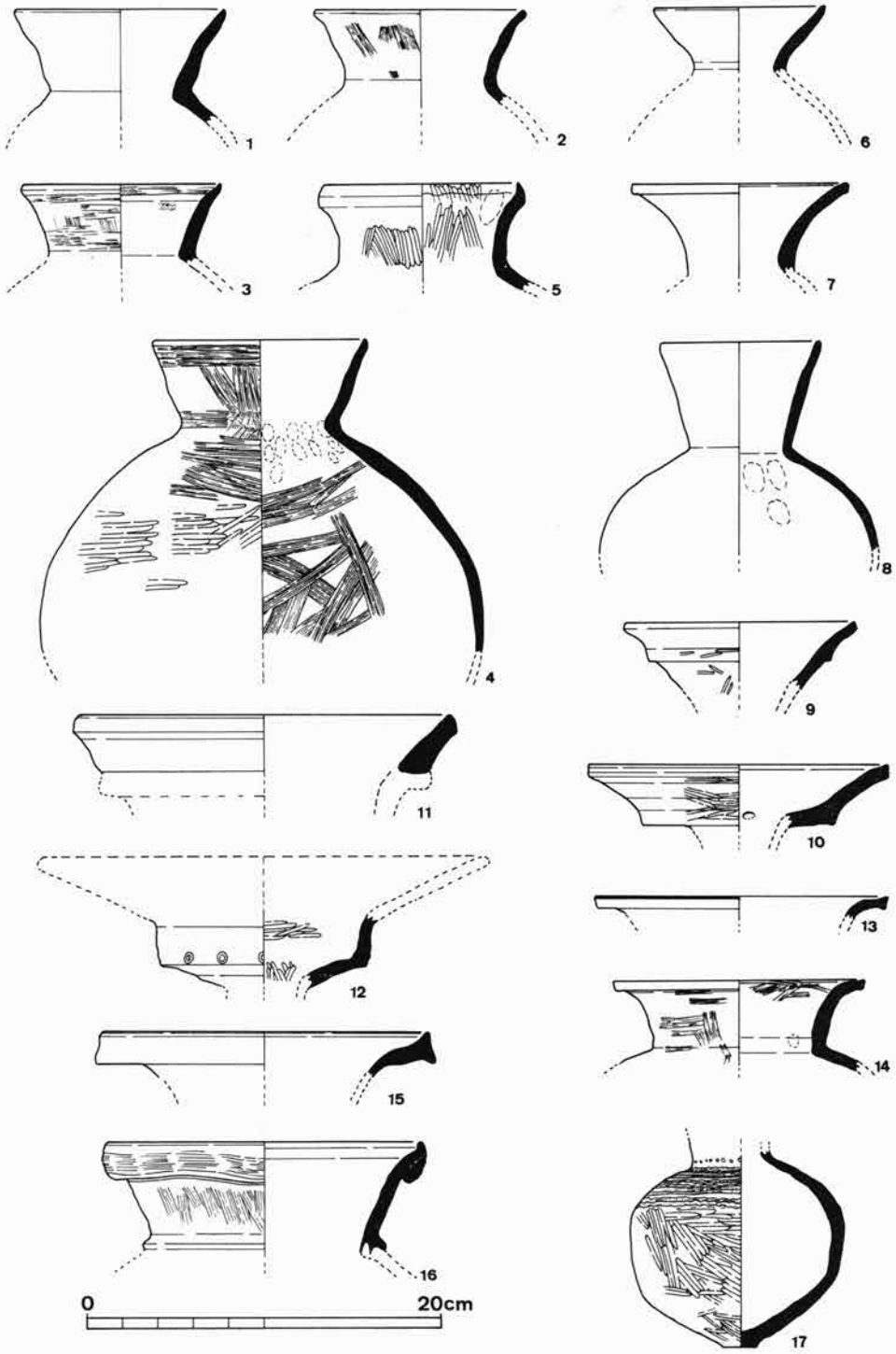
椀(123～126)　台・脚を持たないもの(123)，外方に開く低い脚を有するもの(124・125)，中実の低い台を有するもの(126)とがある。124は，脚の底部端が下方に突き出るのに対して，125は，脚の底部端が丸く終わるものである。

蓋(127)，小型丸底壺(128)，手焙り形土器(129)は，各1個のみを確認したものである。手焙り形土器は体部片であるが，腹部に凸帯を巡らすことから手焙り形土器と判断する。その他にミニチュア土器(130～132)がある。

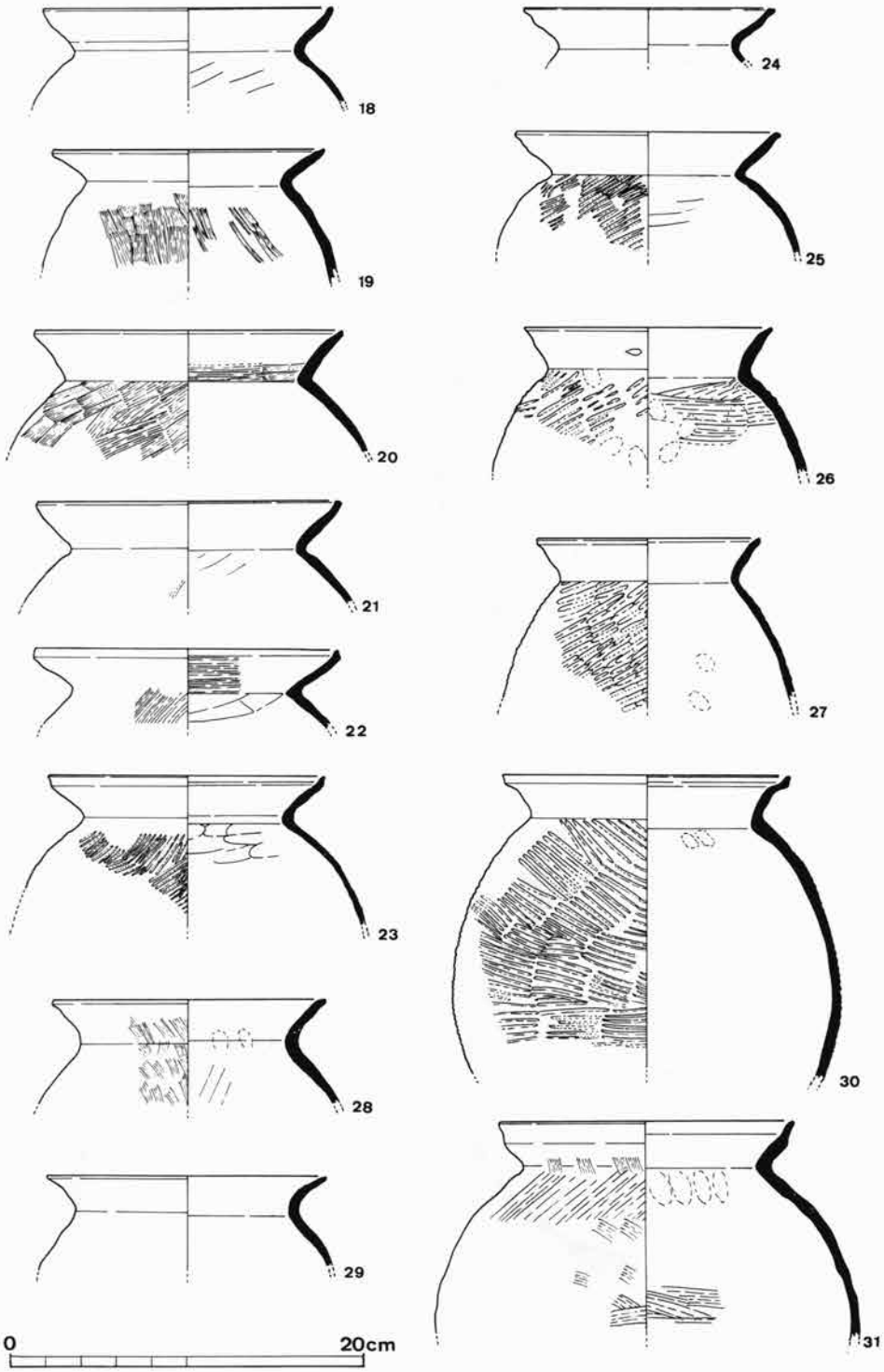
そのほかの時代の土器は第47図に示す。

5. 噴砂について

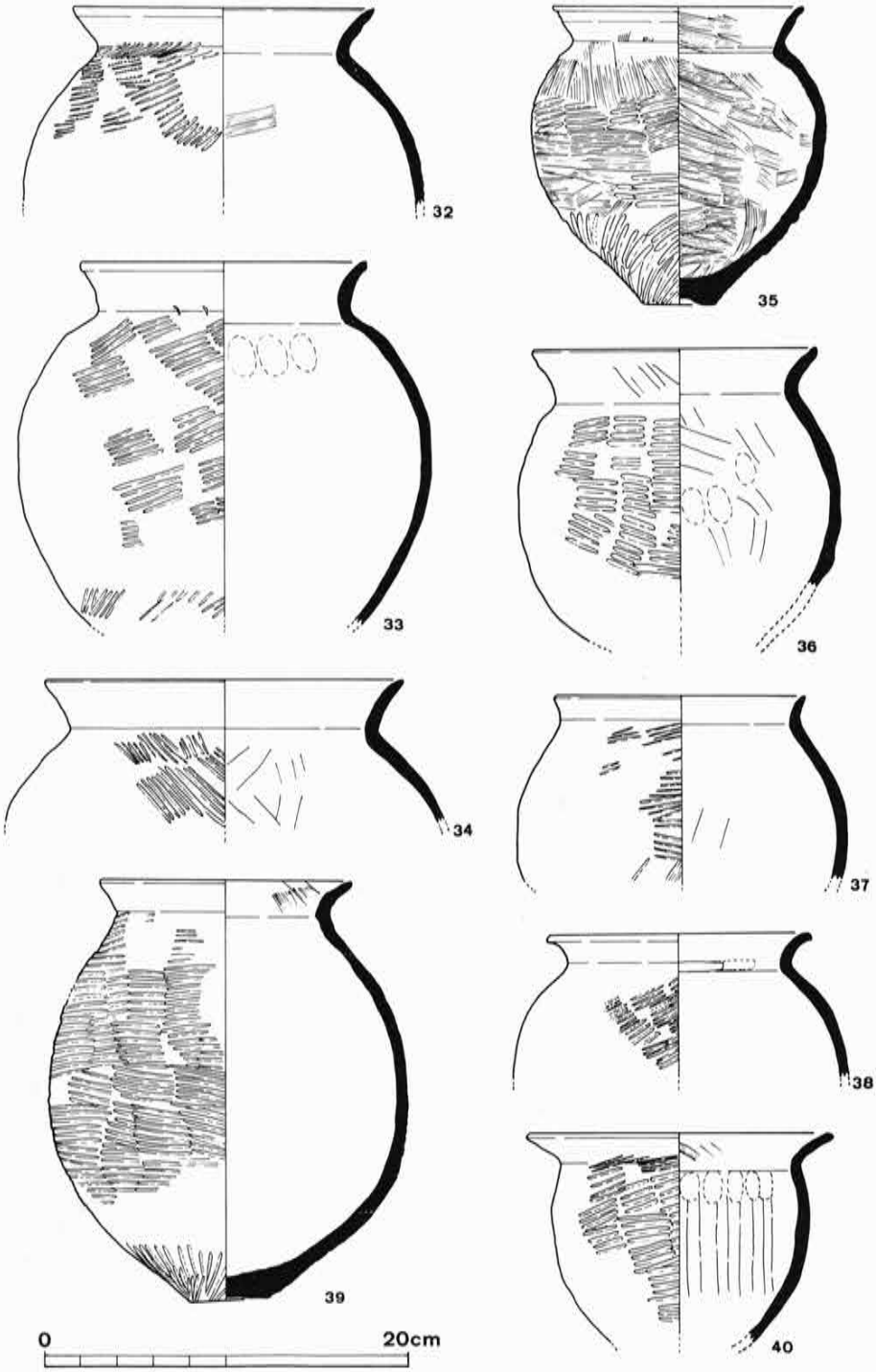
木津川河床遺跡で検出している噴砂については，『京都府埋蔵文化財情報』第26号で考古学と地質学の立場から述べたので，ここでは詳しく触れない。ただ，その原稿の脱稿後にわかった事実―噴砂の生成年代についてのみ記したい。



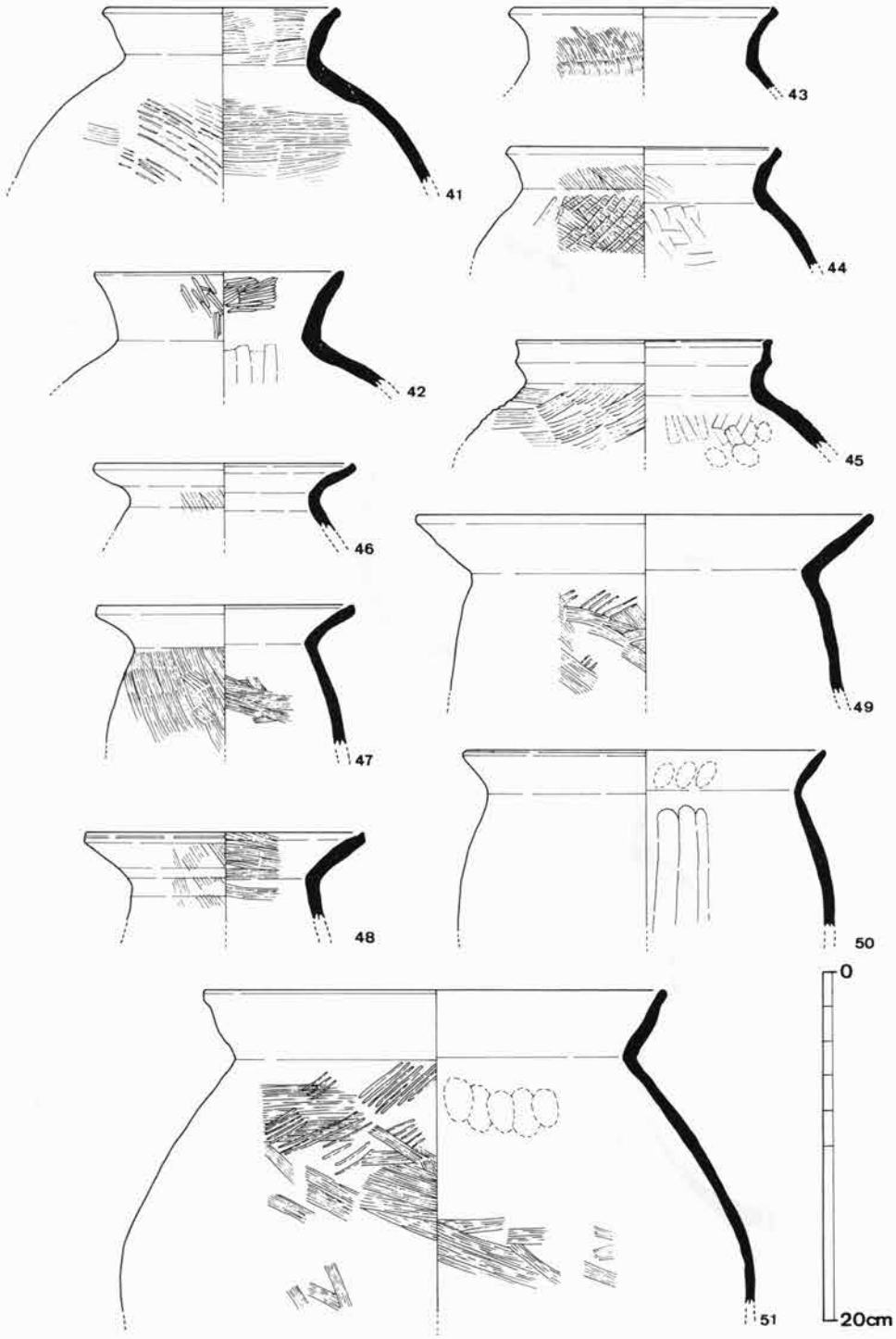
第38図　出土遺物実測図 (1)



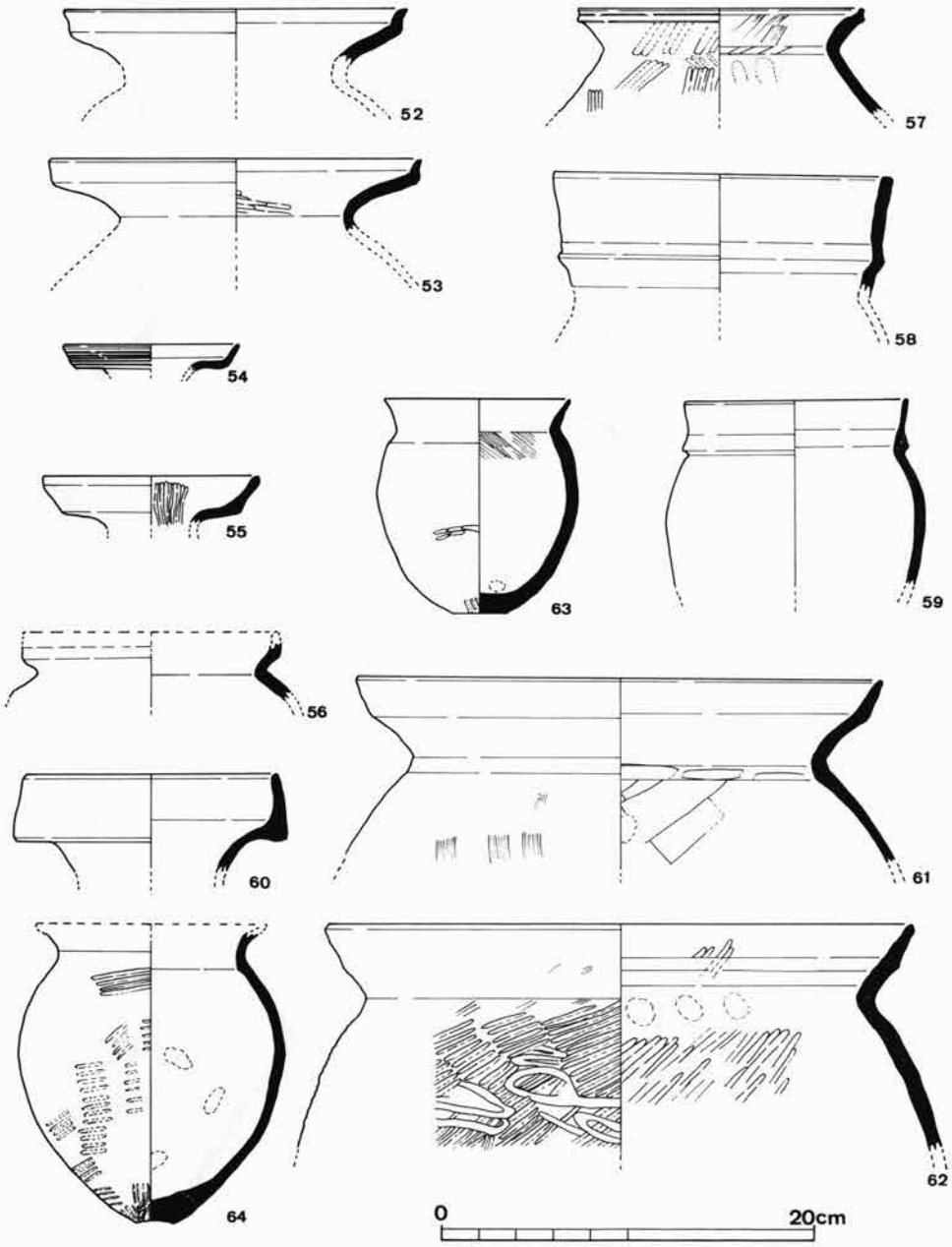
第39図　出土遺物実測図 (2)



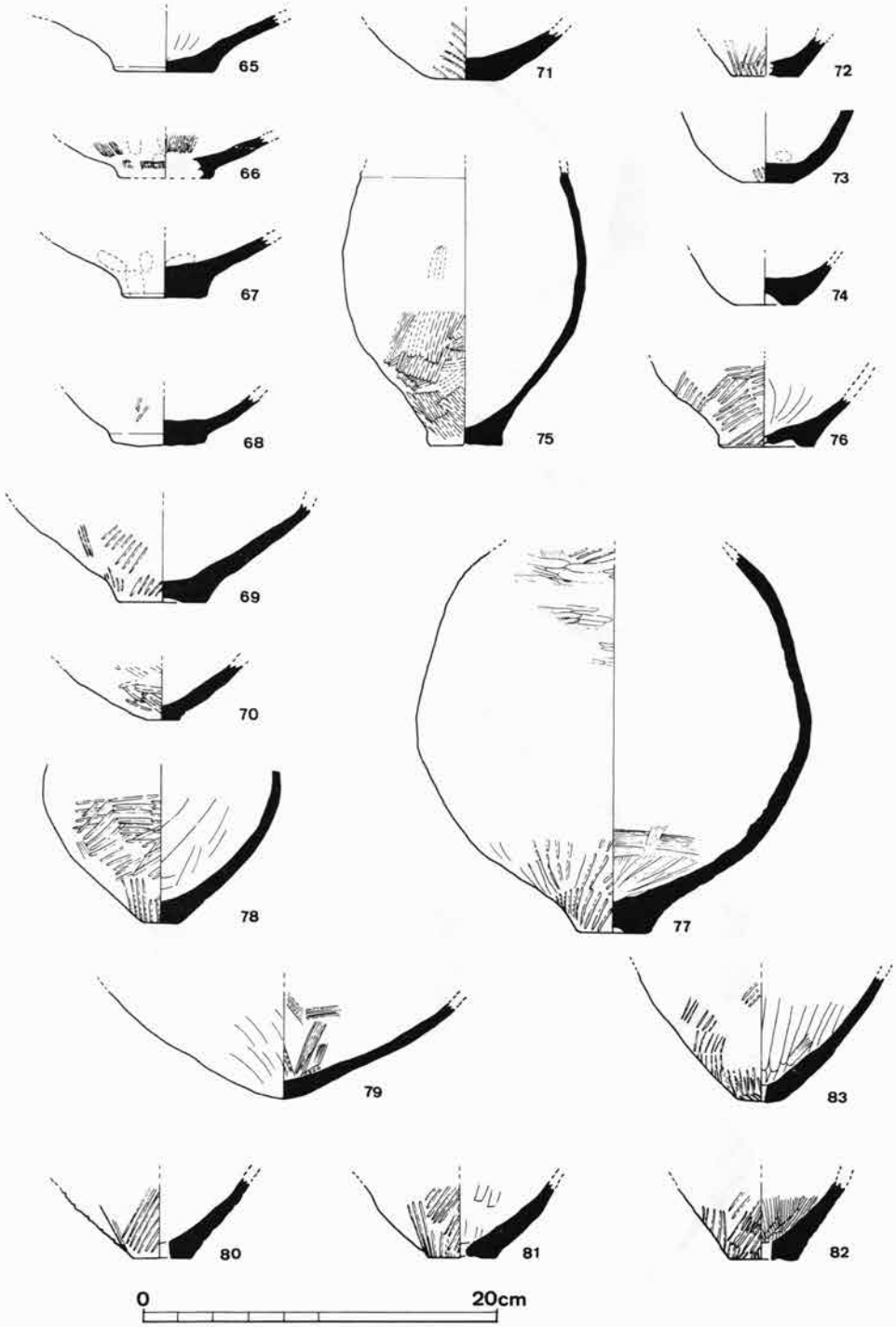
第40図　出土遺物実測図 (3)



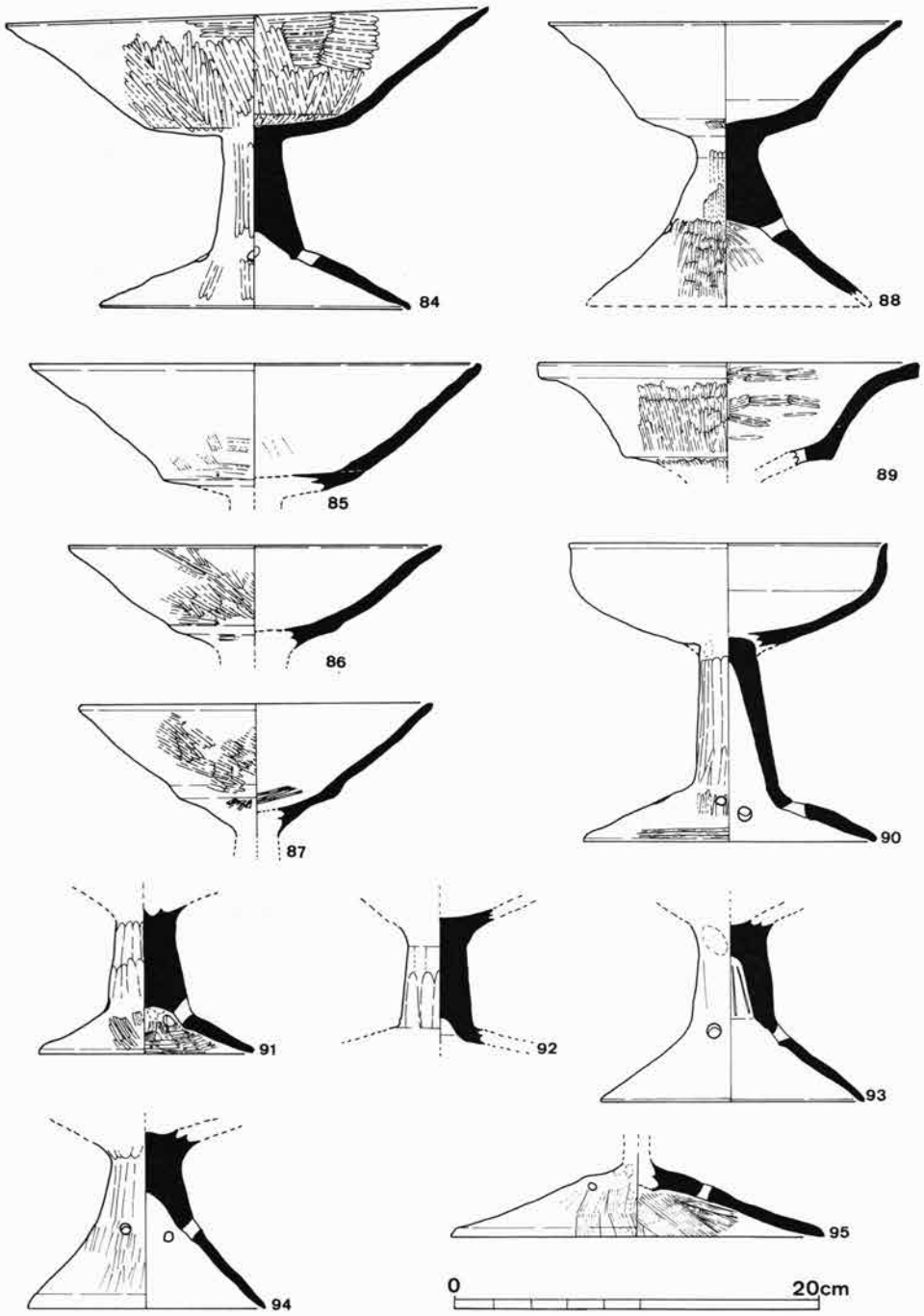
第41図　出土遺物実測図 (4)



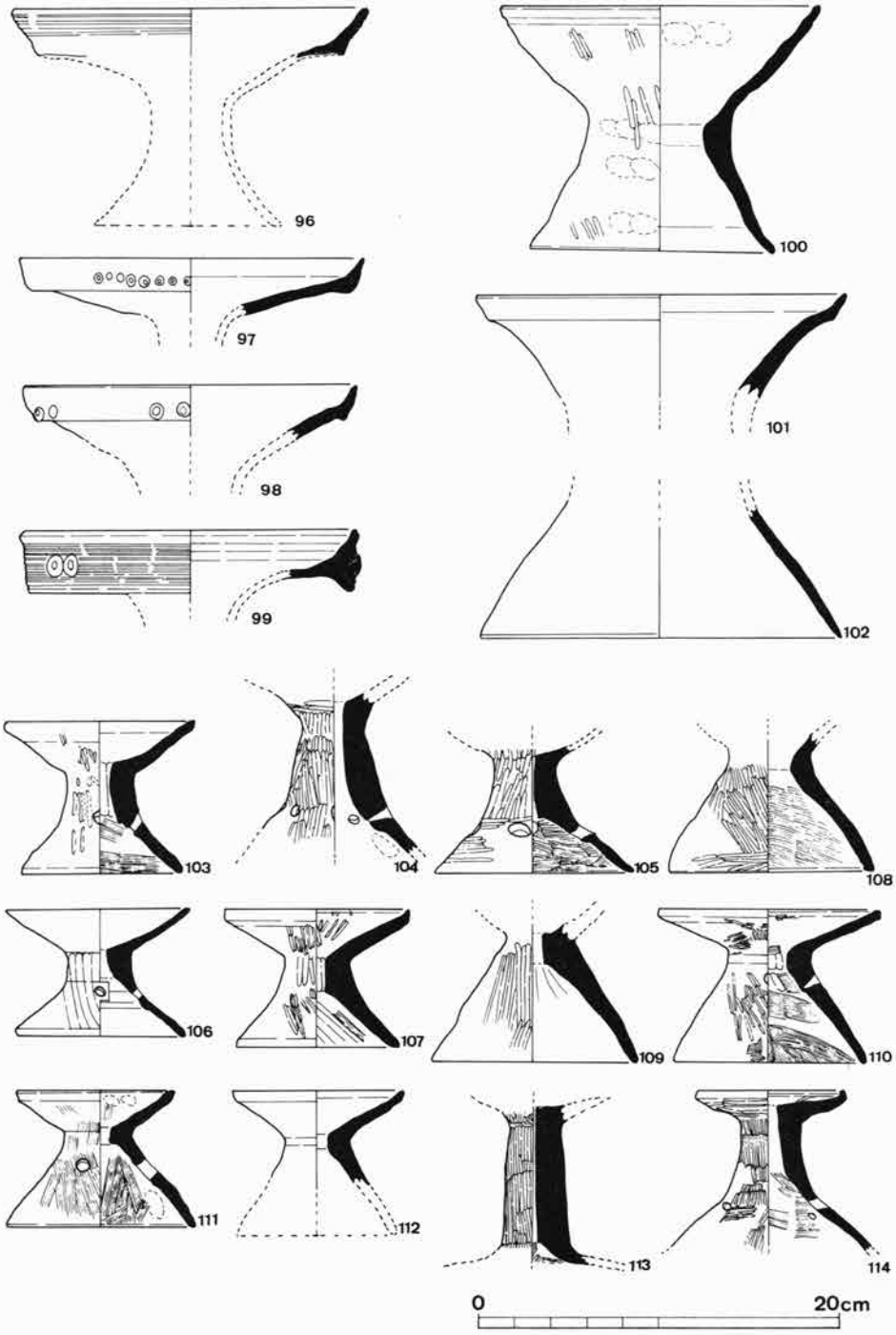
第42図　出土遺物実測図 (5)



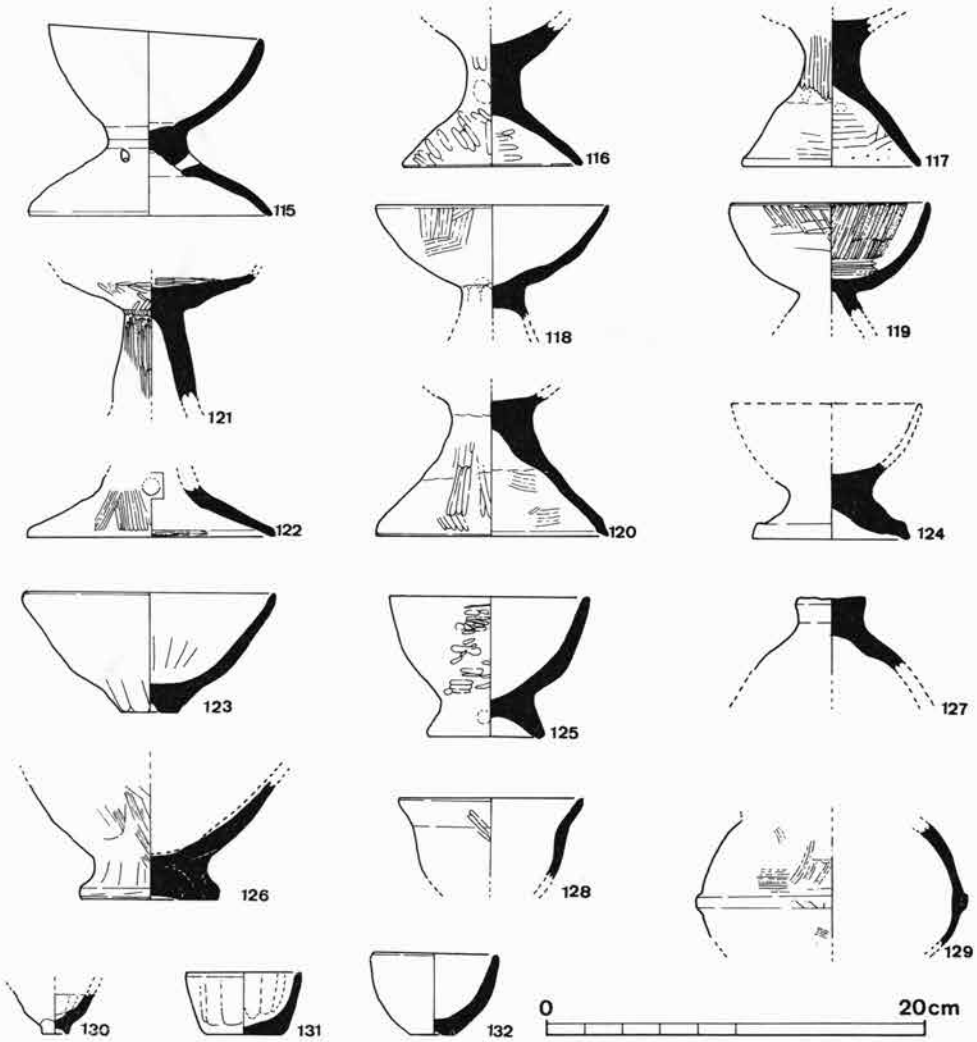
第43図　出土遺物実測図 (6)



第44図　出土遺物実測図 (7)

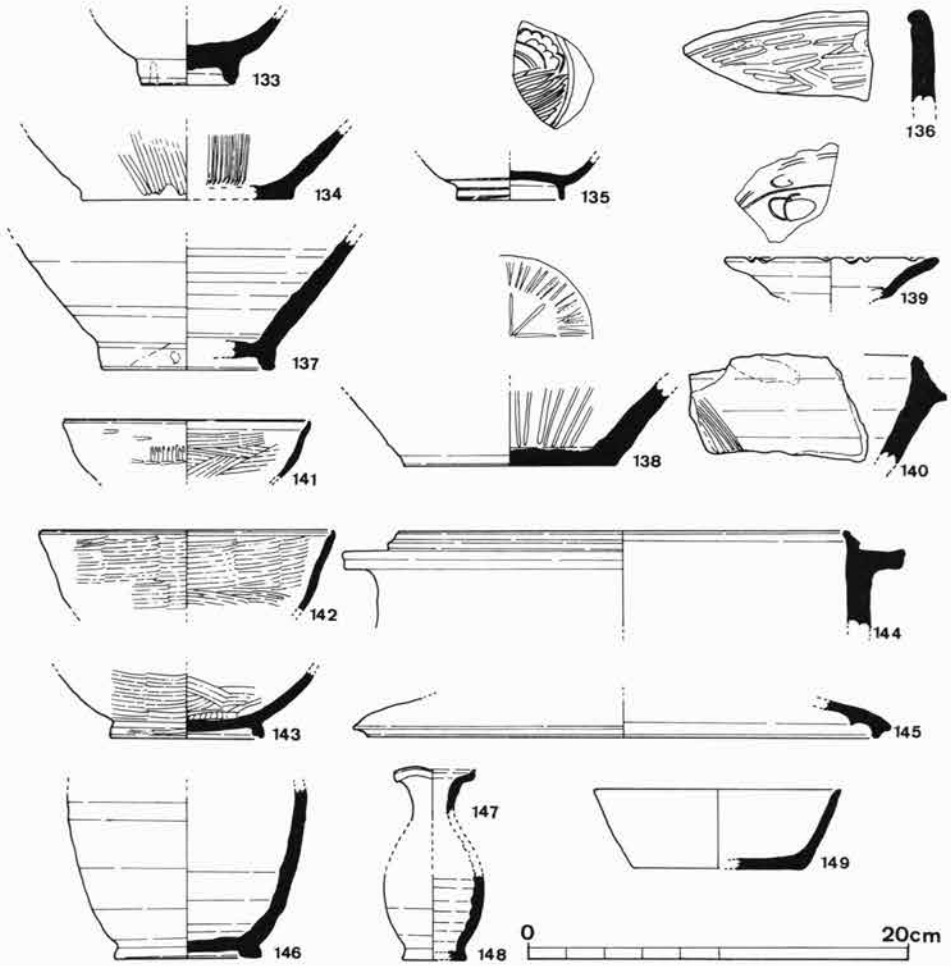


第45図　出土遺物実測図 (8)



第46図　出土遺物実測図 (9)

さきの報告では，噴砂は土層・遺構の切り合い関係より，14世紀前半から18世紀前半の間に起こった大地震で生じたと結論づけた。その後，土器の整理を進めたところ，遺構との切り合い関係から，噴砂の生成年代の上限が15世紀代にまで下ろせることが判明した。ET-2第２トレンチのSD08は，その溝に沿って噴砂の亀裂が生じているが，その溝内より出土した土器の実測図を第47図133～136に掲げる。また，138の土器は，噴砂の砂中より出土した。これは，噴砂が引き裂いた土層中に包含されていたものと考える。これらの土器は概ね15～16世紀代のもので，この時代以降に噴砂が生じたものといえる。噴砂をもたらせた地震の上限が約１世紀下がるが，さきの報告の論旨・結論については変わらない。



第47図　出土遺物実測図 (10)

6. ま　と　め

木津川河床遺跡では，今回，庄内式併行期の集落遺構を確認し，庄内期の土器が比較的まとまって出土した。昭和58年度調査では多くの布留式土器が出土し，この地に当時の集落が営まれていることが判明している。ここでは，弥生時代から古墳時代にかけて，①木津川河床遺跡と周辺遺跡との関係，②地域間の土器交流の点から若干のまとめを行いたい。

①　木津川河床遺跡と周辺遺跡

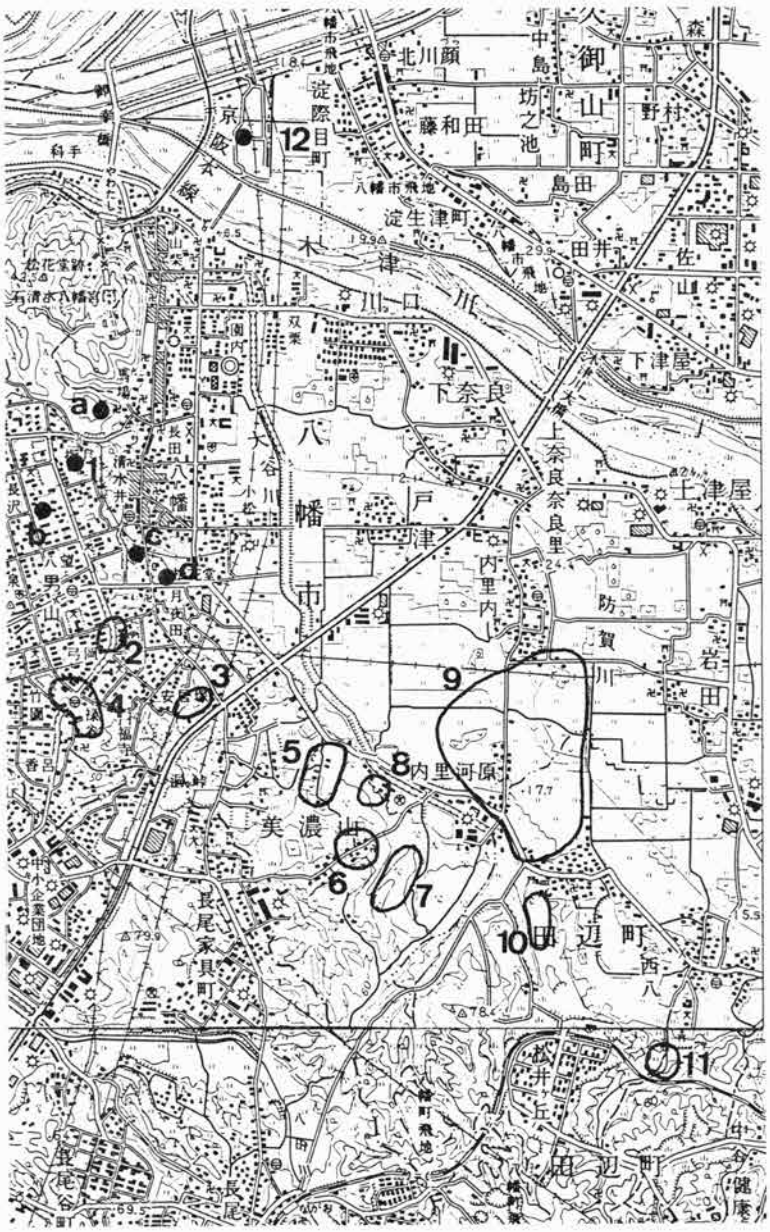
まず，木津川河床遺跡と有機的な関連を有していたであろう周辺地域を限定したい。木津川はその歴史の中で，その流れを幾度となく変えている。現在の木津川は南東から八幡丘陵の北縁をかすめるように湾曲して流れ，そこで川道を南西に変えるが，本来は淀周辺

まで北流し，宇治川・桂川と合流して流れを南へと変えていた。すなわち，この遺跡は現在でこそ木津川右岸に位置しているが，従来は木津川左岸にあり，八幡丘陵と陸続きであったと考えられる。この遺跡の周辺地域を木津川左岸一八幡丘陵周縁地と理解したい。

八幡丘陵とその周辺には幣原遺跡・新田遺跡・南山遺跡・本郷遺跡・向山遺跡などが点在する(第48図)。これらのうち，発掘調査がなされている遺跡について概観しよう。幣原(しでばら)遺跡(注5)では，2棟の竪穴式住居跡を確認しており，弥生時代後期後半の土器が出土している。美濃山廃寺下層遺跡(注6)でも，竪穴式住居跡2棟を確認しており，弥生時代後期後葉の土器が出土している。新田遺跡(注7)では古墳時代中期の竪穴式住居跡とそれに伴う須恵器・土師器を，包含層中より弥生時代後期後葉の土器を検出している。狐谷横穴群(注8)では，横穴群と谷を隔てた東の台地上で弥生時代Ⅳ～Ⅴ様式中葉の溝・土坑を検出している。また，南山遺跡(注9)ではⅤ様式後葉から庄内期の集落跡が調査されている。金右衛門垣内遺跡(注10)ではⅣ様式の遺構・遺物が調査・確認されている。これらの遺跡の消長を付表3にまとめておく。木津川下流域左岸の集落のうち，木津川河床遺跡を除くとすべて八幡丘陵上もしくは周縁の微高地上に立地している。南山遺跡を除く遺跡は，遅くとも弥生時代後期後葉段階でその集落活動を停止しており，居住地を他の場所に移していることは注目される。それに対応して，低湿地上の木津川河床遺跡の集落が成立し，少なくとも布留式段階まで集落が営まれる。後期後葉の集落の多くが廃絶していることから，各集落の個別の主体的な選択の結果とは考えにくい。少なくとも，八幡地域の首長層の主導による地域共同体の統合と，それに伴う集落立地の規制が庄内期になされたと考えられよう。

②　土器の交流

弥生時代後期以前の京都市域から南山城にかけての地域は近江型土器が高い割合で出土する地域として捉えられている。まず，調査例の多い向日丘陵の例を見てみたい。弥生時代後期の段階での各遺跡の近江型の土器の出土比率は，今里遺跡で61.5%，森本遺跡では6%，中海道遺跡では5.7%が近江型と紹介されている(注11)。次に八幡丘陵周縁の遺跡での例を見てみたい。幣原遺跡(注12)では，出土した後期後半の土器のうち，約20%が近江系のものと報告されている。また，美濃山廃寺下層遺跡では，後期後葉の土器が出土しており，その比率は明らかではないが，「大半が近江・東海系の土器であり」と紹介されていて(注13)，その様相は幣原遺跡と類似するものと推察される。田辺町の天神山遺跡(注14)では弥生時代後期の竪穴式住居跡20棟が調査されており，近江系の土器は約20%の出土比率である(注15)。このように，八幡周辺の後期段階の遺跡にあっても，近江系の土器の出土比率は高い。しかし，その直後の庄内期の木津川河床遺跡ではその割合は極めて低く，受け口状口縁を有する近江系の甕は甕の口縁数の約2%(602対11)に過ぎず，先の遺跡に比べて極端に少ない。



第48図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

a：石不動古墳　b：茶臼山古墳　c：西車塚古墳　d：東車塚古墳

それに対して，庄内併行期の当遺跡では生駒西麓産（河内産）と判断される土器片の出土が多く認められることは特筆すべき点である。その大多数が甕であるが，甕の口縁部の全破片数に占める河内産の土器の口縁部片数の比率は約25％（602対153）と高い割合を示す。八幡周辺で，その実数を調べた例はなく，比較する資料はない。(注16) そこで，乙訓地域を例に

付表3　周辺遺跡（弥生～古墳前）消長表

		II	III	IV	V 前	V 中	V 後	庄内	布留	概要
1	式部谷遺跡									突線紐III式銅鐸
2	中ノ山遺跡			▬						
3	南山遺跡						▬	▬	▬	
4	幣原遺跡						▬			竪穴式住居2
5	金右衛門垣内遺跡	▬	▬	▬						
6	本郷遺跡				▬	▬	▬			
7	美濃山廃寺下層遺跡						▬			竪穴式住居2
8	狐谷遺跡			▬	▬	▬				
9	新田遺跡						▬			包含層中、古墳時代中期竪穴式住居2
10	向山遺跡				▬	▬	▬			
11	城山遺跡	▬	▬	▬						
12	木津川河床遺跡							▬	▬	庄内期竪穴式住居7、布留土器溜め

見てみたい。弥生時代後期には河内系の土器が出土する遺跡の数は9遺跡で，出土比率は森本遺跡で13.1%，中海道遺跡で整理用コンテナ・バット20箱中6個体，修理式遺跡では30箱中4個体と数量的には多くない[注17]。次いで庄内期にあっては，前代と比較して13遺跡と出土する遺跡数は増加する。この時期の出土比率を計測した遺跡は少なく，河内系の出土数は各遺跡とも10個体を越えないようである。その中で，向日市堀ノ内遺跡では庄内式の土器200片中28片(14%)が河内産のもので，これに関して，「10%をこえる高い割合で搬入されていることは注目してよい」と評価されている[注18]。このことからも，当遺跡の河内系の出土比率の高さは特異なものといえよう。

以上をまとめると，次のようになる。八幡丘陵周辺地域が近江の影響が強いのは，弥生時代後期後葉段階までである。そして，現時点では，庄内期には河内地域の影響が非常に強くなるものと予察される。

八幡丘陵周辺には茶臼山古墳・石不動古墳・東車塚古墳・西車塚古墳などの前期古墳があり，古墳時代前期には八幡周辺の首長層は大きな勢力を有していたことがわかる（第48図）。木津川流域には，それ以前の古墳は，山城町に三角縁神獣鏡が出土した有名な椿井大塚山古墳があり，発生期古墳として知られている。大塚山古墳の周辺には弥生時代の集落が少なく地域勢力の希薄なことから，地域社会の内的な成熟が古墳の築造の要因ではな

く，木津川―淀川ルートの確保を目的とした外的要因を直接的な契機としてこの古墳が築かれたと考えられている。(注19) さらに，城陽市には芝ケ原古墳があり，椿井大塚山古墳より古い庄内期の古墳として注目されている。(注20) 椿井大塚山古墳のような大型前方後円墳や芝ケ原古墳の築造の直前・同時に八幡地域の「地域共同体」の再編がなされているのは，当地が木津川―淀川ルートの喉元にあたることにその要因が求められよう。また，同時に土器交流の点からも変化が認められることは，先の「集落の再編」と軌を一にしたものと考えられ，このことを特に庄内期に河内地域との交流の深化が見て取れるのは，弥生時代から古墳時代へと移り変わる社会に対応した交流の変化として捉えられよう。　（岩松　保）

注1　現在までの木津川河床遺跡の発掘調査報告は各年度毎に行われている。
1.　長谷川達「木津川河床遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983
2.　黒坪一樹・長谷川達「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984
3.　黒坪一樹・松井忠春「木津川河床遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985
4.　岩松　保・松井忠春他「木津川河床遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第19冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986
5.　岩松　保・松井忠春「木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注2　注1－5に同じ。

注3　現地作業・整理作業には多くの方々の参加を得た。記して感謝の意に替えます(敬称略)。
西岡成郎・福富　仁・中井英策・立川明浩・湯浅研史・松本英人・室田博子・村上和佐子・古賀敦子・小早川志穂・大松千尋・来田容子・小林尚子・室田真理子・寺升初代・神山久子・野田侑記子・西川悦子・山尾　摂・多田幸世

注4　御指導・御協力を頂いた方々のお名前を記して感謝の意に替えます(敬称略)。
中沢圭二(京都大学名誉教授)，寒川　旭(通産省地質調査所)，金村允人・奥村清一郎・長谷川達(京都府教育委員会)，桝井豊成(八幡市教育委員会)

注5　1.　堤圭三郎・高橋美久二「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会)　1969
2.　石井清司「八幡市幣原遺跡出土の土器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注6　『八幡町文化財調査報告第1集　美濃山廃寺跡発掘調査報告』八幡町教育委員会　1977

注7　奥村清一郎「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』京都府教育委員会)　1984

注8　久保田健士・長谷川達「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983

注9　『南山遺跡』現地説明会資料　八幡市教育委員会　1987　及び八幡市教育委員会桝井豊成氏の御教示による。

注10　『八幡市誌』第1巻　1986

注11　都出比呂志「他地域との交流」(『向日市史』上巻)　1983

注12　注５－２に同じ。

注13　注６に同じ。

注14　森　浩一ほか『京都府綴喜郡田辺天神山弥生遺跡　同志社大学文学部考古学調査記録第５号』（同志社大学文学部文化学科考古学研究室）　1976.11

注15　國下多美樹「近江型甕についての一試考――弥生時代中期～後期の山城と近江の交流関係」（『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会）　1986

注16　南山遺跡では河内産の土器が10数点出土している。八幡市教育委員会桝井豊成氏の御教示による。

注17　秋山浩三「河内からもち運ばれた土器――山城・乙訓出土の生駒山西麓産土器」（『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会）　1986

注18　注16に同じ。

注19　『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告Ⅰ　南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室　1972

注20　『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集　城陽市教育委員会　1986

付表4　出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
1	壺	12.0	6.0	1：3	SH10埋土	粗	軟	淡赤褐色	摩滅	摩滅	
2		12.2	5.0	1：2	SH10埋土	密	良	淡灰褐色	指ナデ ハケ (13本)	摩滅	
3		11.3	4.3	1：10	SH10埋土	密	良	淡黄褐色	ハケ (10本) 指ナデ	ハケ (10本) 指ナデ	
4		12.0	17.9	3：5	SH89床面	ヤヤ粗	ヤヤ軟	淡赤褐色	ヘラミガキ ハケ？	ハケ (10本)	
5		11.0	5.5	1：3	SH10埋土	粗	良	淡灰褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒斑あり
6		9.6	3.7	1：20	SH10 床面「まな板」状石下	密	良	赤褐色	指ナデ	指ナデ ハケ (12本)	
7		8.8	11.6	1：4	SH89埋土	粗	軟	赤褐色	摩滅	摩滅	
8		12.0	5.0	1：10	SH89埋土	密	良	淡白色	指ナデ	指ナデ	
9		13.0	3.8	1：12	SH47埋土	密	良	淡灰褐色	指ナデ ミガキ	摩滅	
10		17.1	3.5	1：4	5I　青灰色粘土	密	良	灰白色	指ナデ ヘラミガキ	摩滅	
11		20.8	3.0	1：5	7G　暗茶褐色粘土	粗	良	暗赤褐色	摩滅	摩滅	
12			3.8	1：4	SH47埋土	密	良	淡灰褐色	指ナデ	ヘラミガキ 指ナデ	竹管文あり φ7mm
13		16.4	1.2	1：10	SH89埋土	密	良	灰褐色	指ナデ	指ナデ	
14		13.8	5.1	1：3	SR95	粗	軟	淡黄灰色	ハケ (17本)	指ナデ ハケ (17本)	
15		18.4	2.5	1：10	SR95	密	良	灰褐色	ハケ (10本)	指ナデ	河内系土器
16		17.8	6.3	1：4	SH47埋土	ヤヤ粗	良	灰褐色	ハケ (5本)	指ナデ	凸帯あり
17		底 2.0	11.9	1：1	SH89埋土	密	良	淡黄褐色	ヘラミガキ	不明	波状文 竹管文φ2mm
18	甕	16.6	5.4	1：3	SH47埋土	密	良	赤褐色と黄褐色	指ナデ ハケ？	指ナデ ヘラケズリ	
19		15.4	7.7	1：5	SH10埋土	粗	軟	濃黄褐色	ハケ 指ナデ	ハケ 指ナデ	
20		17.6	6.9	4：5	SH89床面	ヤヤ粗	良	暗黒褐色	ハケ(5本) 指ナデ	ハケ(6本) 指ナデ	
21		17.0	5.5	1：7	SH47埋土	密	良	外・赤褐色 内・黄褐色	指ナデ ケズリ	指ナデ	

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
22	甕	17.4	4.2	1：4	S H10埋土	密	良	暗茶褐色	ハケ(7本) 指ナデ	ハケ ヘラケズリ	角閃石を含む
23		15.8	8.4	1：5	S H10埋土	密	良	暗茶褐色	タタキ (10本)	ヘラケズリ	河内系土器 口縁スス付着
24		14.2	3.0	1：10	S H10	密	良	淡黄褐色	摩滅	ロクロナデ	
25		15.2	6.7	3：4	S H10埋土	密	良	淡灰褐色	タタキ (5本) 指ナデ	ヘラケズリ 指ナデ	
26		14.2	8.4	1：3	S H10埋土	粗	軟	淡紅褐色	タタキ (2.4本) 指ナデ	ハケ (4.4本) 指ナデ	外面スス付着
27		12.8	9.8	1：5	S H10埋土	粗	軟	淡赤褐色	タタキ (10本)	指ナデ	
28		15.4	6.0	1：4	S H10埋土	密	良	灰黄褐色	ハケ 指ナデ	指ナデ	
29		16.0	3.3	1：1	S H10埋土	粗	軟	淡灰褐色と 淡赤褐色	摩滅	摩滅	
30		16.4	17.0	1：3	S H10埋土	ヤヤ粗	ヤヤ軟	淡黄褐色	タタキ (3本)	ハケ 指ナデ	
31		16.8	12.2	1：1	S R95	粗	軟	淡灰褐色	ハケ (5.5本) タテ方向 ヘラ沈線	指圧痕あり ハケ (5本)	
32		16.8	10.6	1：3	S H10埋土	密	良	淡褐色	ハケ タタキ (7本)	ハケ 指ナデ	
33		16.0	20.0	1：2	S H89埋土	粗	良	外・赤褐色 内・黒	タタキ (3.8本)	指ナデ 指圧痕あり	
34		20.0	7.6	1：5	S H10埋土	粗	軟	外・淡赤褐色 内・淡褐色	タタキ (3.6本)	指ナデ	口縁スス付着
35		13.9	16.4	4：5	S H10埋土	ヤヤ粗	良	淡赤褐色	タタキ (15本) ハケ	ハケ (12本)	底部スス付着
36		長16.0 短15.0	16.0	3：4	S H89埋土	密	良	淡黄褐色	指ナデ タタキ (2.5本)	指ナデ 指圧痕	
37		14.0	10.1	1：12	S H10埋土	粗	良	外・赤褐色 内・灰褐色	タタキ (2.9本)	摩滅	
38		14.3	7.9	1：8	S H89埋土	密	良	淡白赤色	タタキ (4本)	指ナデ	
39		14.1	23.3	9：10	S H10床面	ヤヤ粗	良	淡赤褐色	タタキ (8本)	ハケ 指ナデ	
40		17.0	11.6	2：5	S H89床面	密	良	黒褐色	タタキ (5本)	ヘラケズリ	

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
41	甕	13.2	9.7	1:5	SH10埋土	ヤヤ粗	ヤヤ軟	淡褐色	タタキ ハケ(5本)	ハケ (7本)	口縁スス付着
42		長14.5 短14.1	6.5	4:5	SR95	粗	軟	外・淡黄褐色 内・黒色	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	
43		15.0	6.4	1:4	SH10埋土	密	良	淡褐色	ハケ (6本)	指ナデ	
44		15.6	6.6	1:7	SH10埋土	密	良	淡赤褐色	タタキ (1.6本) ハケ	指ナデ ハケ (5本)	口縁部つけたしてある
45		14.0	7.0	1:8	SR95	粗	ヤヤ軟	明黄白色	ハケ (3.8本)	指ナデ	
46		14.9	3.9	1:9	5G 青灰色粘土	密	良	黄褐色	ハケ (5本)	摩滅	
47		14.2	7.9	1:6	SR95	粗	軟	淡赤黄色	ハケ (7.5本) 指ナデ	ハケ (10本) 指ナデ	
48		16.0	5.0	1:8	5G 断ち割り内	密	良	黄褐色	ハケ	ハケ (5.7本)	口縁に黒斑
49		26.2	10.1	1:9	SH10埋土	密	良	淡灰褐色	タタキ (5本) ハケ (8.7本)	摩滅	
50		20.6	10.2	1:5	重機掘削	密	良	茶褐色	摩滅	指ナデ 指圧痕	
51		26.4	18.2	1:2	SH10埋土	ヤヤ粗	軟	淡褐色	タタキ (5本) ハケ (10本)	ハケ (10本) 指ナデ	
52		18.4	2.9	1:10	SH10埋土	密	良	淡黄褐色	指ナデ	指ナデ	
53		20.2	3.4	1:8	SH10埋土	密	良	淡黄褐色	指ナデ	指ナデ ヘラミガキ	
54		9.4	1.5	1:20	8I 暗茶褐色粘土	密	良	褐色	指ナデ	指ナデ	口縁に6本のクシ描直線文
55		11.6	2.4	1:3	5GSD13	密	良	黄褐色	指ナデ	ヘラミガキ	
56			2.5		SR95	粗	軟	外・灰褐色 内・赤褐色	摩滅	摩滅	口縁部端欠損
57		14.8	5.5	1:4	SR95	ヤヤ粗	軟	淡黄褐色	タタキ (3.3本) 指ナデ	ハケ (8.3本) 指ナデ	
58		18.2	6.3	1:17	SR95	密	良	淡茶灰色	指ナデ	指ナデ	
59		首11.8	9.8	1:5	SH48埋土	密	良	赤褐色	摩滅	摩滅	
60		13.4	5.0	1:10	9I 暗茶褐色粘土	粗	軟	淡黄褐色	摩滅	摩滅	

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
61	甕	28.4	9.5	1：2	SH10埋土	粗	軟	淡黄褐色	ハケ（7本）	ヘラナデ	
62	甕	31.6	11.7	1：4	SH10埋土	密	良	淡褐色	タタキ（3本）指ナデ	ヘラミガキ	黒斑あり
63	甕	5.0	11.4	1：2	SH10埋土	密	良	茶褐色	タタキ（3.7本）指ナデ	ハケ（8.5本）	
64	甕	底 1.9	15.7	4：5	SR95	粗	軟	淡茶褐色	タタキ（3本）指ナデ	指ナデ	外面スス付着
65	壺底部	底 5.5	2.8	1：1（底部）	SH10埋土	密	良	摩滅	ヘラケズリ 指ナデ	摩滅	
66	壺底部	底 5.4	2.5	1：3（底部）	SR95	密	良	濃黒褐色	ヘラミガキ 指ナデ	ヘラミガキ	
67	壺底部	4.8	3.2	3：4（底部）	SR95	ヤヤ粗	ヤヤ軟	外・濃茶褐色 内・淡黄白色	指ナデ	指ナデ	
68	壺底部	底 5.4	3.3	1：2（底部）	5I 暗茶褐色粘土	密	良	淡黄褐色	ヘラミガキ	摩滅	外面スス付着
69	壺底部	底 5.0	5.2	1：1（底部）	SH10埋土	粗	軟	淡褐色	タタキ（2.3本）指ナデ	摩滅	外面黒斑あり
70	壺底部	底 2.0	11.9	1：1（底部）	SH89埋土	密	良	淡黄褐色	ヘラミガキ	摩滅	挿図番号17と同じ遺物
71	甕底部	底 2.0	2.7	1：2（底部）	SR95	密	良	外・褐色 内・黒褐色	タタキ（2本）	指ナデ	
72	甕底部	底 3.8	1.8	1：2（底部）	5G 断ち割り	密	良	黄褐色	タタキ	摩滅	外面スス付着
73	甕底部	底 2.8	11.4	1：2（全体）	SH10埋土	密	良	茶褐色	タタキ 指ナデ	ハケ	挿図番号63と同じ遺物
74	甕底部	底 3.6	2.8	1：2（底部）	5G 青灰色粘土	密	良	赤褐色	摩滅	摩滅	
75	甕底部	底 4.0	15.6	4：5（全体）	SH10床面	粗	軟	淡黄白色	ヘラミガキ	指ナデ	
76	甕底部	底 5.0	4.8	1：1（底部）	SH10埋土	密	良	淡赤褐色	タタキ（2.9本）	ヘラケズリ	外面黒斑あり
77	甕底部	底 4.4	21.4	1：2（全体）	SH10埋土	密	良	淡黄褐色	タタキ（5本）ハケ ヘラミガキ	ハケ（10本）	肩部に(朱，丹？)あり
78	甕底部	底 2.0	8.0	1：1（底部）	SH10埋土	密	良	外・淡褐色 内・黒	タタキ（3本）	ヘラケズリ	外面黒斑あり
79	甕底部	底 3.0 2.5	1.2	1：1（底部）	SH89埋土	密	良	淡茶褐色	ハケ	ヘラケズリ	河内系土器

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
80	甑底部	底 3.4	3.8	1：1(底部)	5G 暗茶褐色粘土	密	良	茶褐色	タタキ	摩滅	外面黒斑あり
81		底 5.6	4.1	1：1(底部)	SH10埋土	密	良	淡褐色	タタキ(3本)	ヘラケズリ 指ナデ	φ6mmの有孔 外面黒斑あり
82		底 3.7	4.0	1：1(底部)	SR95	ヤヤ粗	良	淡赤黄色	タタキ(2.9本)	ハケ(5.8本)	
83		底 2.6	7.1	1：1(底部)	SR95	ヤヤ粗	良	淡黄褐色	タタキ(3.7本)	ヘラケズリ	φ5mmの有孔
84	高杯	27.4	16.0	1：1	SH10床面	密	良	赤褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	外面黒斑あり 胸部にφ9mm 4か所有孔
85		20.8	6.1	1：2	SH10埋土	密	良	淡灰褐色	ハケ(5.7本)	ハケ 指ナデ	
86		20.6	5.6	1：6	SH89埋土	ヤヤ粗	良	淡赤灰色	ヘラミガキ	指ナデ	
87		15.4	7.3	3：5	SH89埋土	ヤヤ粗	軟	淡赤灰色	ヘラミガキ	ハケ(10本) 指ナデ	
88		19.6	15.0	3：5	SH10埋土	粗	軟	濃赤褐色	ヘラミガキ	ハケ(6.6本) 指ナデ	
89		21.0	5.7	1：4	SH10埋土	密	良	灰白色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	受部に有孔
90		17.4	5.5	1：6	SH89床面	密	良	淡赤褐色	指ナデ	指ナデ	スカシ4か所
91		脚11.8	8.1	7：10	SH10埋土	ヤヤ粗	ヤヤ軟	淡乳白色	ヘラケズリ ヘラミガキ	ハケ(12本)	脚部に4か所有孔
92		首 3.1	6.6	1：1	SR95	やや密	軟	淡赤褐色	ヘラケズリ	指ナデ	
93		底14.0～14.4	9.9	1：1	SH89床面	粗	軟	赤褐色	ヘラミガキ	指ナデ	スカシ3か所
94		脚13.0	9.7	4：5	SH89床面	密	良	淡赤褐色	ハケ	指ナデ	スカシ3か所
95		脚20.6	4.1	9：10	SH89床面	密	良	濃赤褐色	ハケ(5本)	ハケ(5本)	脚部に3か所有孔
96	器台	19.6	2.6	1：4	SH10埋土	密	良	淡赤褐色	摩滅	摩滅	口縁凸線3本
97		19.4	3.0	1：5	SH89埋土	粗	軟	赤褐色	ヘラミガキ	摩滅	口縁竹管浮文
98		18.8	2.9	2：5	SH10埋土	粗	軟	淡赤褐色	摩滅	摩滅	口縁部6か所に1対の竹管浮文
99		18.6	3.4	1：10	5G 青灰色粘土	密	良	淡茶褐色	指ナデ	指ナデ	口縁円形浮文 擬凹線9本有
100		17.8	13.6	1：1	SR95	粗	軟	淡赤灰色	ヘラミガキ	摩滅	黒斑あり
101		20.4	5.5	1：10	8H 暗茶褐色粘土	粗	軟	灰褐色	摩滅	摩滅	

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
102	器台	20.0	7.2	1:2	SH10埋土	粗	軟	淡赤褐色	指ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	
103		10.6 9.0	8.4	1:3	SH10埋土	密	良	淡黄褐色	ヘラミガキ	ハケ	脚に3か所有孔
104		首 3.2	8.5	1:1	SH89埋土	密	良	淡黄白色	ヘラミガキ	指ナデ	脚に5か所 φ9mmの有孔
105		11.0	7.0	4:5	SH10埋土	密	ヤヤ軟	淡黄褐色	ヘラミガキ	ハケ (7本)	脚に4か所有孔
106		9.4	6.1	4:5	SH10埋土	密	良	黄褐色	ヘラミガキ	ハケ	3か所有孔外面に黒斑
107		10.0 9.2	7.6	2:3	SH10埋土	密	良	淡黄褐色	指ナデ ヘラミガキ	ハケ ヘラミガキ	黒斑あり
108		脚11.6	7.2	1:1 (脚部)	SH10床面	密	良	外・淡赤褐色 内・赤褐色	ヘラミガキ	ハケ (7本)	黒斑あり
109		脚11.4	7.6	1:1 (底部)	SH89床面	密	良	淡黄褐色	ヘラミガキ	摩滅	
110		12.4 10.8	8.4	4:5	SH10埋土	密	良	黄褐色	ヘラミガキ	ハケ ヘラミガキ	3か所有孔
111		口 9.4 脚10.6	7.6	1:1 (底部)	SH47埋土	粗	軟	淡赤褐色	ハケ (8.3本)	ハケ (10本)	脚に3か所 φ8mm有孔
112		9.6	5.1	1:1 (受部)	5G 断ち割り	密	良	淡赤褐色	摩滅	摩滅	1か所有孔
113		2.9	8.7	1:1 (柱部)	SH89床面	密	良	淡赤褐色	ヘラミガキ	指ナデ ヘラミガキ	
114		8.0	9.0	1:2 (全体)	SH10埋土	ヤヤ密	ヤヤ良	淡黄褐色	ヘラミガキ	ハケ (6.6本)	3か所有孔
115	低脚高杯	11.3 高13.2	10.2	9:10	SH10床面	ヤヤ粗	ヤヤ軟	茶褐色	摩滅	摩滅	口縁に黒斑
116		脚 9.6	7.3	1:2	SR95	粗	軟	淡赤灰褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒斑あり
117		底 9.4	8.3	1:3	SR95	粗	軟	淡赤褐色	ロクロナデ ハケ ミガキ	ハケ (10本)	
118		12.4	5.7	1:8	SH10埋土	密	軟	淡赤白色	ハケ (20本)	指ナデ	
119		10.6	5.7	1:1	SH89床面	密	良	外・赤褐色 内・淡赤褐色	指ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	4か所有孔 黒斑あり
120		脚12.4	7.4	3:10	SH10埋土	粗	軟	淡赤褐色	ヘラミガキ	ハケ (5本)	
121		首 3.1	6.7	1:1 (首部)	SH89床面	密	良	濃赤褐色	ヘラミガキ	指ナデ ヘラミガキ	
122		13.6	2.7	1:5	5G 断ち割り内	密	良	茶褐色	ヘラミガキ	ハケ (14本)	4か所有孔

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
123	椀	13.6	6.2	1:5	S H89埋土	密	良	淡赤褐色	摩滅	指ナデ	黒斑あり
124		8.4	3.4	3:4	S H10埋土	粗	軟	淡赤褐色	摩滅	摩滅	
125		10.6	7.3	4:5	S H10床面	良	良	茶褐色	指ナデ ヘラミガキ	摩滅	
126		底 7.2	6.1	2:5	S H10埋土	密	良	外・灰褐色 内・黒	ハケ (12本) ヘラケズリ	摩滅	
127	蓋	13.6	1.0	1:10	S H89埋土	密	良	灰黄褐色	ヘラミガキ	指ナデ	φ8mm有孔
128	小型壺底丸	9.6	4.2	1:20	S H89埋土	密	良	赤褐色	指ナデ	指ナデ ハケ (12本)	
129	土器焙形手	13.8	端 5.9 5.0	1:15	S H89埋土	密	良	灰黄褐色	ハケ (8.5本)	指ナデ	
130	ミニチュア土器	底 1.3	2.1	1:1 (底部)	S H10 貼り土内	密	良	黒	指ナデ	指ナデ	
131		6.2	3.2	1:1 (底部)	S H10埋土	密	良	黒褐色 底部・黒	指ナデ	指ナデ	
132		6.4	4.3	1:1	S H10床面	粗	軟	赤褐色	摩滅	摩滅	
133	磁器	底 5.0	3.4	1:1	6 Q S D08	密	良	青緑色	施釉	施釉	中国製青磁 削り出し高台
134	陶器	底 7.2	3.4	1:5	S D08	密	良	黒灰色	ハケかクシ (3.3本)	クシ (4.5本)	
135	磁器	底 5.8	2.0	1:4	S D08	密	良	青白色	施釉	施釉	中国製青磁
136	瓦器	41.0		1:12	5 O S D01	密	良	黒	指ナデ	ヘラミガキ	転用の可能性有
137	磁器	9.2	6.6	1:4	5 F S D06	密	良	乳白色	施釉	施釉	中国製白磁 削り出し高台
138	陶器	底11.2	3.5	1:5	噴砂中	密	良	赤褐色	指ナデ	カキ目	丹波焼
139	磁器	11.4	2.1	1:5	西壁側溝内	密	良	青緑色	施釉	施釉	口縁に7か所 1対の凹あり 中国製青磁
140	瓦器	?30.0 ~32.0	5.5	1:12	7ライン アゼK区	密	良	赤褐色	指ナデ	1部クシ	備前焼
141	黒色土器	13.0	3.0	1:8	9 I J	密	良	外・灰褐色 内・黒	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
142		15.6	4.2	1:7	7 G S D26	密	良	黒	ヘラミガキ	ヘラミガキ	横方向2cmで重なるミガキ
143		8.2	3.4	3:10	8 J S D84	密	良	灰白色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	貼り付け高台

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
144	瓦器	12.0	17.9	3：5	中世素掘り溝	ヤヤ粗	ヤヤ軟	淡赤黄色	ハケ ヘラミガキ	ハケ (10本)	
145	須恵器	27.2	2.0	1：3	SD11	密	良	外・赤灰褐色 内・灰褐色	指ナデ	指ナデ	
146	灰陶釉器	底 7.8	9.0	1：1	SX102	密	良	灰白色	ヘラケズリ	ヘラケズリ 指ナデ	貼り付け高台 自然釉
147	須恵器	4.3	2.5	1：1	9I 暗茶褐色粘土	密	良	青灰色	指ナデ	指ナデ	口縁にゆがみ
148		底 3.4	4.5	1：4	9K SD72	密	良	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	内面ロクロ 水挽痕残る
149		13.0	4.1	1：4	5L 青灰色粘土層	密	良	淡青灰色	ロクロナデ 指ナデ	ロクロナデ 指ナデ	

4. 長岡京跡右京第251・255次発掘調査概要

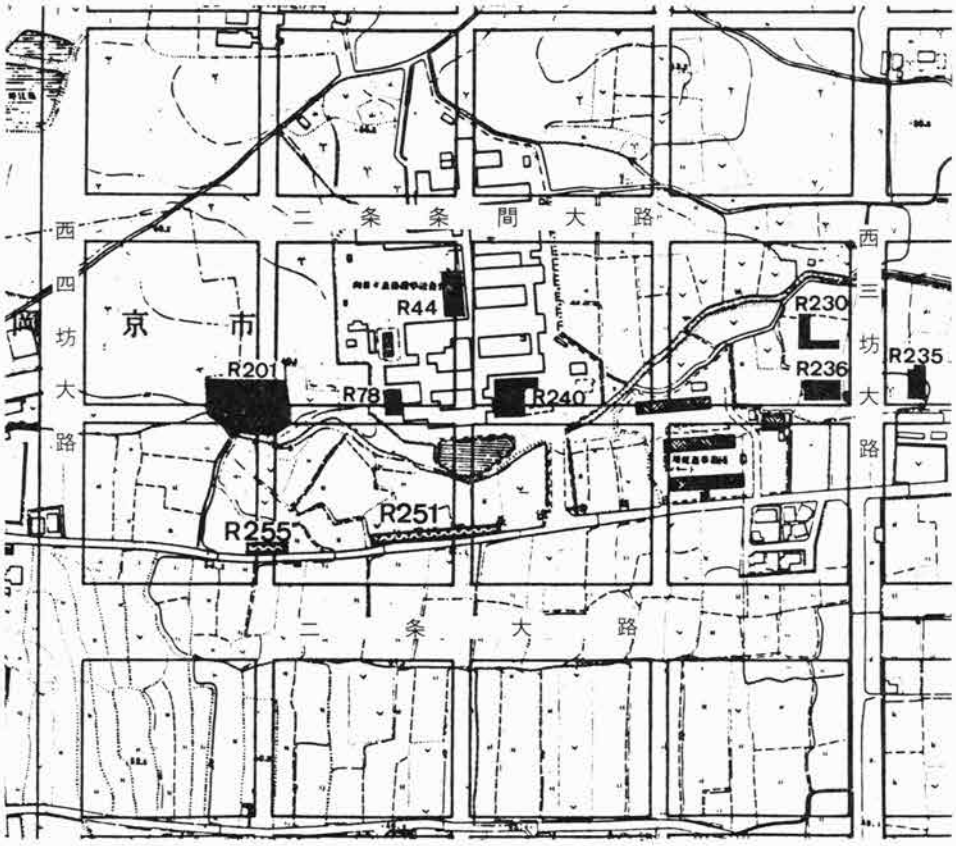
(7ANHKB—1・2地区)

1. はじめに

この調査は，長岡京市粟生川久保・畑ケ田地内における，府道長法寺向日線の路面拡幅工事に伴う事前調査として実施したものである。

調査対象地は，長岡京の条坊復元によれば右京二条四坊五町・十二町・十三町に相当し，西四坊坊間小路・同第二小路が調査地内を通る。また，縄文時代から近世に至る井ノ内遺跡の範囲にも含まれる。このため，京都府教育委員会文化財保護課・京都府乙訓土木事務所と協議した結果，発掘調査を実施することになった。

調査地は，西から東へ緩やかに傾斜する扇状地形の段丘上に位置し，北側を小畑川の支



第49図　調査地位置図(1/5,000)

流である坂川が東方へと流れ，現在は水田となっている。

周辺部では，向日ケ丘養護学校内で３回の調査，特別養護老人ホームの調査(右京第201次)，東方約220ｍの西三坊大路周辺の調査(右京第230・235・236次)等がある。養護学校内の右京第44次調査では，奈良時代から近世の遺構および古墳時代から江戸時代の遺物が，右京第240次調査では，長岡京期の大きな井戸(長岡京内で最大級)が検出されている。右京第201次では，中世の井戸・溝・土坑が検出され，縄文土器・すり石や石皿・石錘をはじめ，古墳時代後期から中世の遺物が出土している。右京第230次調査では，弥生時代の溝，古墳時代の土坑，奈良時代の溝・土坑，平安・鎌倉時代の掘立柱建物跡・柵列跡・井戸・柱跡群が検出されている。右京第235次調査では，縄文時代後期の竪穴式住居跡，古墳時代の竪穴式住居跡，平安・鎌倉時代の井戸・溝・土坑等が検出されている。右京第236次調査では，弥生時代の竪穴式住居跡・土坑，古墳時代の溝・土坑，長岡京期の井戸等が検出されている。井戸は下半部が石組で，途中に段を設け，その四隅に柱穴が穿たれていたことから，上半部には木製井戸枠の存在したことが推定されている。これらから，今回の調査で，長岡京跡・井ノ内遺跡に関連する遺構・遺物の検出が想定された。

現地調査は，京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて昭和61年12月９日に開始し，昭和62年３月19日に終了した。調査面積は，合計約610m²(251次　450m²・255次　160m²)である。調査は，当調査研究センター調査課主任調査員辻本和美，同調査員石尾政信，細川康晴が担当した。

調査にあたって，向日ケ丘養護学校，長岡京市教育委員会，財団法人長岡京市埋蔵文化財センター，長岡京跡発掘調査研究所，井ノ内自治会，土地所有諸氏の御協力を得た。また，現地調査，図面・遺物整理には学生諸氏(注1)の参加・協力があった。記して謝意を表する。

なお，調査に係る経費は，全額京都府乙訓土木事務所が負担した。

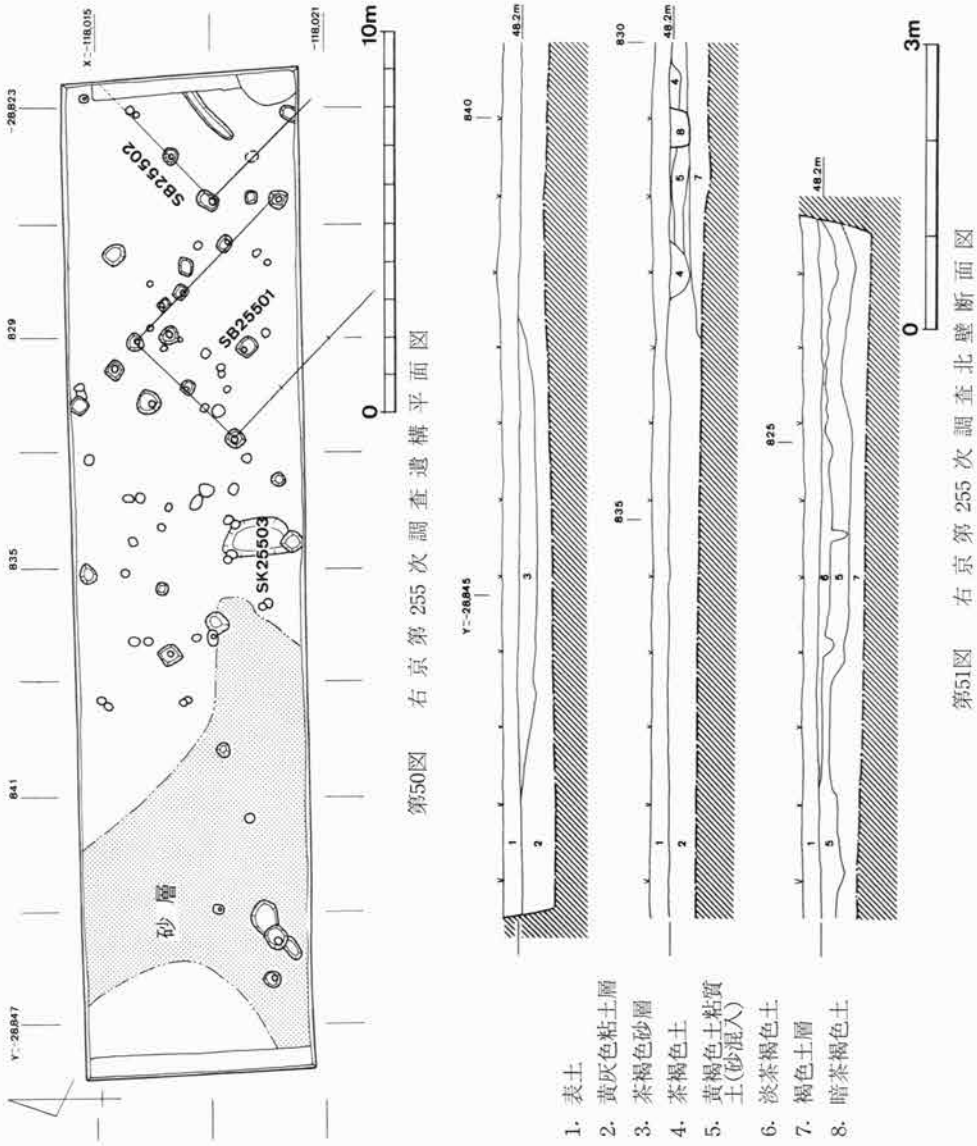
2. 調　査　概　要

調査対象地は，西から東へ緩やかに傾斜する扇状地形を呈しており，現在は水田となっている。右京第255次調査地の標高は48.5ｍ前後，右京第251次調査地西端は標高47ｍ前後，東端が標高約45.6ｍである。

調査は，府道に平行した東西方向のトレンチを設定して，重機による掘削から開始した。表土を除去したところ，西方の右京第255次調査では，トレンチ西側は表土直下が「地山」と推定される黄灰色粘土層で，この層を削り込む砂層が見られた。砂層は，北方から南方へと広がる。トレンチ東側は，「地山」と推定される褐色土層の上に，砂混じりの黄褐色粘質土・淡茶褐色土が堆積している。これらの層に掘り込まれた柱跡群は，東が密で西が希

薄となる。これらから，西側の高い部分が削平を受けていることが推測される。柱跡群には，建物跡と推定されるものがある。トレンチ中央部では土坑を検出した。

右京第251次調査でも，府道と平行した東西方向のトレンチを設定した。ここでは，水田畦畔を断ち切って東西に長いトレンチとなるため，水田面ごとに，第1～第5トレンチと呼称した。各トレンチの基本層序は以下のとおりである。第1トレンチでは，西側で「地山」と推定される淡黄灰色粘質土の上に，砂質の淡黄灰色粘質土が堆積し，東側ではこの層の上に，黄灰色粘質土，暗灰色土，灰褐色土がみられる。第2トレンチでは，黄褐



第50図　右京第255次調査遺構平面図

第51図　右京第255次調査北壁断面図

色土層の上に暗褐色土，灰褐色土，黄褐色土が堆積している。第３トレンチでは，砂礫を含む茶褐色土層の上に，褐色土，砂礫主体の暗褐色土，灰褐色土が堆積している。第４トレンチでは，砂礫を含む黄褐色土層の上に，同様な茶褐色土，暗茶褐色土，その上に茶褐色土，砂礫が混じる暗褐色土，褐色土等が堆積している。ここでは，全域で平安時代～中世の柱跡を検出し，第２～４トレンチで古墳時代後期の溝，土器だまり，土坑，土坑状落ち込み，第２トレンチで弥生時代後期の土坑を検出した。柱跡群は，柱筋の並ぶものもあるが，明瞭な建物跡と言えるものは確認できなかった。そして，第５トレンチでは，表土直下が砂礫混じりの灰褐色土，褐色土，砂質の黄色粘質土で，柱跡等の遺構も希薄である。後世の削平によるものと推測される。

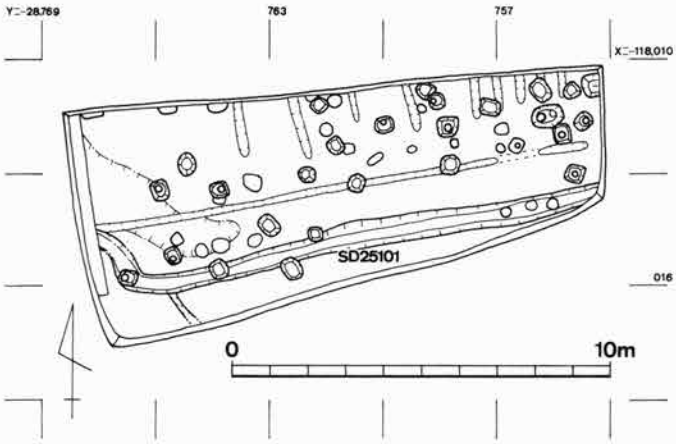
長岡京の条坊が推定される右京第255次調査地，右京第251次調査地第４トレンチにおいて，道路側溝等の長岡京跡に関連する遺構は検出されなかった。第251次調査地では，遺物包含層から出土する須恵器等に，長岡京期前後と推定されるものがわずかにみられる。

以下に，検出された遺構について，西方の調査地から簡単に記す。なお，調査にあたって長岡京跡基準点54-1・54-5-1を使用して測量を実施した。平面図は，国土座標を付して標示した(国土調査法施行令で定められた17座標系によるもので，座標番号はⅥ系である。Ｘは南北軸，Ｙは東西軸を示す。)。

3. 検出遺構

右京第255次調査では，隅丸方形，円形，および小円形の柱跡を多数検出し，建物跡と推定されるものがある。中央部では土坑を検出した。

SB 25501　調査地東部で検出した。柱筋が真北から西へ約45度振れる掘立柱建物跡である。建物規模は，２間×３間以上と推定される。柱間は約1.8m（８尺）等間を測る。柱掘形は，一辺40～50cmで隅丸方形を呈し，深さ20cm前後を測り，柱穴跡の残るものが多い。柱跡からは小破片の土師器等が出土



第52図　右京第251次調査 第１トレンチ遺構平面図

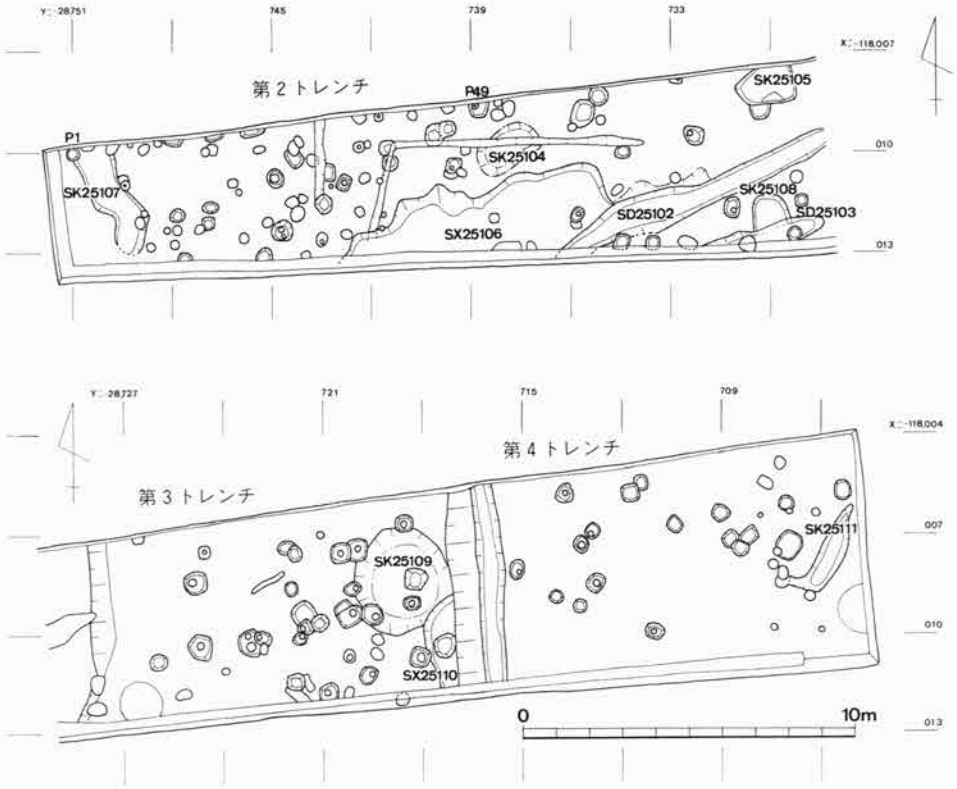
したが，時期の明確なものはない。

SB25502　SB25501の東側で検出した，掘立柱建物跡である。柱筋はSB25501と同一方向に向いている。柱掘形は，隅丸方形・やや長方形・わずかに痕跡だけのものなどがある。端間は約1.5m(8尺)等間である。建物規模は明確でない。柱跡からSB25501と同様に小破片の土器が出土した。建物の時期は，不明である。

SK25503　調査地中央部の南端で検出した隅丸の台形状土坑である。南北方向の長辺が約1.8m・幅約0.9m・深さ40cm前後を測る。埋土は，柱跡と異なる黒褐色土である。この土坑からは，ほとんど遺物が出土しない。

右京第251次調査では，第1・2トレンチの上層で中世以降の水田耕作に伴う溝を検出した。全域で平安時代～中世の柱跡を検出した。および，古墳時代の溝・土坑，弥生時代の土坑等を検出した。時代の新しいものから簡単に記す。

SD25101　第1トレンチで検出した。東西方向を向く素掘り溝である。溝は，北へ約10度振れ，西端が北方へ曲がる。溝幅0.5～0.8m・深さ0.2～0.3mを測る。出土遺物に，江戸時代後半と推定される陶器片，用途不明土製品等がある。水田耕作に伴う溝が，平行ま



第53図　右京第251次調査 第2～4トレンチ遺構平面図

たは直交することから，この溝も水田耕作に関連することが推定される。

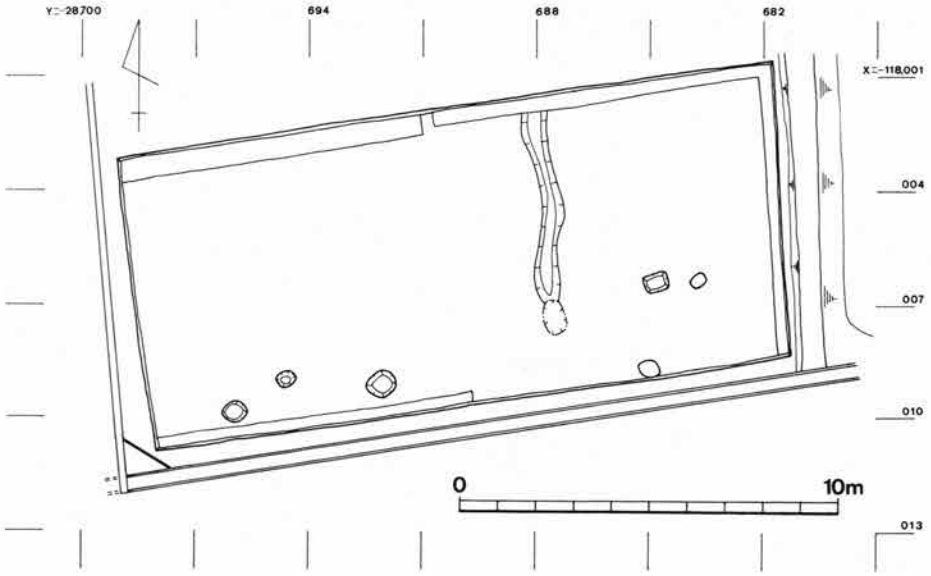
SK25105　第２トレンチの東端で検出した土坑である。深さ20cm前後・東西約1.8mを測り・南北1m以上ある。出土遺物が少なく，時期は明確でないが，遺構の切り合い関係から中世以後と推定される。

SK25107　第２トレンチの西端で検出した屈曲する土坑である。土坑の南端は浅く，不明瞭となる。最大幅約1.2m・深い部分で30cm前後を測る。出土遺物は，土師器等の小破片で，時期は不明である。

SK25104　第２トレンチの中央部で検出した土器だまりである。土坑の規模はやや不明確であるが，楕円形を呈し，長径約2m・短径1.1m前後を測る。この土器だまりから，古墳時代後期の土器等が出土した。

SX25106　第２トレンチの中央部で検出した土坑状の落ち込みで，北から南へ傾斜している。この落ち込みの西側で，炭・焼土の集中する部分があった。上下２層の堆積があり，上層はSD25102に切られている。東西約8m・南北2.5m以上，南端の深さ約50cmを測る。古墳時代後期の土器等が出土している。

SD25102　第２トレンチの東部で検出した素掘り溝である。この溝は，北へ約25度振れており，東方から西方へと傾斜している。東端は浅くなり不明瞭となる。最大幅約1.3m・深さ平均30cm前後・深い部分で約70cmを測り，長さ9mに渡って検出した。この溝からも，古墳時代後期の須恵器が出土した。



第54図　右京第251次調査 第５トレンチ遺構平面図

SD25103　SD25102の南側で検出した素掘り溝である。この溝は，深さ30cm前後を測り，SD25102と平行し同一方向へ傾斜している。大きさも同様と推定される。SK25108を切っている。出土遺物からSD25102と同時期と推測される。

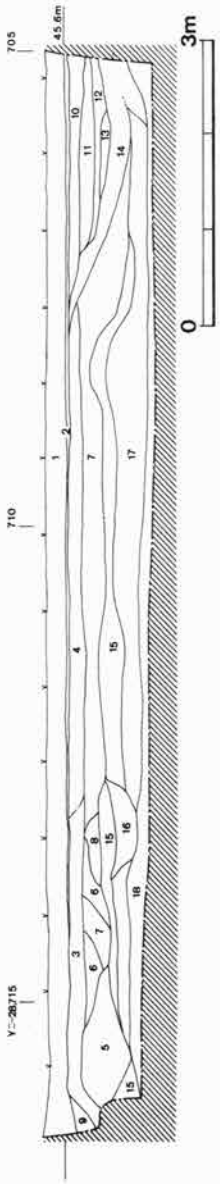
SK25109　第3トレンチの東端で検出した円形土坑である。直径約3m・深さ30cm前後を測る。SX25110に切られている。この土坑から，古墳時代後期の須恵器が出土した。

SX25110　第3トレンチの東端で検出した土坑状の落ち込みである。深さ20～30cmを測り，西から東へ傾斜している。出土遺物に古墳時代後期の須恵器片が少量ある。切り合い関係から，SK25109より新しい。

SK25111　第4トレンチの東端で検出した南端が西に屈曲する溝状の土坑である。長さ約2.8m・幅約0.7m・深い部分で40cm前後を測る。古墳時代後期の遺物が出土した。

SK25108　第2トレンチの東部で検出した円形状の土坑である。東西約1.2m・深さ約15cmを測り，南北1.3m以上ある。この土坑から，弥生時代後期の土器が出土した。

これらの遺構以外で，第4トレンチの西端で水田耕作に伴う水抜き・地境界の南北溝を検出した。この溝の東側に，土留め用と推定される杭が打ち込まれていた。



第55図　右京第251次調査　第4トレンチ北壁断面図

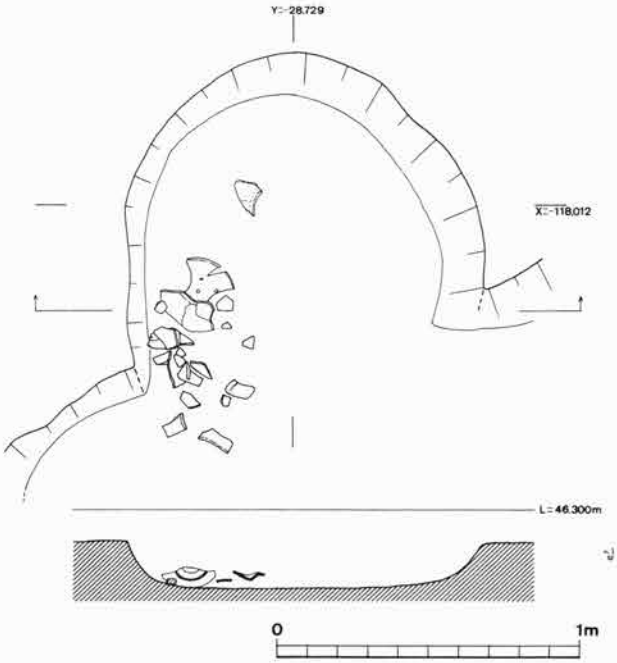
1. 表土　2. 金属分の凝集層　3. 褐色土(砂礫混入)　4. 褐色土(若干の砂礫を含む)　5. 明褐色土(黒粒等を含む)
6. 茶褐色土　7. 暗褐色土(砂礫混入)　8. 褐色土　9. 青灰色土　10. 茶褐色砂層　11. 茶褐色土(砂礫を含む)
12. 暗褐色砂礫　13. 茶褐色砂礫　14. 黄色土　15. 暗茶褐色土　16. 黒褐色土(砂礫土層)　17. 茶褐色土(砂礫土層)
18. 黄褐色土(砂礫土層)

水田耕作に伴う溝は，幅20～30cm程度で，深いものでも10cm前後である。溝からは，土師器・瓦器等の破片が少量出土したが，図示できるものはない。

第2トレンチの西北端で検出した柱跡(P1)から，黒色土器の椀が出土しており，柱跡の時期が推定できる。また，第2トレンチ中央部の北端で検出した柱跡(P49)には，柱根が残っていた。

4. 出 土 遺 物

この調査で出土した遺物には，次のものがある。右京第255次調査で，包含層および柱跡から，土師器，須恵器，瓦器，瓦片等の平安時代以降の遺物が出土した。右京第251次調査で，水田耕作に伴う溝やSD25101から江戸時代～中世の遺物が，柱跡および包含層から中世～平安時代，古墳時代等の遺物が，そして，遺構に伴う遺物が出土した。ここでは，平安時代以降，古墳時代，弥生時代と大別して取り扱う。



第56図　SK25108 実 測 図

(1) 平安時代以降の土器(第57図)

この遺物のうち，土師器皿(7)は，右京第255次調査の包含層から出土した。それ以外は右京第251次調査の包含層および柱跡から出土した。

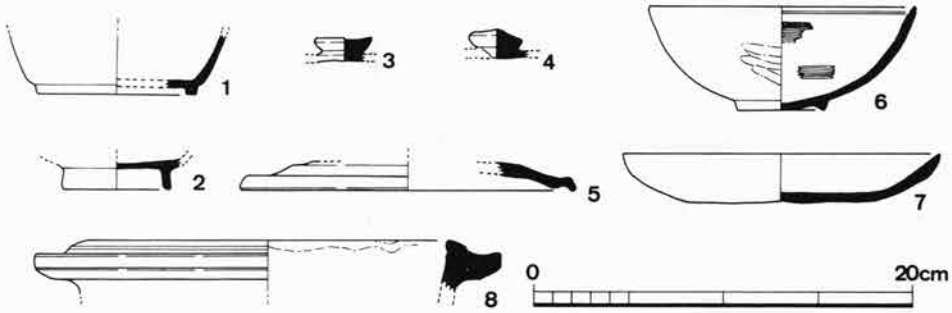
1は，高台の付く須恵器の杯Bである。図上復元によると，高台径8.4cmを測る。胎土，焼成とも良好で，表面が淡褐色を呈する。

2は，高台の付く緑釉陶器で，椀と推定される。高台径5.8cm，高台の高さ1.1cmを測る。胎土，焼成とも良好で，内外面に暗緑色に発色した釉がかかる。

3・4は，須恵器の蓋のつまみである。3はほぼ平坦，4は宝珠形を呈する。胎土，焼成とも良好で暗灰色，暗青灰色を呈する。

5は，端部が屈曲する須恵器の蓋である。図上復元によると，口径17.4cmを測る。胎土，焼成とも良好で，青灰色を呈する。長岡京期を含む平安時代前期の特徴を持つ。

6は，右京第251次調査第2トレンチの柱跡(P1)から出土した，黒色土器B類の椀である。口径14.2cm・器高5.4cmを測る。底部に断面三角形に高台を付けるが，高台と底が同じ高さとなる。口縁端部内面に一条の沈線が巡る。内外面とも摩滅が著しいが，内面を細かく磨いている。焼成がやや甘く，内外面とも暗灰黒色を呈する。



第57図　出土遺物実測図 (1)（平安時代以降）
1・3～5. 須恵器　2. 緑釉陶器　6. 黒色土器　7. 土師器　8. 羽釜

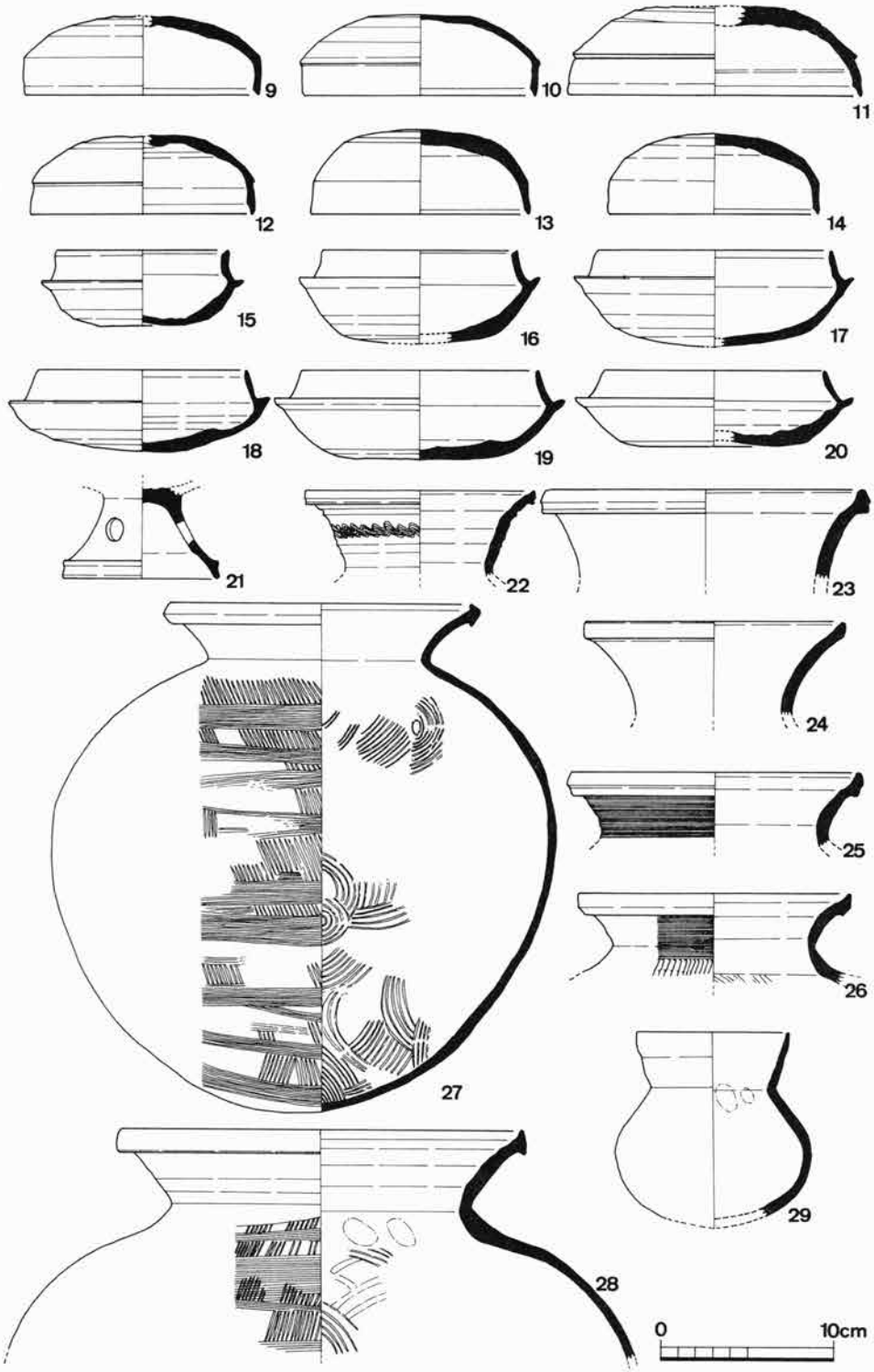
7は，土師器の皿である。図上復元によると，口径16.6cm・器高2.4cmを測る。摩滅が著しく調整は不明である。口縁端部をかるくつまみ上げる。

8は，土師質の羽釜口縁部である。図上復元によると，口縁内径18.8cmを測る。口縁部上端と羽部に粘土接合痕が残る。

(2)　古墳時代の土器（第58図）

古墳時代の土器は，右京第251次調査第1～4トレンチの包含層，第1～4トレンチの各遺構から出土した。SX25106からは，多くの土器が出土し，図示した土器以外に，須恵器の器台脚部・高杯，土師器の高杯等がある。SX25106からは，9・13・15・17～21・28が出土した。SK25104から27・29が，SK24109から10が，SK25111から14・16が出土した。23は，第1トレンチの包含層，11・12・22・25・26は，第2トレンチの包含層，24は第4トレンチの包含層から出土した。

9～14は，須恵器の杯蓋である。9は，口径13.4cm・器高4.6cmを測る。天井部と口縁部の境界がわずかに稜をなす。口縁部は直線的にのび，端部は内傾する面をもつ。天井部外面の三分の二をヘラ削り，他は回転ナデを行う。10は，口径13cm・器高4.6cmを測る。天井頂部はほぼ平坦で，天井部と口縁部の境界が稜をなす。口縁部は直線的にのび，端部は内傾する面をもつ。11は，口径16.8cm・器高5.2cmを測る。天井部と口縁部の境界が稜をなし，細い沈線が巡る。口縁部は外方向に広がり，端部は内傾し，わずかな凹みをもつ。12は，口径12.8cm・器高4.4cmを測る。天井部と口縁部の境界が稜をなし，口縁部はほぼ直線的にのびる。口縁端部は内傾し，わずかに凹む。13は，口径12.6cm・器高4.7cmを測る。天井部と口縁部の境界がわずかに稜をなし，口縁部は外方向に広がり，端部はわずかに内傾する。14は，口径12cm・器高4.6cmを測る。天井部と口縁部の境界がわずかな稜をなし，口縁部はほぼ直線的にのび，端部は内傾しわずかに凹む。これらは，調整技法がほぼ同様である。胎土，焼成とも良好で，表面が青灰色，淡青灰色を呈する。



第58図　出土遺物実測図 (2) (古墳時代)

15～20は，須恵器の杯身である。15は，口径9.9cm・受部径11.6cm・器高4.4cmを測る。口縁部は内傾した後，垂直に立ち上がる。口縁端部は内傾し，わずかに凹む。受部は外方にのびる。底体部下半をヘラ削り，他は回転ナデを行う。16は，口径11.2cm・受部径13.6cm・残存器高5.4cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり，端部は内傾する面をもつ。受部は外上方に立ち上がる。17は，口径13.6cm・受部径16.1cm・器高5.7cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり，端部はわずかに内傾する。受部は外上方に立ち上がる。18は，口径12cm・受部径15cm・器高4.7cmを測る。口縁部は内傾して直線的に立ち上がり，端部はわずかに内傾する。受部は外上方に立ち上がる。19は，口径13.6cm・受部径16.2cm・器高5.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり，端部は丸くおさめる。受部は外上方に立ち上がる。20は，口径12.8cm・受部径16cm・器高4.4cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり，端部は丸くおさめる。受部は外上方に立ち上がる。調整技法は，みな同様である。これらは，胎土，焼成とも良好で，表面が青灰色，淡青灰色，灰色を呈する。

21は，須恵器の高杯脚部である。脚部底径9cm，残存高4.8cmを測る。円形の透かしを三孔有し，透かし径1.3cmを測る。脚の下方に稜をもつ。内外面とも回転ナデを行う。胎土，焼成とも良好で，表面が淡青灰色を呈する。

22～28は，須恵器の甕である。22は，口径13.2cm・残存高4.9cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり，端部を下方に挽きだし，外面に浅い沈線が巡る。口縁部の中位に波状文を施す。23は，口径18cm・残存高5.1cmを測る。口縁部は外反ぎみに立ち上がり，端部を拡張して上下に挽きだし，外面にわずかな段を有する。24は，口径14.8cm・残存高5.4cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり，端部を上方につまみ上げる。25は，口径16.6cm・残存高3.9cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり，端部を上下に拡張して挽きだし，外面にわずかな段を有する。口縁部外面にカキ目を施す。26は，口径15.5cm・残存高4.6cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり，端部を上下に挽きだし，外面にわずかな稜を有する。口縁部外面にカキ目を施す。口頸部外面に平行タタキ，内面に青海波文タタキを有する。27は，完形に復元できた甕で，口径17.5cm・最大胴径29cm・器高29.2cmを測る。口縁部は，外反して立ち上がり，端部を上下に挽きだし，外面に稜を有する。球形に近い体部をもつ体部外面は，平行タタキの後，横方向のハケ目を施し，一部をナデる。内面は青海波文のタタキを有し，頸部に圧痕が残る。28は，口径23.2cm・残存高12.8cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり，端部を上下に挽きだす。体部外面は平行タタキの後，横方向のハケ目を施す。内面は青海波文タタキを有し，頸部に圧痕が残る。24は，焼成がやや甘く，表面が淡灰色を呈する。他は，胎土，焼成とも良好で，表面が青灰色，淡青灰色，灰色を呈する。

以上の須恵器のうち杯蓋・杯身は，大阪府陶邑編年(注2)でいう，Ⅰ型式Ⅵ期～Ⅱ型式Ⅱ期に相当すると考えられる。SX25106の埋まった時期は，Ⅱ型式Ⅱ期前後と推定される。

29は，土師器の小型丸底壺である。口径9cm・残存高10.7cmを測る。頸部が「く」字型に屈曲し，口縁部は外上方に直線的にのびる。口縁部外面の中央部がわずかに凹み，端部は丸くおさめる。体部は球形を呈する。摩滅が著しく調整は不明であるが，頸部内面に圧痕が残る。焼成が甘く，表面が淡赤褐色を呈する。

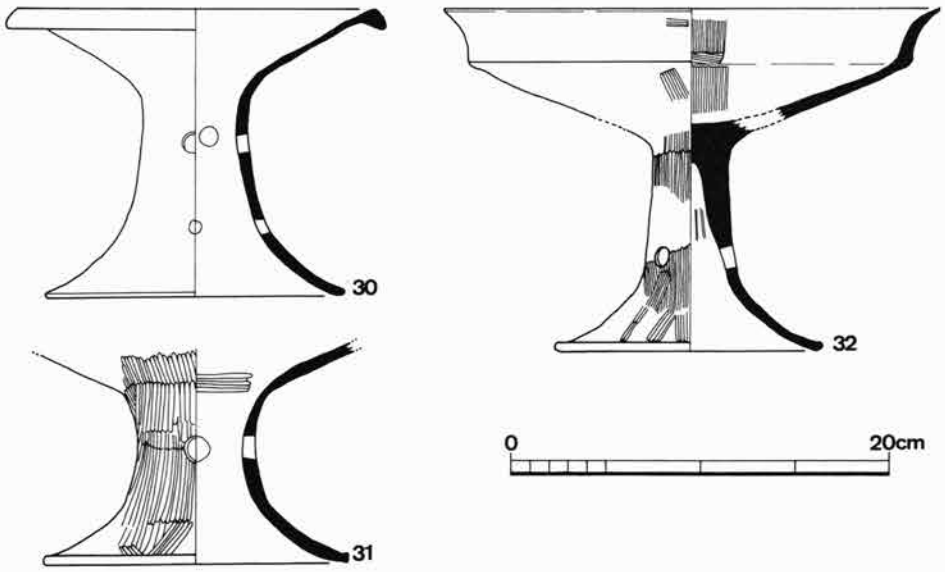
(2)　弥生時代の土器(第59図)

SK25108から出土した一括資料である。この土坑では，高杯(32)・器台(30・31)が出土し，壺・甕類は伴わない。

30は，ほぼ完形に復元できるもので，口径18.8cm・裾部径15.8cm・器高15.2cmを測る。大きく広がる裾部と円筒状の胴部をもち，上部が急に屈曲して広がる。上端部に粘土を貼りつけ，外下方に拡張する。胴部には二段に4孔，合計8孔の透かしを穿つ。摩滅が著しく調整は不明である。

31は，中央が強くくびれ，上下に広がる器体である。胴部の中央部に円形の透かしを4孔穿つ。裾部径16cm・残存高11.2cmを測る。外面に縦方向のヘラミガキを施す。内面は，摩滅により調整が不明であるが，上部に横方向のミガキが残る。

32は，屈曲して立ち上がる口縁をもつ杯部と，裾広がりとなる脚部からなる高杯で，ほぼ完形に復元できる。杯部は稜を有し，口縁部が外反して立ち上がり，端部をわずかにつ



第59図　SK25108 出土遺物実測図

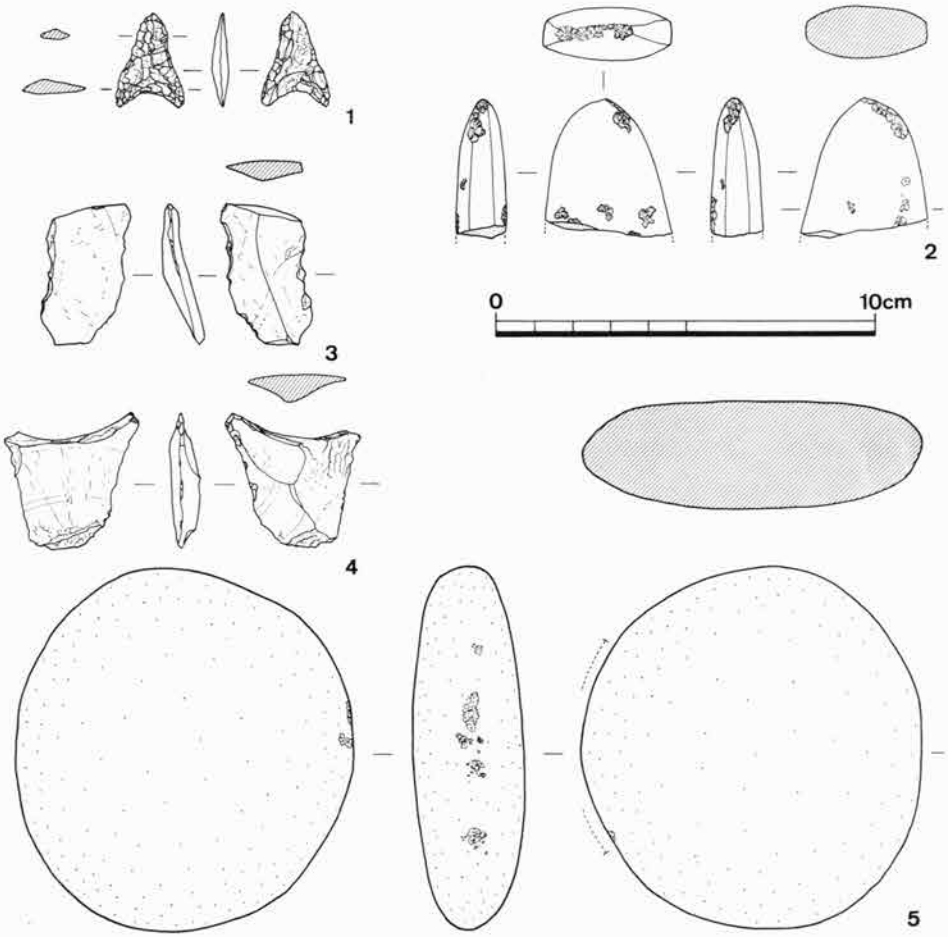
まみあげる。口径26.2cm・裾部径14.2cm・復元器高18.2cmを測る。摩滅により不明な部分もあるが，脚部外面に縦方向のヘラミガキ，杯部内外面にヘラミガキを施す。脚部内面にしぼり目が残る。これらの土器は，胎土に1～5mmの石英，チャート等を含み，表面が淡褐色を呈し，炭素の吸着により部分的に黒灰色となる。

この時期の遺物として，乙訓地域では，今里遺跡SK1221・SK1222・SB1223等があり，(注3) SK25108の遺物も畿内第Ⅴ様式後半期に比定できる。

(4) 石器類(第60図)

石器類は，古墳時代の土坑，平安時代～中世の柱跡および包含層から出土し，いずれも二次堆積に伴うものである。

1は，凹基式石鏃である。長さ2.5cm・最大幅1.8cm・厚さ0.4cm・重さ1.3gを測る。



第60図　石器類実測図

石材はサヌカイトを用いている。剝離面の風化がかなり進んでいる。

2・3は，ともにサヌカイトの剝片である。加工(調整)痕，使用等は観察できない。4は，磨製石斧の頭部片である。長さ3.7cm・最大幅3.3cm・厚さ1.4cm・重さ25.9gを測る。グリーンタフ系の石材を用いている。表面の風化がかなり進んでいる。

5は，磨り石状の円礫である。最大幅9.6cm・厚さ2.9cm・重さ385gを測る。表面に明瞭な使用痕は観察できない。石材は砂岩を用いている。4・5は，SK25104から出土した。

5. ま　と　め

今回の調査は，長岡京期の明確な遺構は検出されなかったが，各種，各時期の遺構，遺物が検出され，多大な成果を収めることができた。弥生時代～中世の遺構が検出され，井ノ内遺跡の範囲が，当地まで広がることが確認される，貴重な資料となろう。

当調査地は，後世の水田耕作に伴う削平や整地があったが，弥生時代以降は坂川の影響も少なく安定した場所であり，弥生時代後期には，この周辺に人が居住していたことが推測される。土器だまり，土坑状落ち込み等には，完形に近い須恵器が多く，炭・焼土層の存在からみて，近接した場所に居住地の所在が推測される。また，土坑状落ち込みから須恵器器台が出土したことから，周辺に墳墓の存在も考えられる。そして，平安時代から中世の掘立柱建物跡等が示すとおり，連綿として人々の生活が営まれており，その後，現在のような水田として利用され続けているのである。

長岡京の推定西二坊坊間小路(Y＝－27,710付近)，同第二小路(Y＝－27,845付近)に関る遺構は未検出であるが，長岡京期頃と推定される遺物が出土しており，条坊と関連する遺構の存在については，不明である。今後の詳細な検討が必要である。　(石尾政信)

注1　藤原ひとみ・仕名野隆利・佐藤賀之・幸田直子・畑中祥司・今井浩司・藤田　等・宝珍伸一郎・西原富二雄・松田浩二(以上調査補助員)

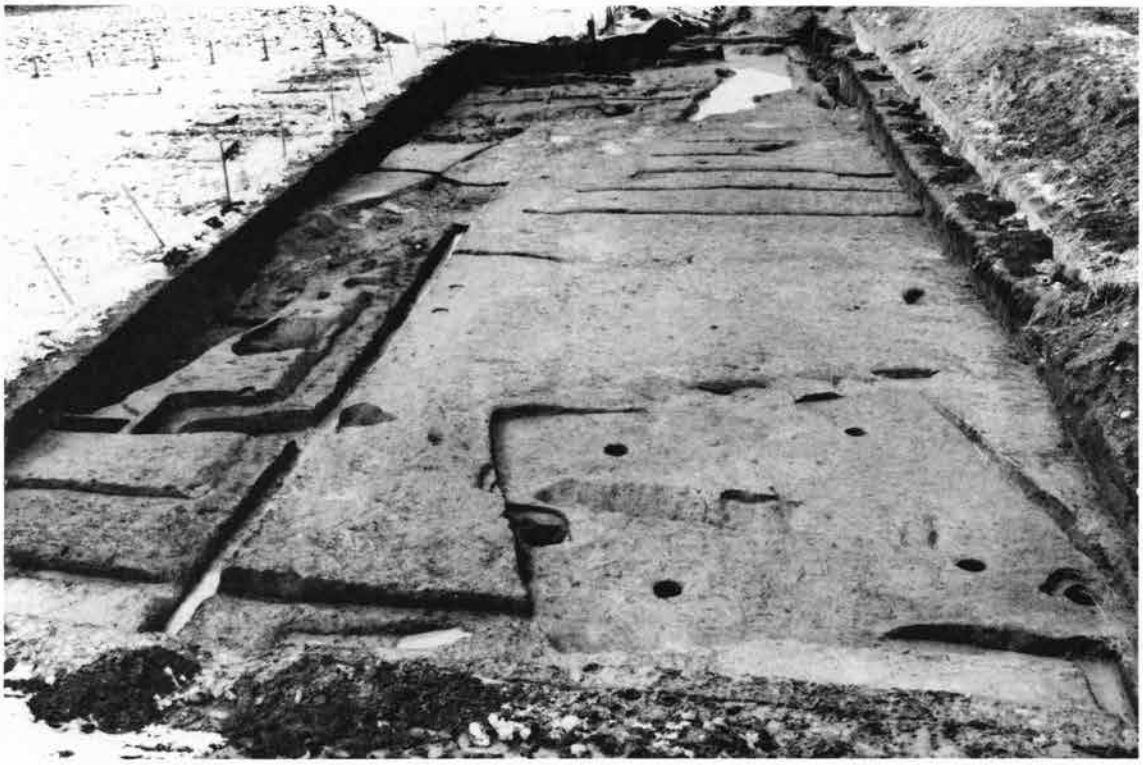
注2　中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981

注3　高橋美久二・吉岡博之ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会)　1979

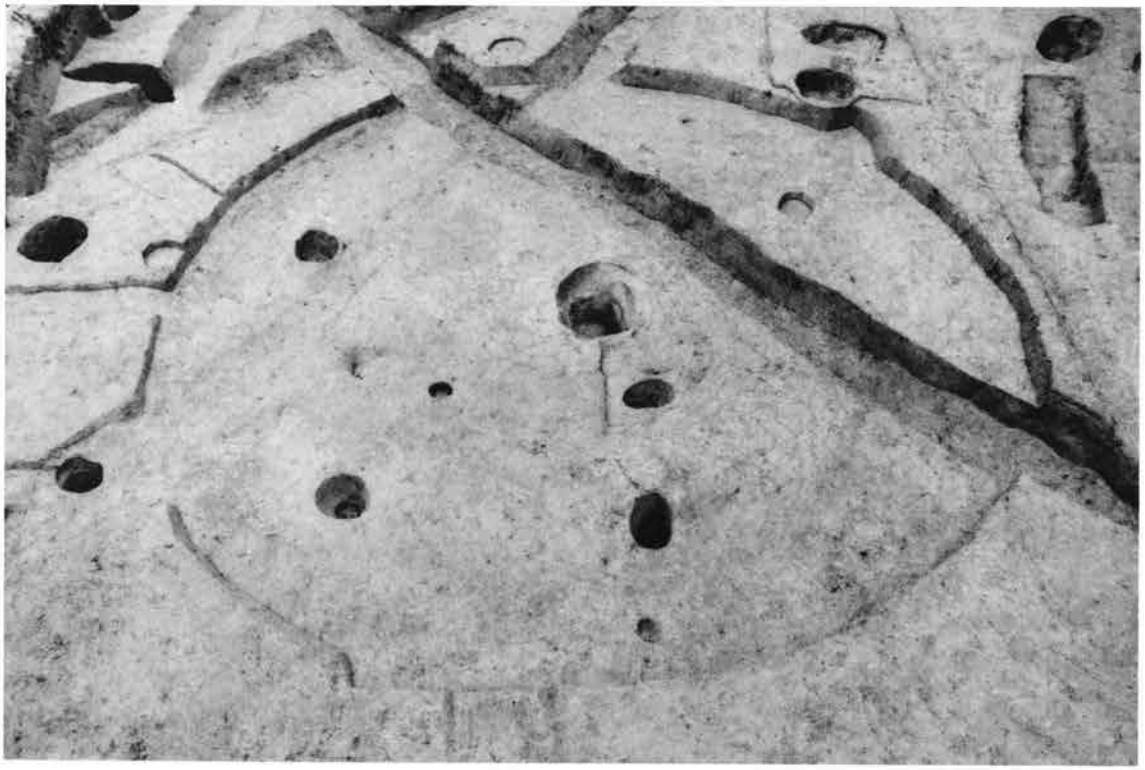
図　　版

図版第１　　青野遺跡第11・13次

(1)　第11次調査地全景（南東から）

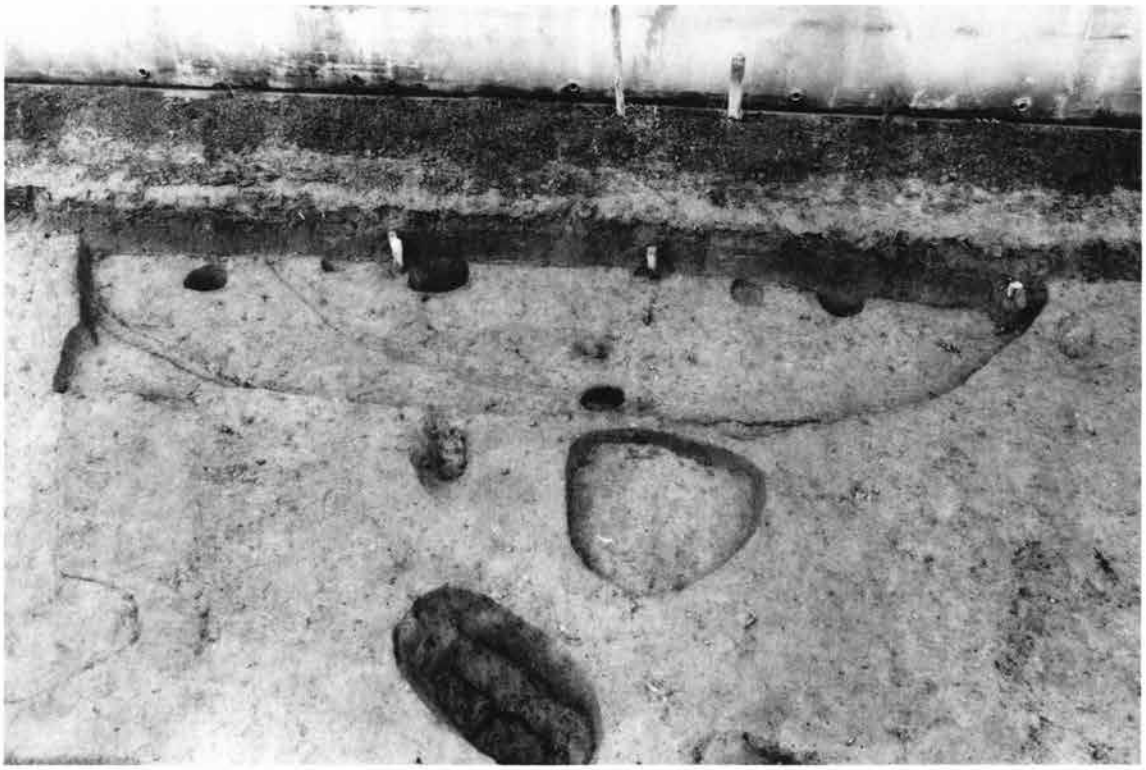


(2)　第13次調査地全景（南東から）

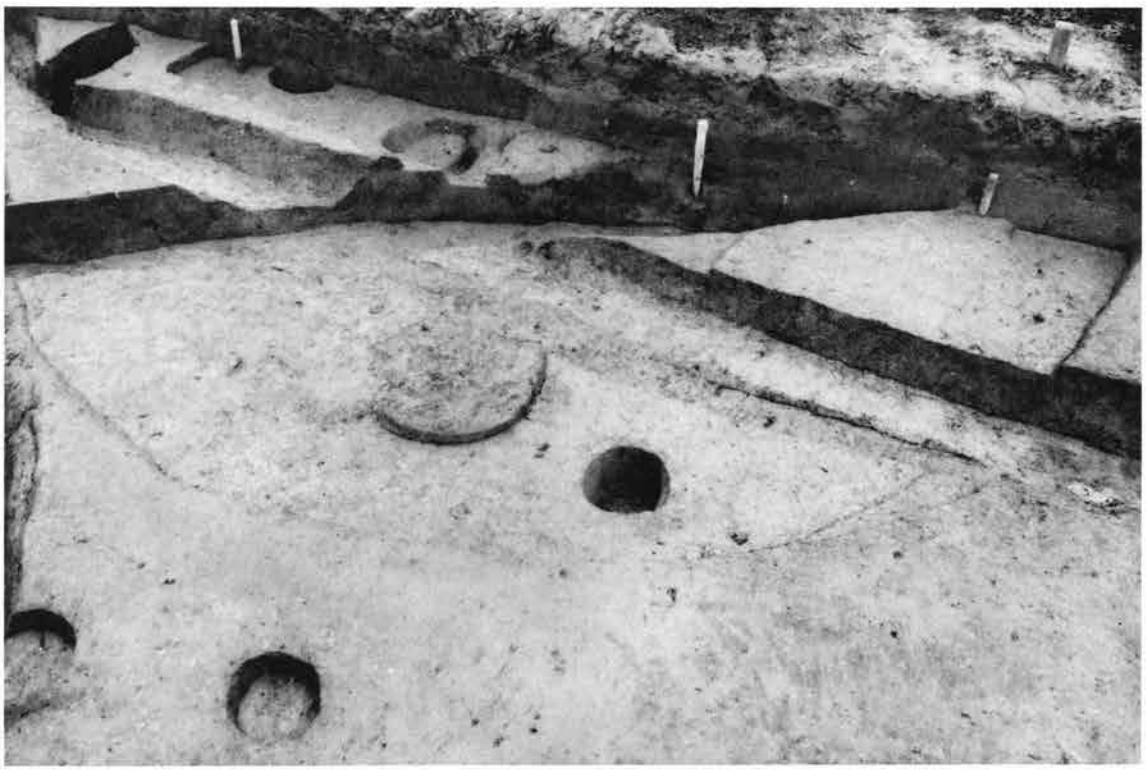


(1) 竪穴式住居跡ＳＢ86105（西から）

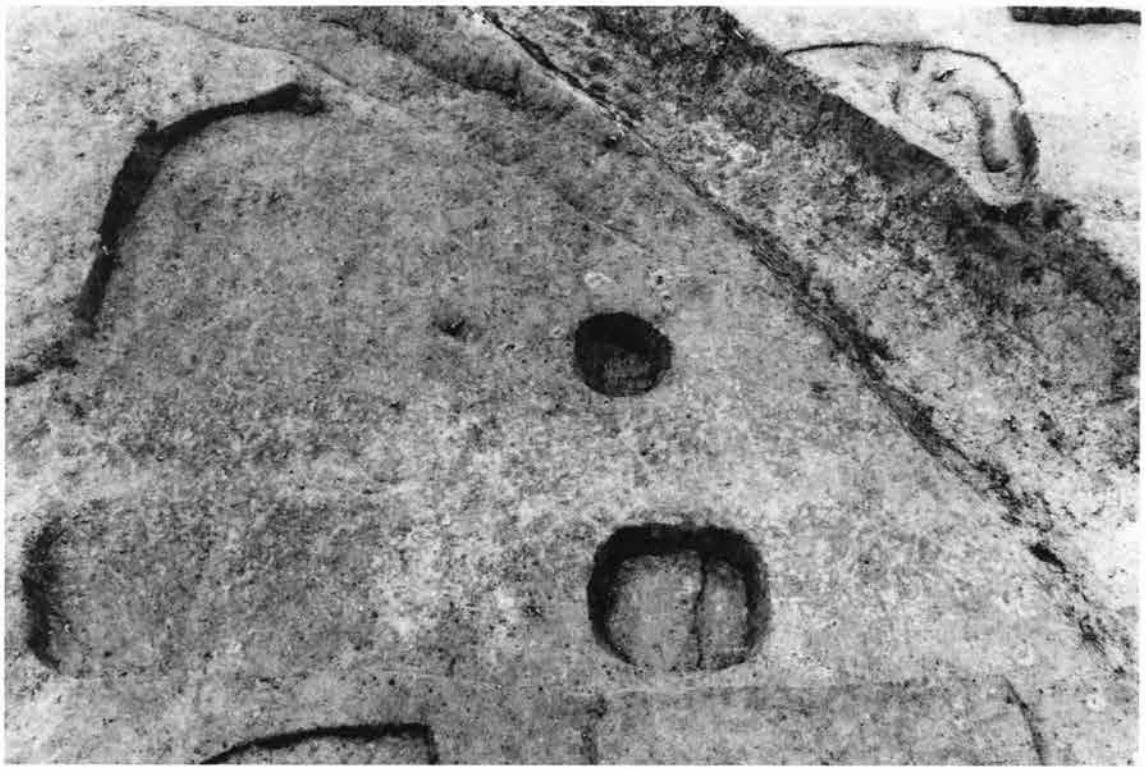
(2) 竪穴式住居跡ＳＢ86107（北から）



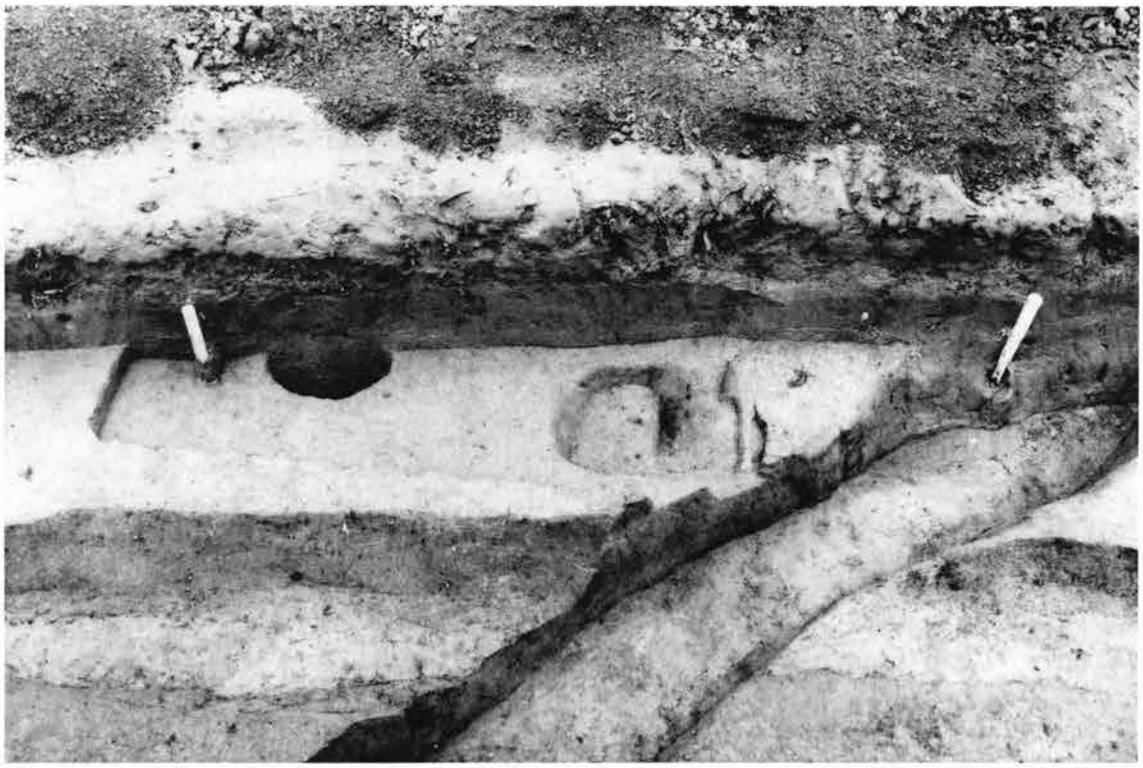
(1)　竪穴式住居跡ＳＢ86102（北東から）



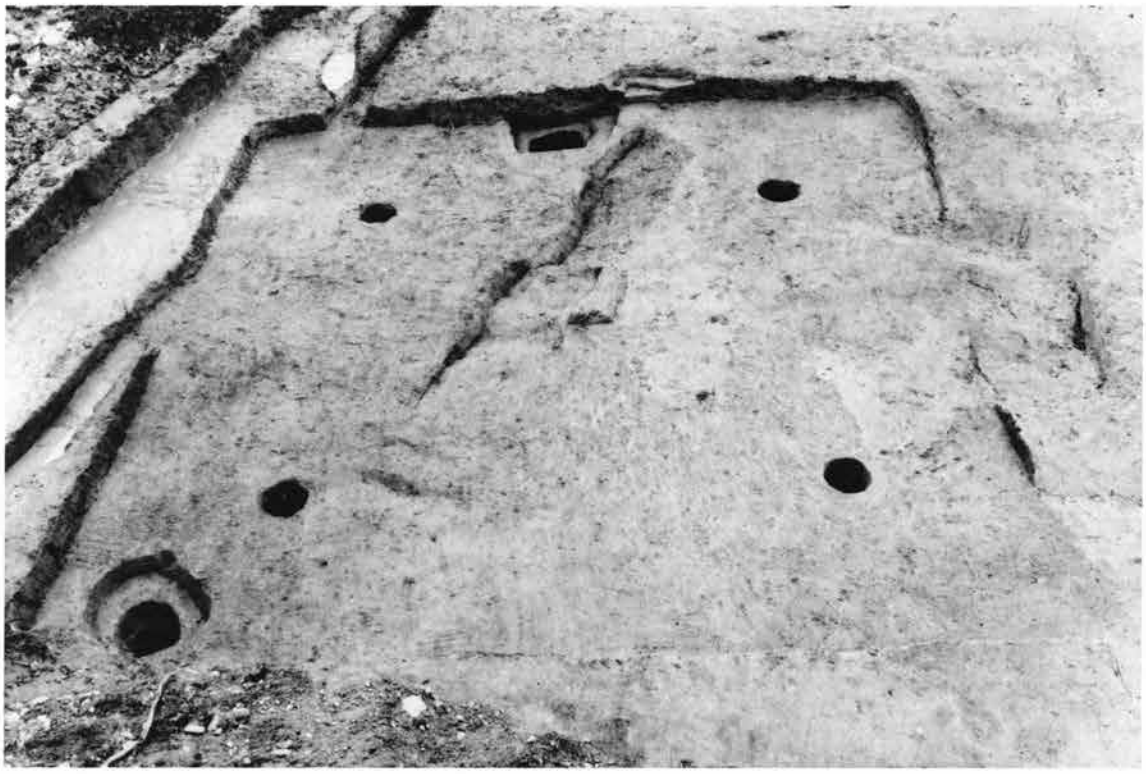
(2)　竪穴式住居跡ＳＢ86104（南から）



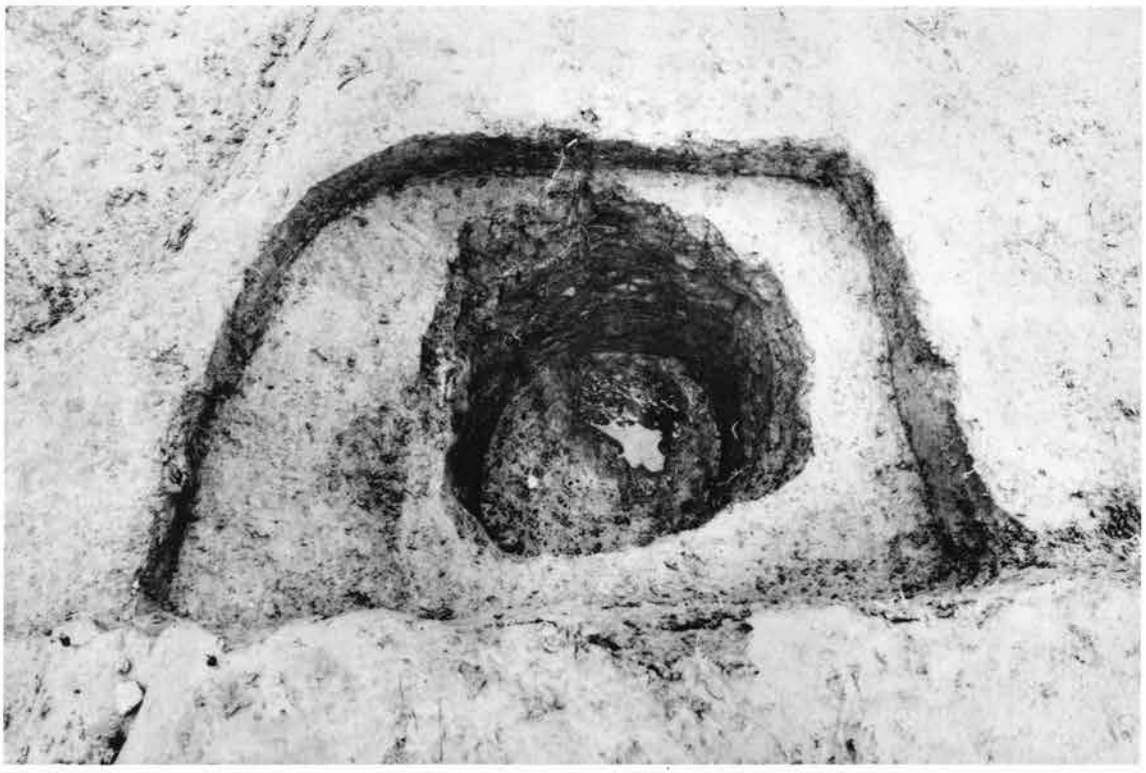
(1)　竪穴式住居跡ＳＢ86103（南から）



(2)　竪穴式住居跡ＳＢ86110（南西から）



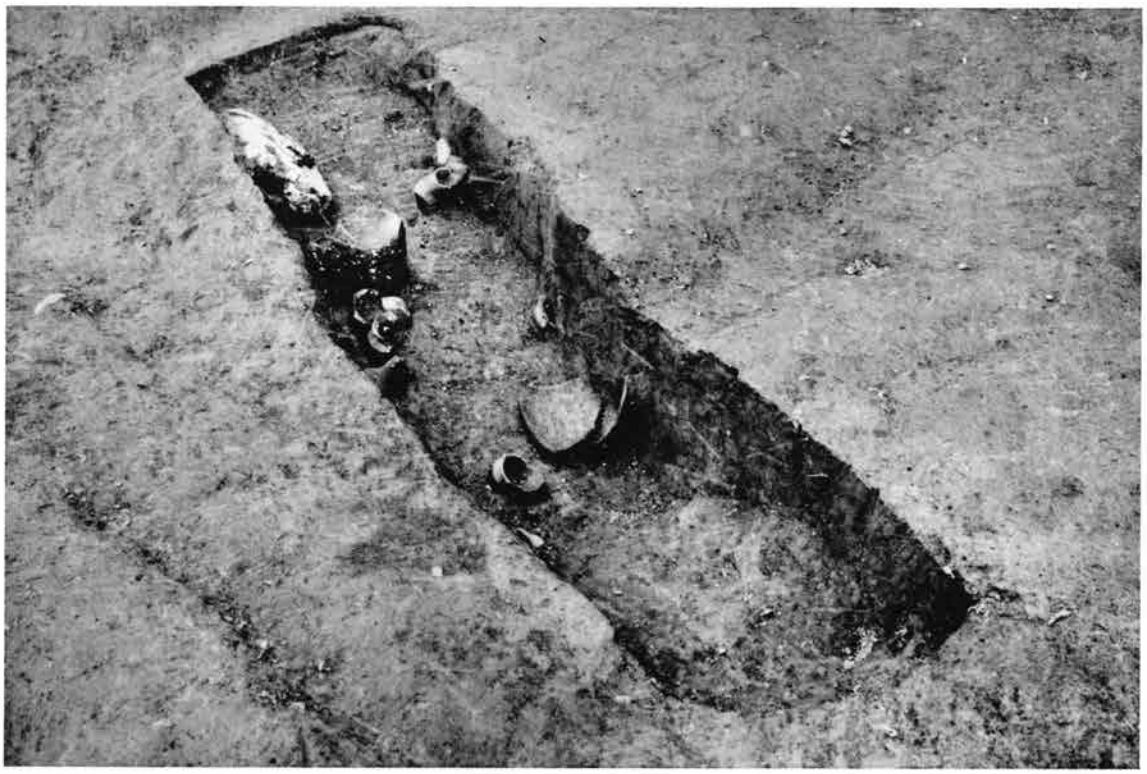
(1)　竪穴式住居跡ＳＢ87901（北から）



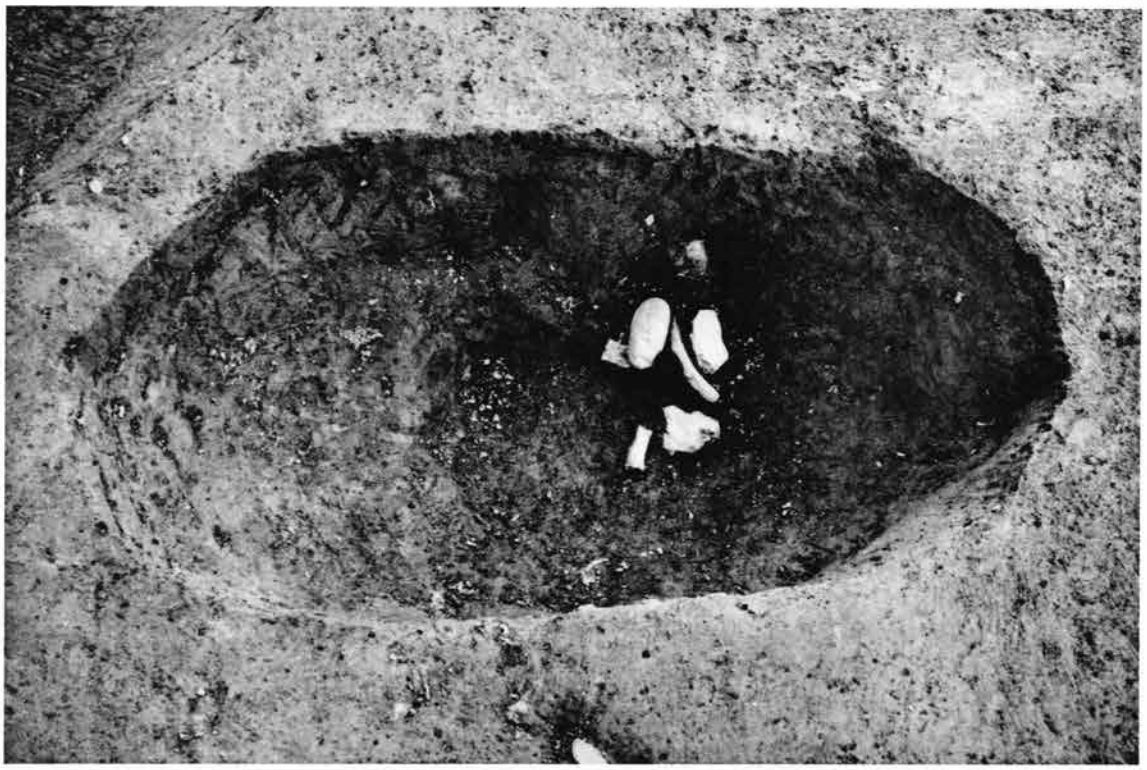
(2)　竪穴式住居跡ＳＢ87901特殊ピット（南から）

(1)　土坑ＳＫ87116（南東から）

(2)　土坑ＳＫ87116遺物出土状況（北西から）

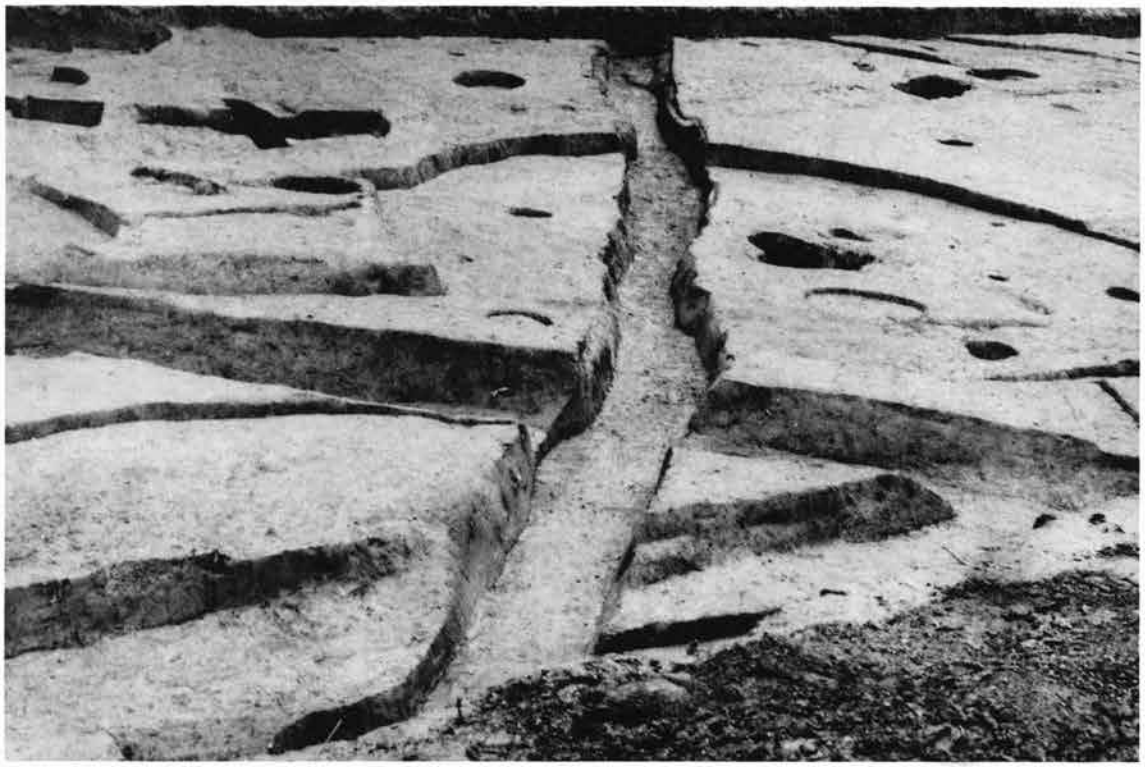


(1)　土坑ＳＫ86107（北東から）

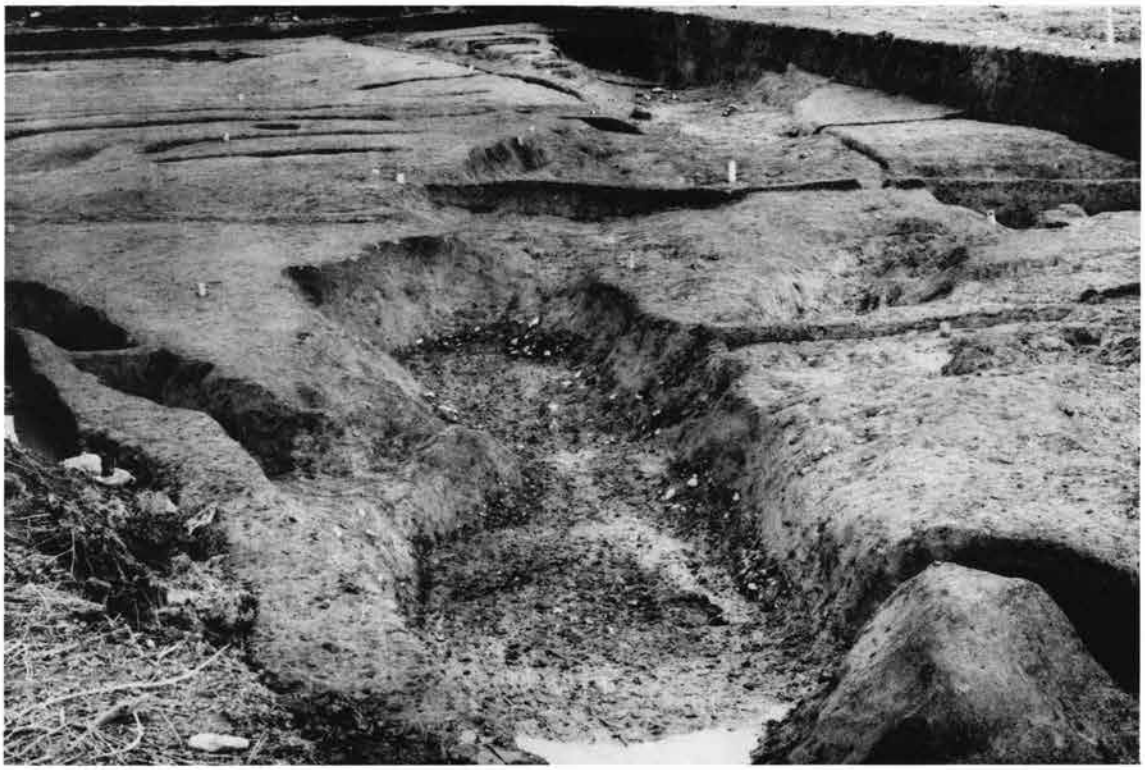


(2)　土坑ＳＫ86101（東から）

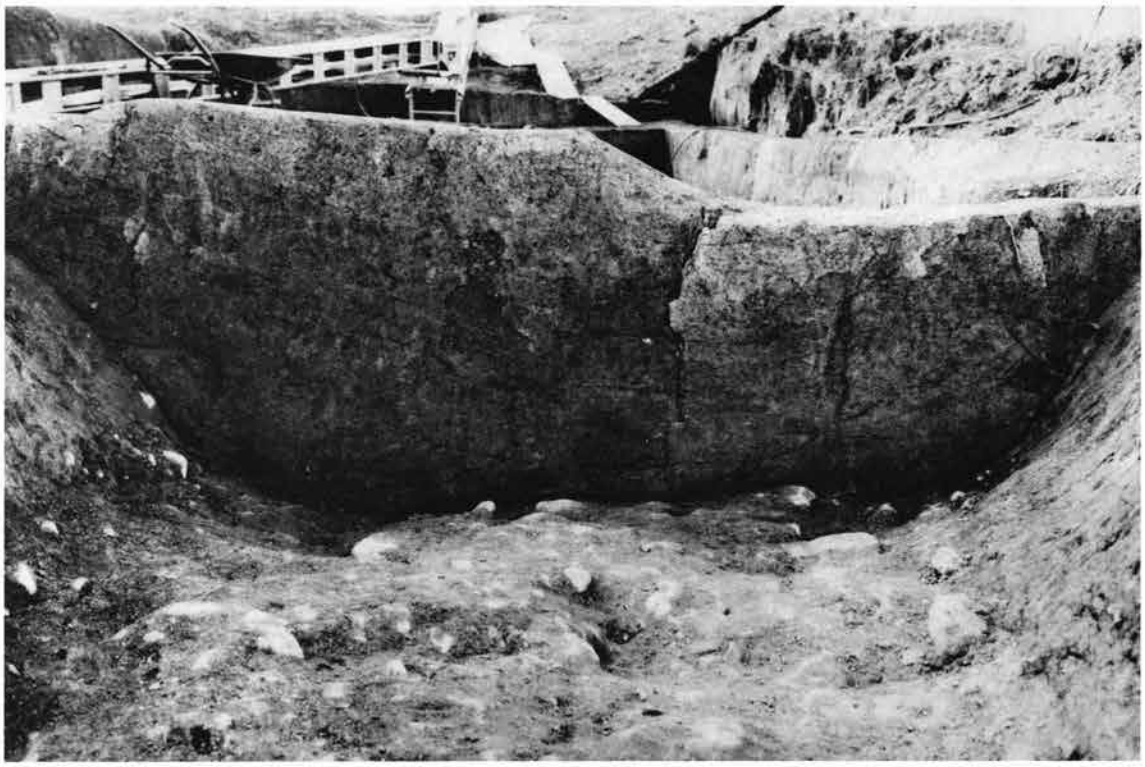
(1)　土坑ＳＫ87104（東から）



(2)　溝状遺構ＳＤ86110（北東から）

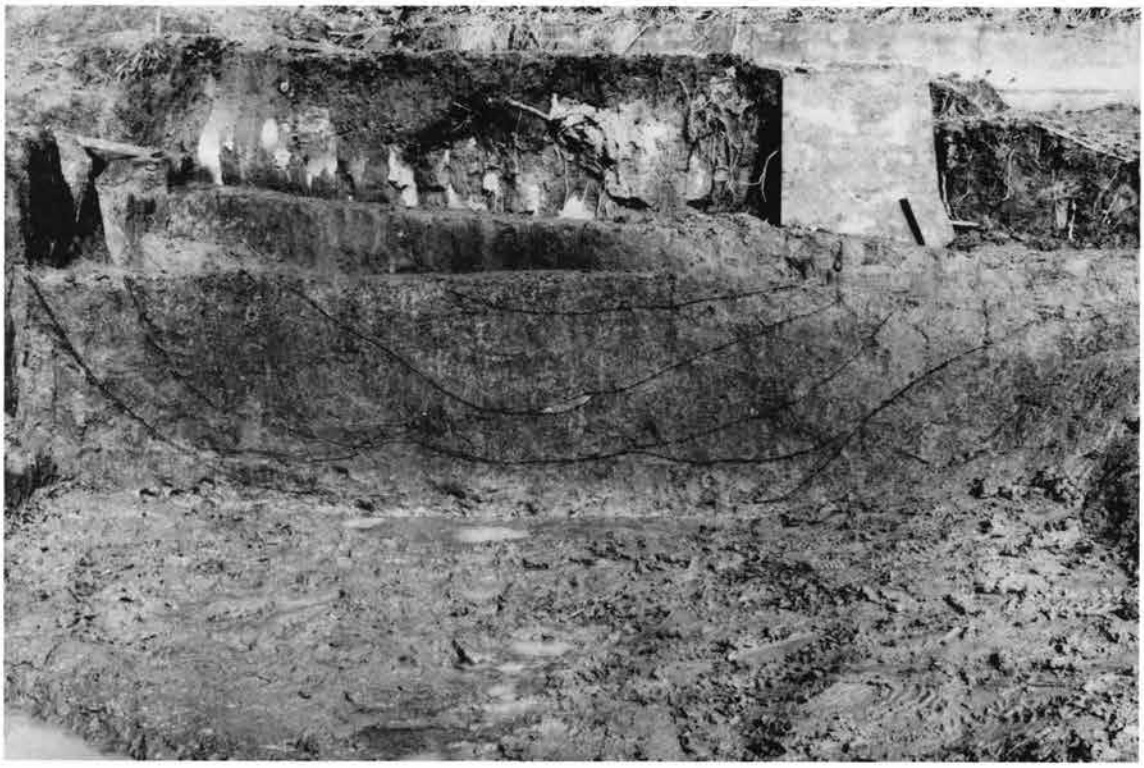


(1)　溝状遺構ＳＤ87901（北西から）



(2)　溝状遺構ＳＤ87901断面（南東から）

(1) 溝状遺構ＳＤ87909（北から）



(2) 溝状遺構ＳＤ87909断面（南から）

13-9

13-2

13-7

13-8

13-5

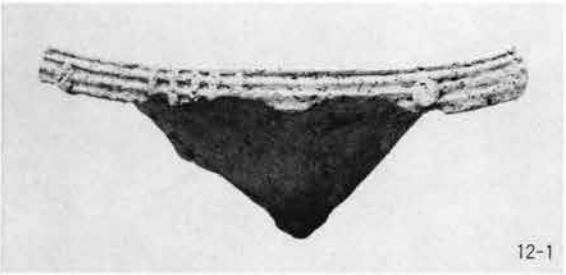
出土遺物（弥生土器１）

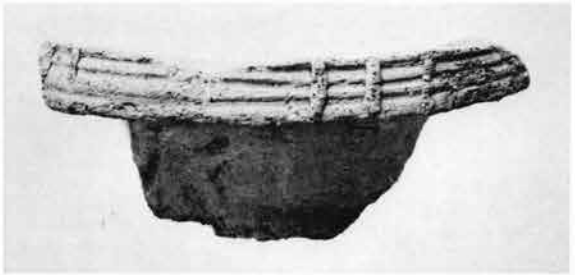
11-5

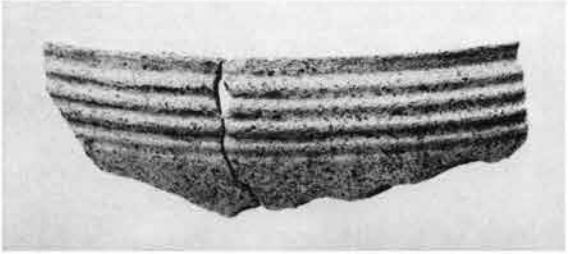
12-6

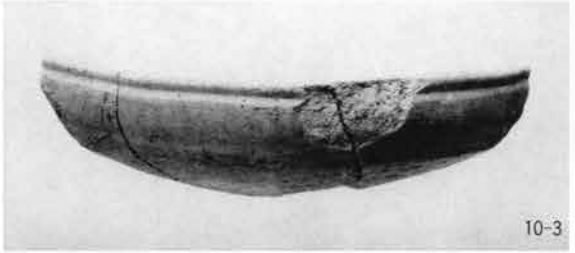
13-1

12-5


12-1






10-3

出土遺物（弥生土器２）

15-2

15-1

18-2

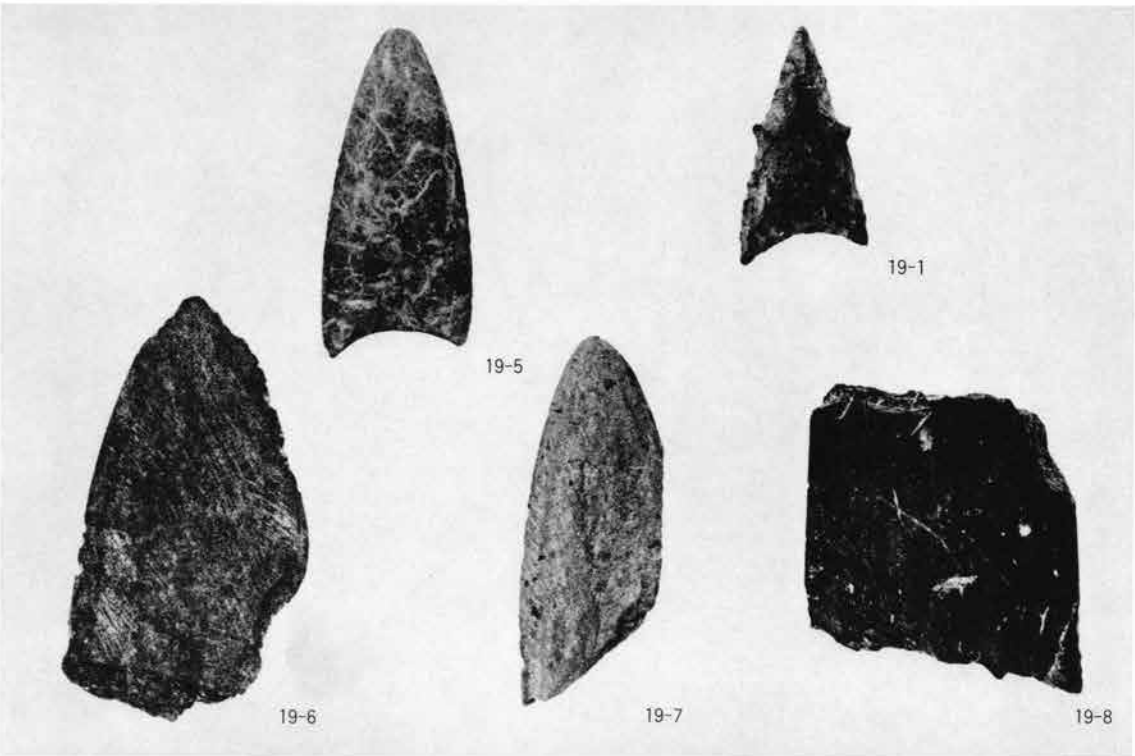
(1)　出土遺物（土師器１）

17-1

18-5

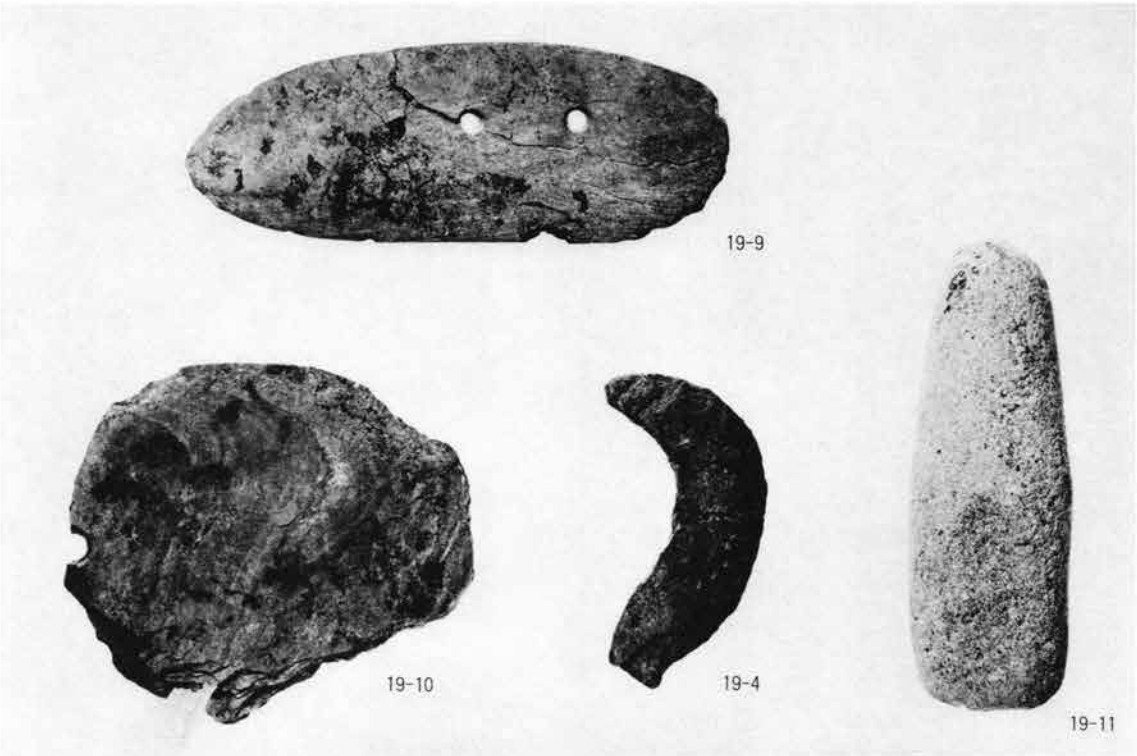
(2)　出土遺物（土師器２）

(1) 出土遺物（土師器３）



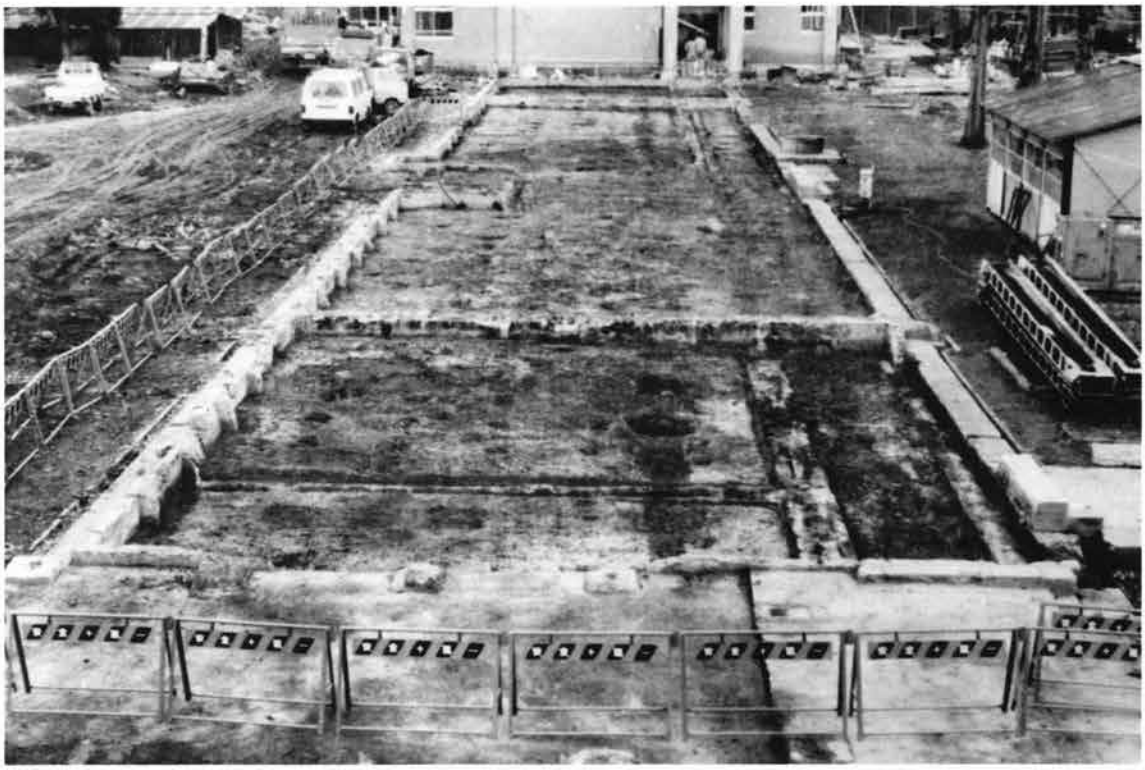
(2) 出土遺物（石器１）

(1) 出土遺物（石器２）

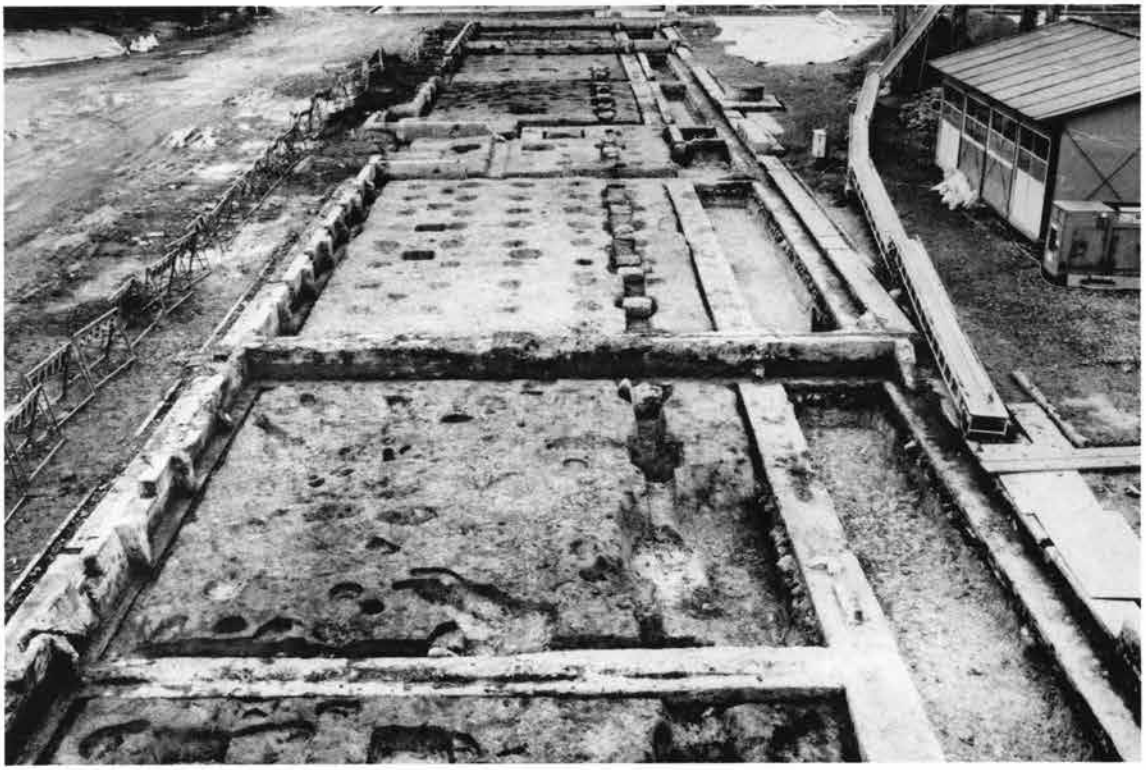


(2) 出土遺物（石器３）

図版第16　蒲生遺跡第３次



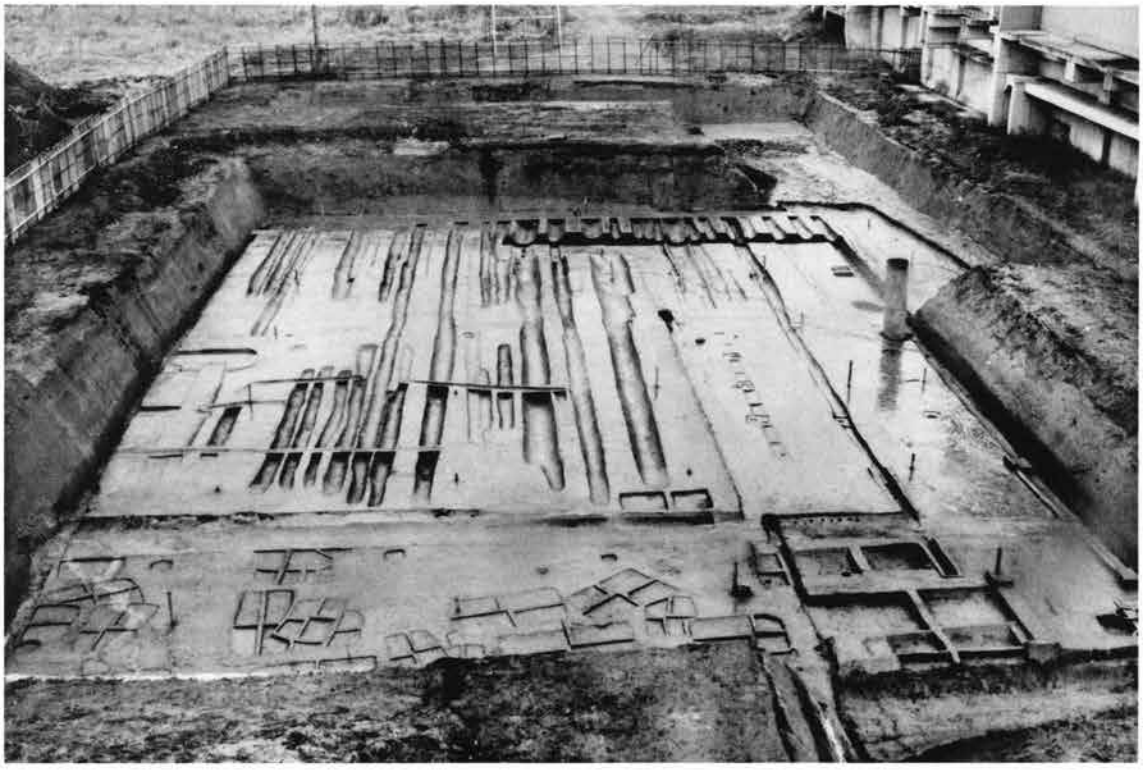
(1) 調査前全景（東から）



(2) 調査後全景（東から）

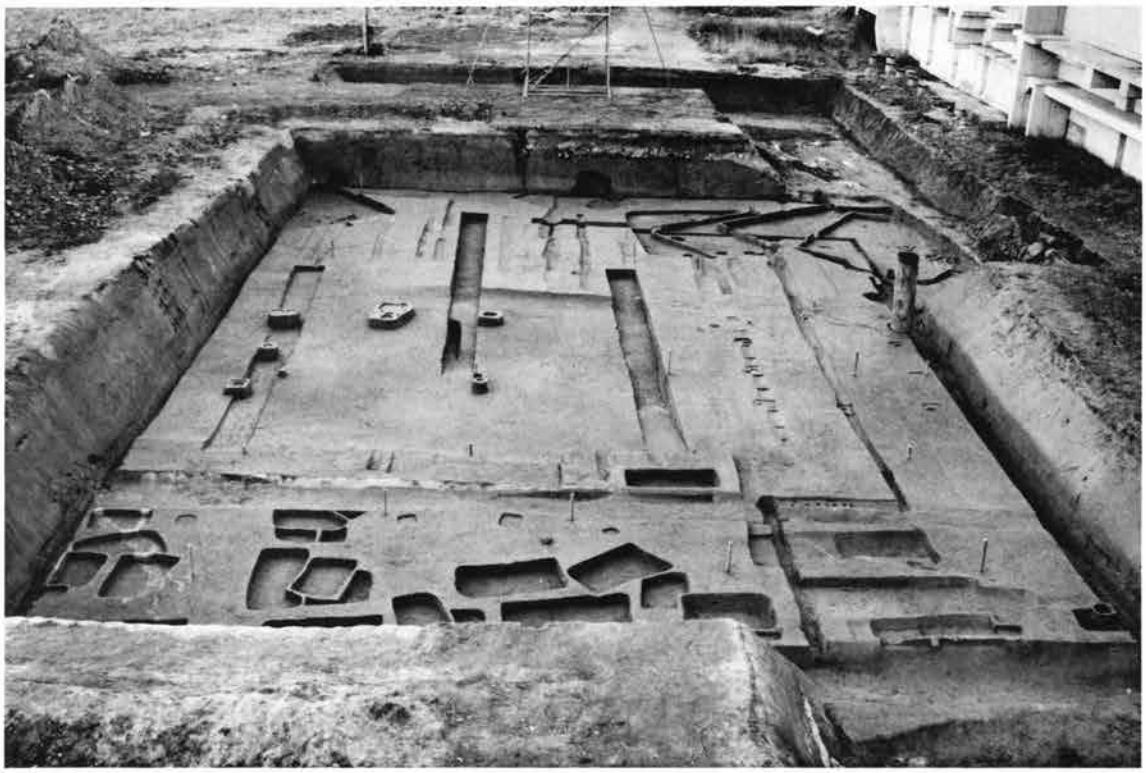
図版第17　木津川河床遺跡

(1) 調査着手前全景（西北から）

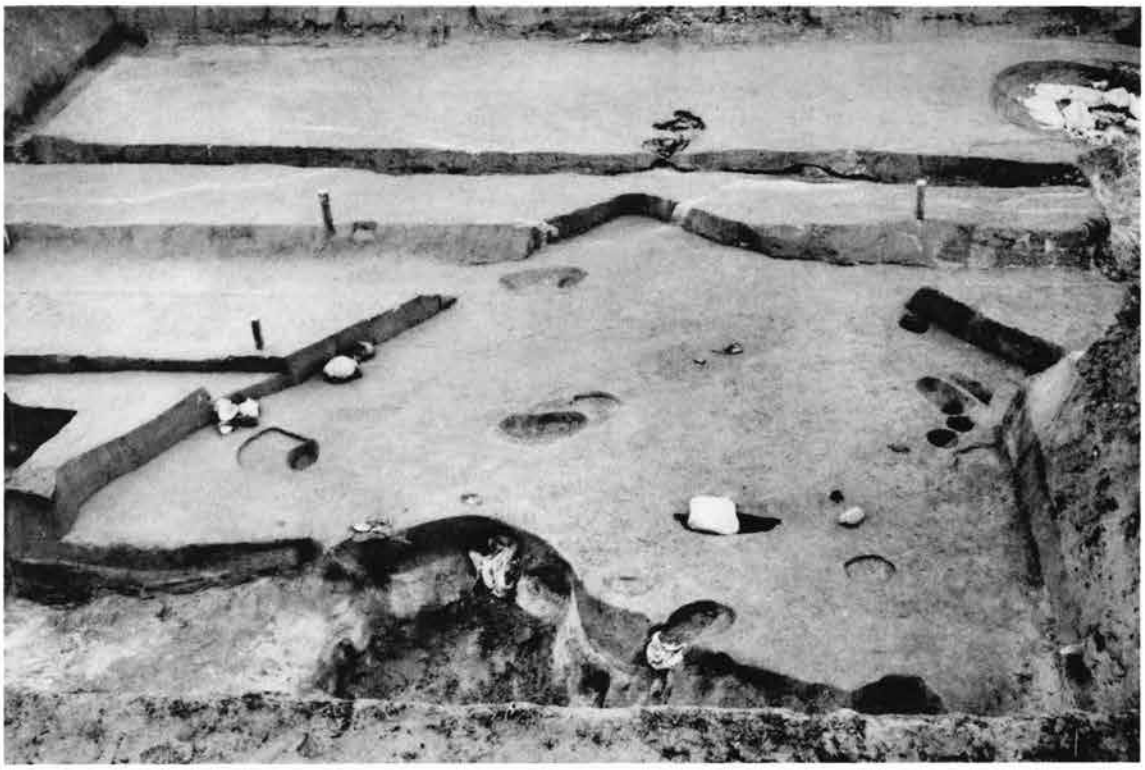


(2) 第２トレンチ検出素掘り溝群（西から）

図版第18　木津川河床遺跡

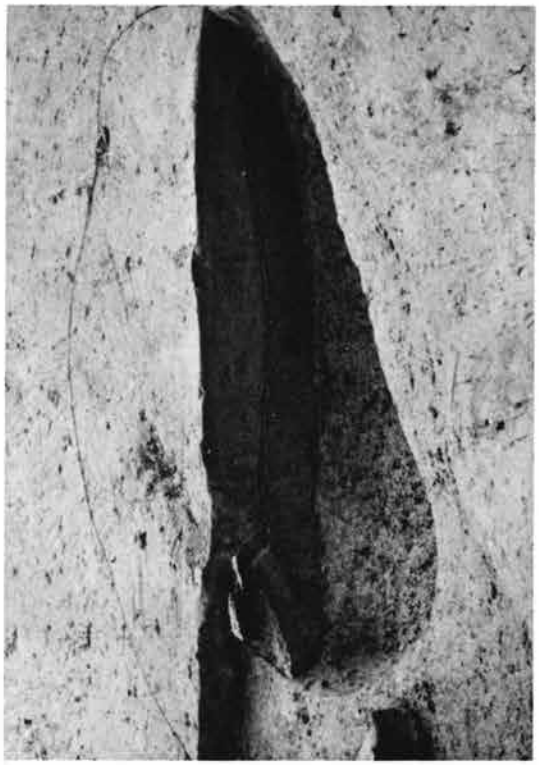


(1) 第２トレンチ検出遺構（西から）



(2) ＳＨ10全景（南から）

図版第19　木津川河床遺跡



(1)　ＳＨ10床面検出炉跡

(2)　ＳＨ10床面石皿検出状況

(3)　ＳＨ10床面土器出土状況

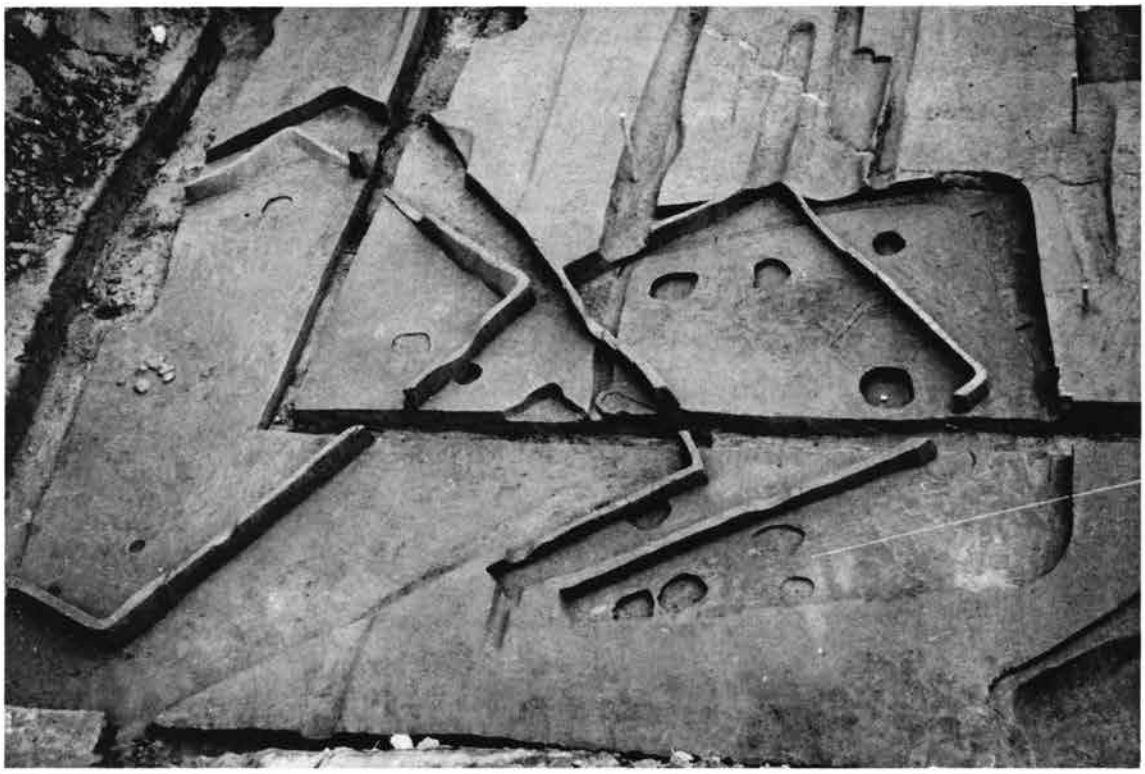
(4)　ＳＨ10床面土器出土状況

図版第20　木津川河床遺跡

(1)　ＳＨ94全景（東南から）

(2)　ＳＨ89床面遺物出土状況（西南から）

図版第21　木津川河床遺跡



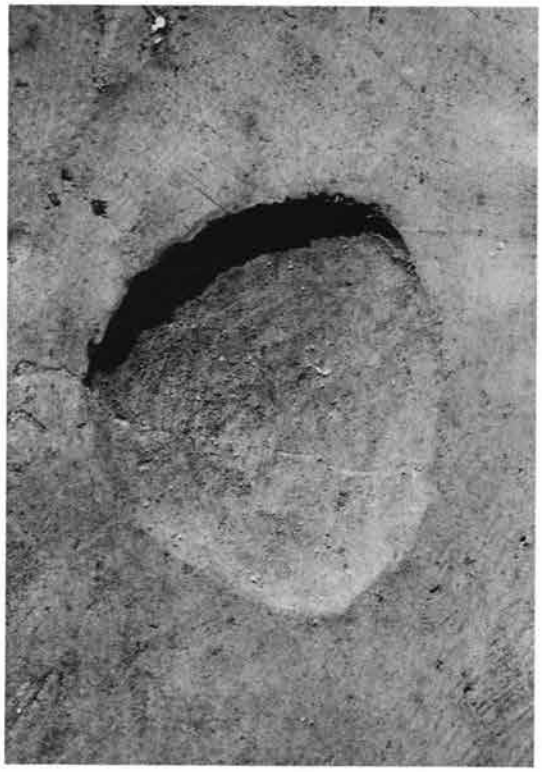
(1)　S H47・48・49・91検出状況（東から）

(2)　土坑群検出状況（北から）

図版第22　木津川河床遺跡

(1)　ＳＨ47床面検出粘土塊

(2)　ＳＨ48炉跡



(3)　ＳＨ89炉跡

(4)　ＳＸ50・87・88

図版第23　木津川河床遺跡

(1) 第1トレンチ全景（北から）

(2) 第3トレンチ全景（南から）

出土遺物(1)（a：包含層出土）

31

35

40

42

39

63

出土遺物(2)

64

74

84

87

88

90

出土遺物(3)

91

114

92

107

94

100

出土遺物(4)

110

115

111

119

108

122

125

132

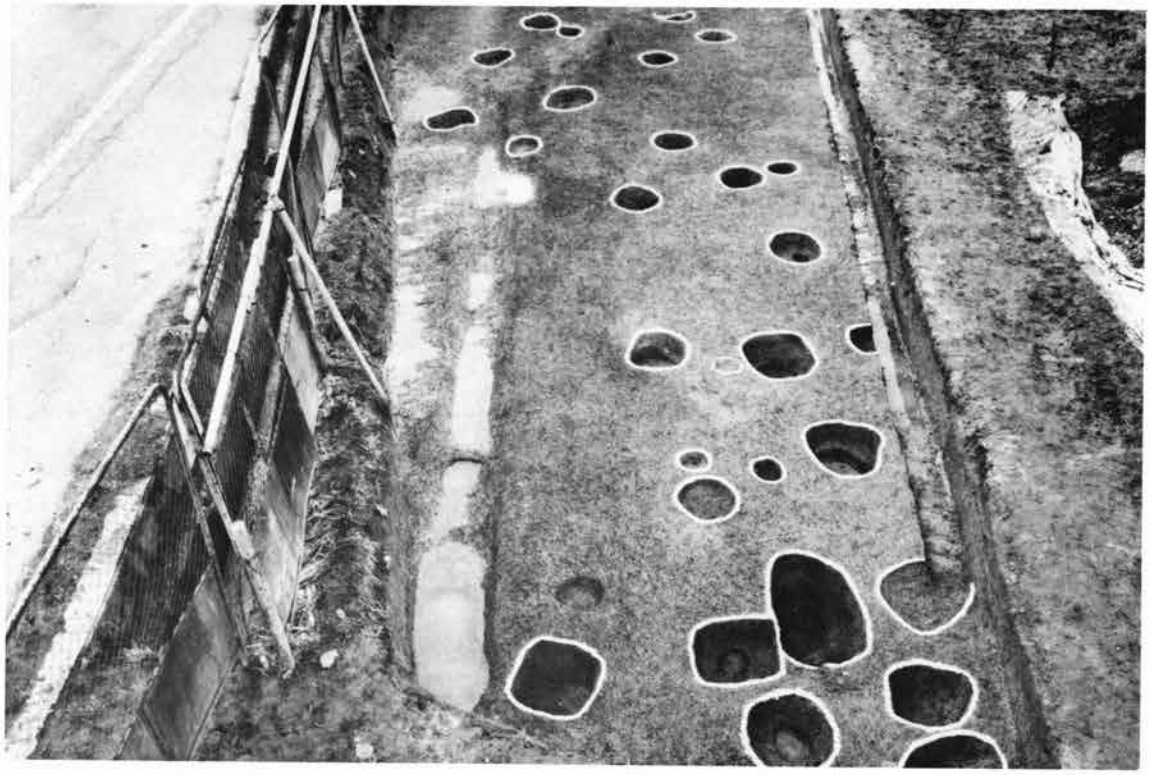
出土遺物(5)

図版第29　長岡京跡右京第251・255次

(1) 第255次調査地全景（東から）

(2) 第255次調査地（西から）

図版第30　長岡京跡右京第251・255次



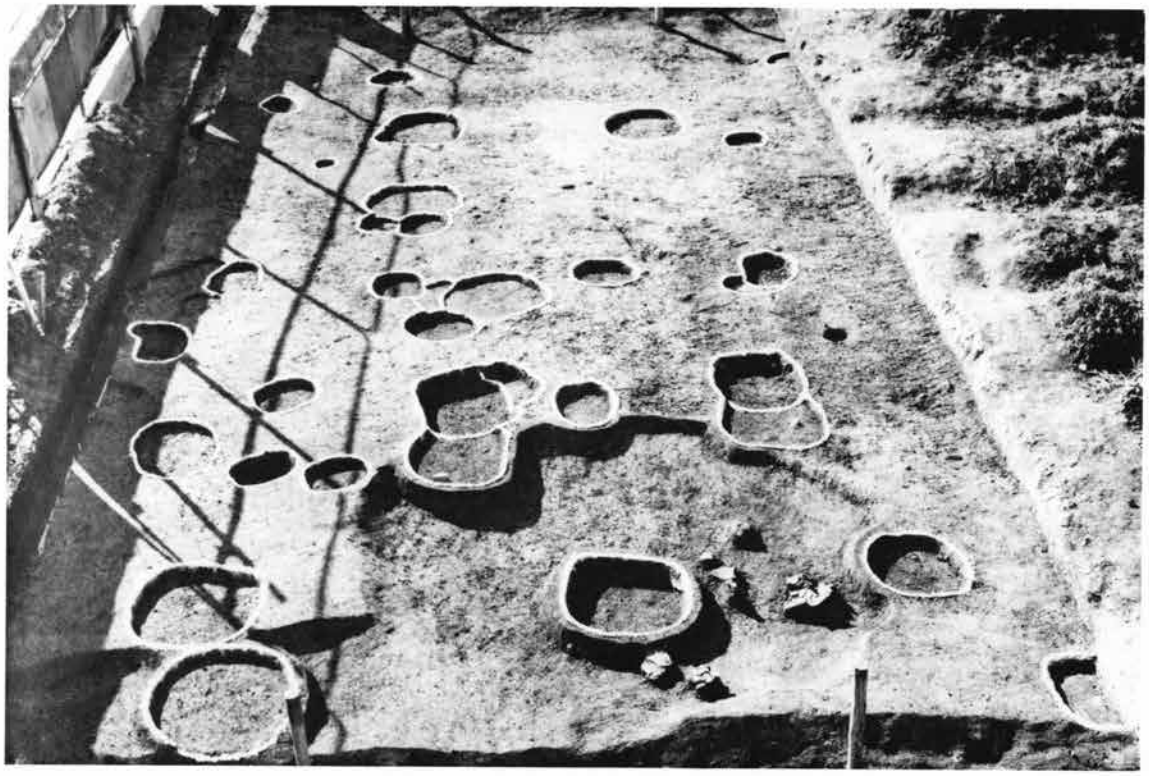
(1) 第251次・第1トレンチ（東から）

(2) 第251次・第1トレンチ（西から）

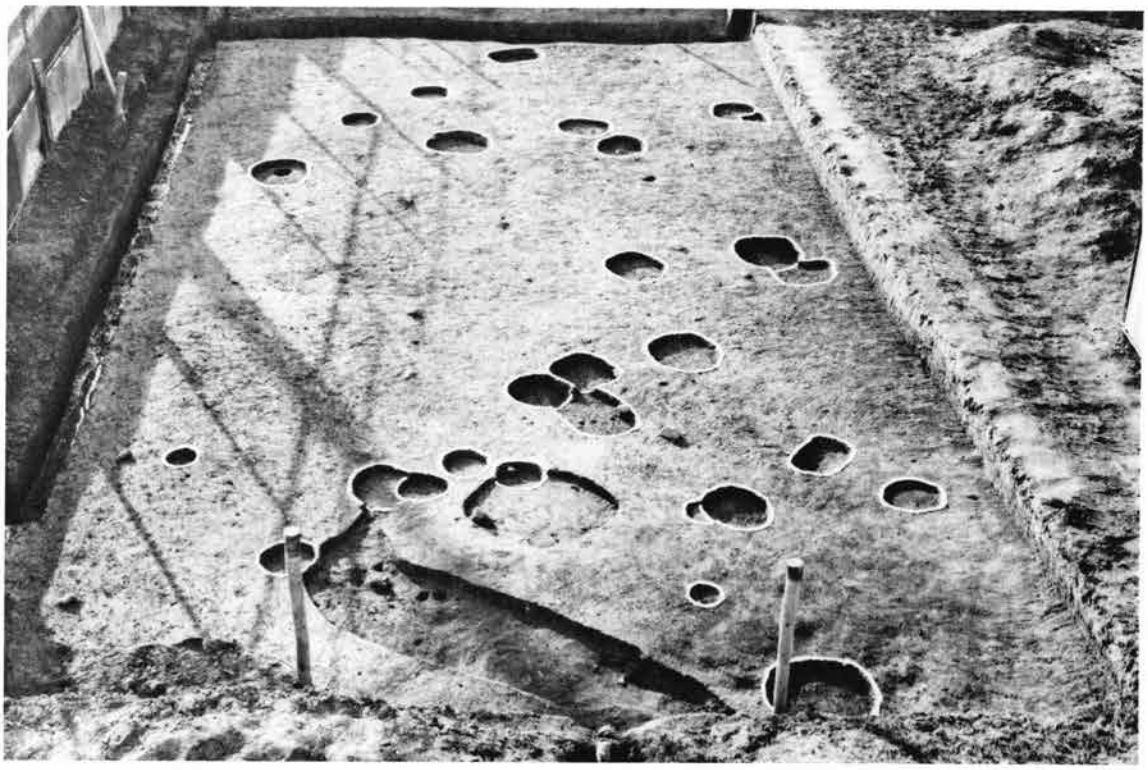
図版第31　長岡京跡右京第251・255次

(1) 第251次・第2トレンチ（西から）

(2) 第251次・第2トレンチ（東から）



(1) 第251次・第3トレンチ全景（東から）

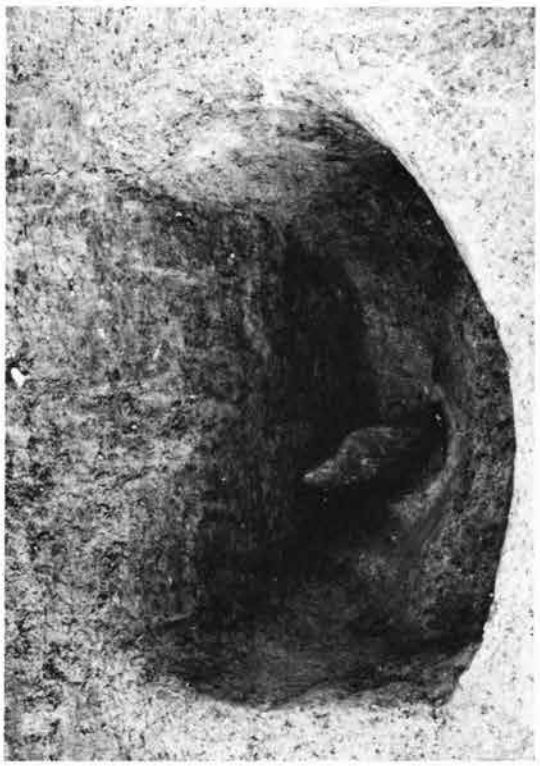


(2) 第251次・第4トレンチ全景（東から）

図版第33　長岡京跡右京第251・255次

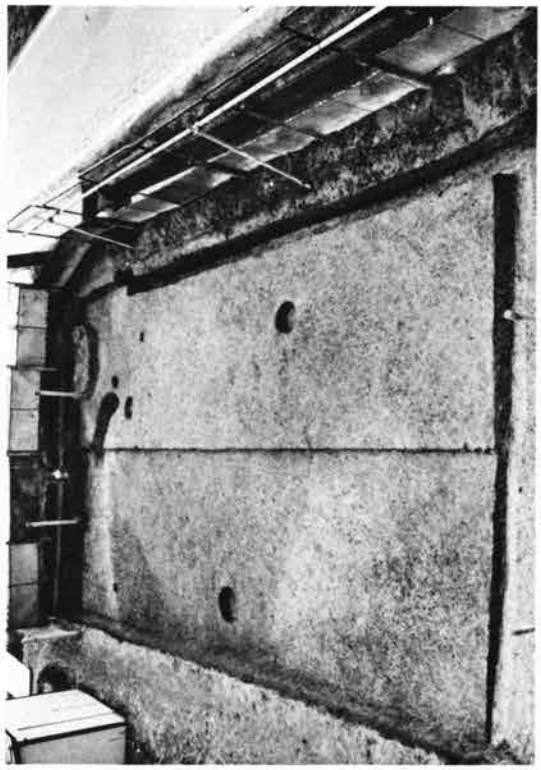
(1) 第251次・第３・４トレンチ（西から）

(2) 第251次・第５トレンチ西部（西から）



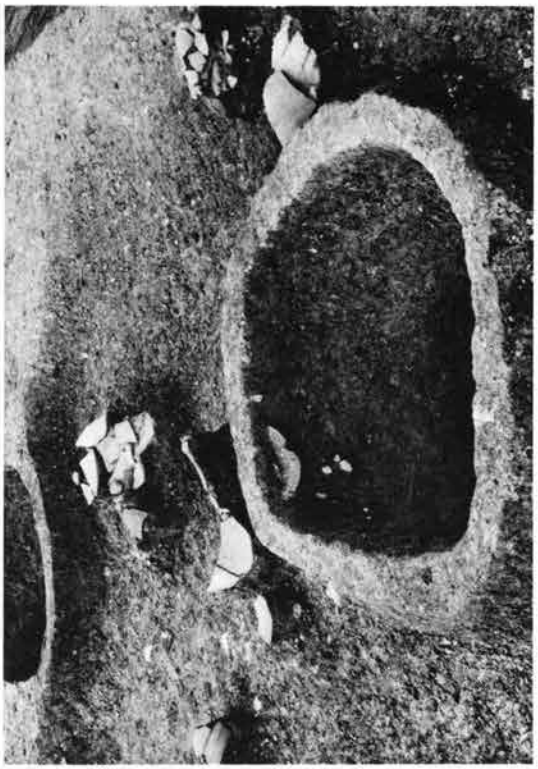
(1) 第251次・第2トレンチP.49柱根

(2) 第251次・第2トレンチP.1黒色土器出土状況



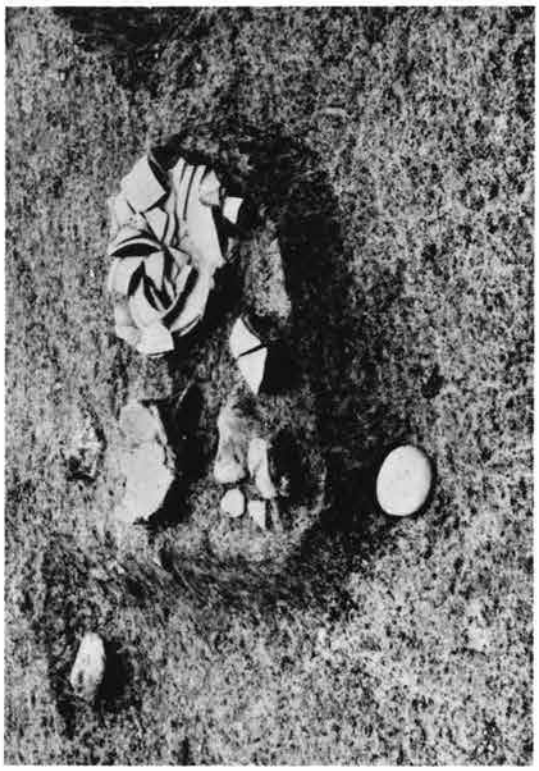
(3) 第251次・第4トレンチ下層（西から）

(4) 第251次・第4トレンチ北壁断面（東端）



(1)　S K25109遺物出土状況

(2)　S X25106遺物出土状況



(3)　S K25103遺物出土状況

(4)　S K25108遺物出土状況

9

10

11

12

14

15

16

17

18

19

20

出土遺物(1)
9～14．須恵器杯蓋，15～20．須恵器杯身

出土遺物(2)

6．土師器皿，7．黒色土器椀

27．須恵器甕，29．土師器壺，30～32．弥生土器

京都府遺跡調査概報 第30冊

昭和63年3月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）